
大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第二期）

赤城晴信

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第一期）

【Zコード】

Z8601W

【作者名】

赤城晴信

【あらすじ】

以前投稿していた同タイトルのSSを都合から一時消してしまった。

また再投稿したいと思います。

ストライクウイッチーズ×サクラ大戦の愛と浪漫の冒険活劇
を目指して頑張って行きたいです

一期分は既に完成しているので「p」が終わり次第随時一期分を書いて行きたいです

第一話「ブリタニアに浪漫の嵐」

第一話「ブリタニアに浪漫の嵐」

私、宮藤芳佳がブリタニアに来てから数日が過ぎました。

日夜坂本さんからのシゴ……厳しい訓練を受けて一人前のウイッチになれるように頑張っています！

でも……やっぱりまだ拳銃を持つ事には抵抗があります……

今日も日課である朝のお掃除をしていたのですが執務室から坂本さんの大好きな声が聞こえてきました。

美緒「馬鹿な！お前はそんな人事をむざむざ受けて来たのか！」

ミーナ「……仕方の無い事よ。上層部が私達をよく思っていないのは美緒だつて知っているでしょう？ 戦力が増えるだけマシだと思わない？」

美緒「役に立たない奴を送られても邪魔になるだけだ！ それをしかも隊長に据えろなどと！ 何処の誰を……」

美緒は机上からミーナが昨夜の会議で貰つて来た資料を引つたくり読み始めた。

ミーナ「……どんな人かと思つて美緒を呼んだのよ。同じ扶桑海軍だし、それに帝都では有名な部隊なんでしょう？」

美緒「……」

ミーナ「美緒？」

美緒「い、いや！ しかしだ！ ここは航空部隊だぞ！ 陸戦特化の、しかもネウロイとは別の驚異、降魔部隊からなぜ！」

ミーナ「女だけのウイッチ部隊。というのが気に入らない人達も居るのでしょうかね。とにかく一度話をしてみない事には……」

美緒「規律はどうする！？ お前が一番ウイッチと男の交流を嫌がつていいじゃないか！」

ミーナ「そうだけれど……この経験を見るとね」

美緒「一度に渡る帝都の危機を救い……つい先月にはガリアの重要な都市巴里をネウロイと魔物の侵攻から救つた英雄……直接会つた事は無いが話は聞き及んでいる。確かにどんな人物か会つてみたいが……しかしいきなりの隊長変更は隊の士氣に関わる！」

芳佳は執務室から聞こえて来る声についてい聞き耳を立ててしまった。

芳佳「新しい人が来るのかな？ ん……よく聞こえない」

聞いてはいけないと思いつつも、扉に耳を近づけ一人の会話を聞こうとしてしまう。

その時、急に扉が開き芳佳は頭を打つて転んでしまう。

美緒「……富藤か？ 盗み聞きはよくないな」

宮藤「す、すいません……つい……新しい人が来るんですか？」

美緒「……富藤、バルクホルンを呼んで来てくれ」

宮藤「え……あのミーナ隊長は……」

美緒「詳しい説明は後で全員にする。今はバルクホルンを呼んで来てくれ」

宮藤「は、はい！」

いつも以上に険しい表情の美緒に驚いて芳佳は逃げるようバルクホルンの部屋にと向かった。

リーネ「新しい……隊員さん？」

宮藤「うん……詳しくは聞こえなかつたんだけどね、多分そんな感じの話をしていたんだと思う」

ルツキー「この前芳佳が来たばっかなのに…？ もう来るの…？」

宮藤「ルツキーちゃん…？」

美緒に言いつけられて体力作りのマラソンをリーネと芳佳で永遠に行っている。ルツキーは木の上で芳佳達の話を聞いていたようだ。

宮藤「ルツキーちゃん、まだ私も詳しくは知らないから皆に言

「ちや駄目だよ？」

ルッキーー「うじゅー何か気になるー坂本少佐かミーナ隊長に聞きに行こうよー」

宮藤「後で説明するつて言つてたからそれまで待とう? 坂本さん今までにないくらい大きな声でお話してたから、さつとまだ話し合ひしてんじやないかな」

ルッキーー「んー気になる気になる気になるうーー」

ルッキーーの声が基地全体に響き渡つていた。

一方、その頃芳佳達ストライクウイッチーズの基地があるブリタニアに向う扶桑の戦艦があつた。

「はあ……今頃皆に説明が行つた頃かな……」

一人の青年が溜め息をついて甲板上から海を眺めていた。つい先日に巴里での激戦を終え、故郷である扶桑に帰還するものだとばかり考えていた彼は同僚の男が持つて来た一通の書状に驚愕した。

「それじやあなー俺は巴里の街を堪能させて貰うぜ」

「ま、待つてくれ加山! 何かの間違いじやないのか! ?」

「俺だつて詳しい事は知らないさ、米倉中将より更に上、軍上層部の決定だ。……帝劇の皆には俺から言つておくから」

「そうか……第501統合戦闘航空団……ネウロトイとの戦闘に特化したウイッチ部隊だと聞いているが……」

「お前もトコトン女だらけの部隊に縁があるなあ。 程々にしておけよ? 流石にそろそろ誰かに刺されちまうぞ?」

「冗談はよしてくれよ。光武の改造はどうなんだ?」

「うむ……光武にストライカーコニットに使われている魔道エンジンを利用した飛翔用のウイングを取り付ける突貫工事だ。 無茶苦茶だぜ本当に」

「やれるかどうか分からぬが……頑張つてみるよ」

「それでこそだ。俺も色々調べてみたが、配属先にショーをやるような場所は無いみたいだから。 今度こそモギリはやらなくて

「いいみたいだぞ」

アディオス、と残し青年の同僚はいつものように去つて行つた。
それが数日前の事。

青年の搭乗機「光武F2」の魔改造とも言える強引な改造が終わつてすぐに、青年はブリタニアに向けて船で旅立つていた。

船員「大尉！ 前方に複数のネウロイです！」

「何！ 今行く！」

船員の声に青年は艦の中によ走つて行く。

「数はどれくらいなんだ！ 場所は！」

船員「駄目です！ この艦の装備では……正確な数や距離までは！
しかし、ウイッチーズの基地に向かつている物と思われます！」

「そうか、ん……？ なんだこの動きは……？」

青年はレーダーを見つめる、船員は彼が何を気に掛けているのか数秒遅れて気がついた。

船員「座標がズれているだけでは……？ なぜ数匹だけが離れているんでしょうか……？」

「……まさか、陽動か？」

船員「そんな馬鹿な！ ネウロイがそんな事を……？」

「念のためだ。光武の準備を！」

青年はこれまでの経験から、嫌な予感を確かに感じ取つていた。

リーネ「富藤さん！ 私と一緒に打つて！」

芳佳「うん！」

ネウロイの回避位置を予測し芳佳とリーネは同時に射撃を行い、確実に仕留めた。

奇襲を仕掛けて来ていたネウロイを一人の力で撃退する事が出来たのだった。

ミーナ「リネットさん、出来たのね」

リーネ「私、はじめて皆の役に立てた！ ありがとう富藤さん！」
一緒に出撃していたミーナとエイラは微笑んで一人を見つめている

る。

美緒「待て……なんて事だ！」

喜びを爆発させ、抱き合っていた芳佳とリーネの耳に別働隊として動いていた美緒の緊張した声が響く。

ミーナ「何があつたの坂本少佐！」

美緒「囮の囮だ！ 大きく迂回して直接基地を叩こうとしている最後のネウロイが居る！」

ミーナ「そんな……！ 皆早く基地に！」

エーリカ「私達じゃ……ミーナ達の方が早い！」

エイラ「無茶言つなヨナ！ 私達はネウロイの位置も把握出来てないんだゾ！？ 基地の真上で向かい撃てつテノ力？」

美緒「クソ！ とにかく早く基地に！」

「こちらは、扶桑海軍所属の大神一郎大尉です。ネウロイ撃退の為出撃します！」

ウイッチ達が使つてゐる特殊なインカムに青年の声が響く。

ミーナ「お、大神大尉！ しかし……」

大神「改造した光武は現状で數十分なら飛行可能です！ 時間稼ぎ位なら出来る！」

美緒「大神！ 出来るんだな！」

ミーナ「美緒！」

美緒「今は大神に頼るしかない。大神、ほんの数分時間を稼いでくれればいい！」
バルクホルン「皆急げ！ 何分持つか分からない、出来るだけ早く帰還するんだ！」

ウイッチ達は急いでその場から基地にて向かつて飛び始めた。

甲板上では、改造された光武の射出準備が行われていた。

整備兵「大神さん！ 無茶です！ 飛行テストも終わっていないんですよ！？」

大神「大丈夫だ、俺は皆の整備を信じてゐる！」

整備兵「大神さん……どうかご無事で！」

大神「ああ」

光武の背後に取り付けられた魔道エンジンが火を吹きはじめる。

大神は靈力を展開して魔道エンジンにエネルギーを送つて行く。

大神「（魔力も靈力も大元では同じ物……出来るかどうかは俺次第だ……）」

大神「行くぞ！ 巴里華撃……そうか、今はまだ正式には何処にも所属してないのか。じゃあ……光武F2、出撃！」

光武F2は轟音を上げて甲板上を疾走し、ついに空中にと舞つた。

大神「凄い加速だ……！ ネウロイの位置は……あっちか！」

流石に帝劇の皆もまさか今自分がブリタニアの空を飛んでいるとは思つまい、と一瞬思い、大神はネウロイの元にと飛翔して行く。

ルツキー「ああ！ 見つけた！ ……って何あれえ！」

バルクホルン「あれは……？ 降魔用の靈子甲冑！？ 靈子甲冑が

空を飛んでネウロイと戦闘している！？」

美緒「大神が持たせてくれたか！」

高速で飛行するネウロイのすぐ後ろに大神の光武が迫つていた。

エーリカ「見たところ装備は剣が一本だけみたいだし、後は私達に」

大神「狼虎滅却」

ウイッチ達のインカムに再び大神の声が届く、彼女達には大神が何をしようとしているのか理解出来なかつた。

ルツキー「ええ！？ 剣を構えてるよ！？」

ペリーヌ「何を馬鹿な事を、普通の剣でネウロイを倒せる訳が

「

大神「紫電一閃！」

カツと、閃光が走り、ネウロイのコアを大神の太刀が確かに捉え、真つ二つにした。

ネウロイは崩壊を始め、ウイッチ達は呆然とそれを見つめる。

ペリーヌ「嘘……ですわ」

エーリカ「ネウロイを……斬っちゃつた」
シャーリー「こいつは……びっくりだな」
美緒「……」

リーネ「皆さん！」

芳佳「ネウロイは……つてあれ？ もう誰かが倒しちゃつたんですか？」

ようやく到着し、 一体誰が倒したんですか？ と問う宮藤の言葉に、 それを見ていた者達は無言で光武を指差す事しか出来なかつた。

それから数刻後、 ストライクウイッチーズ基地内執務室、 執務室内にはミーナ、 美緒 バルクホルン、 そして大神一郎の姿があつた。

扉の外にはギュウギュウに詰めてウイッチ達が内部の様子を探るつと躍起になつていた。

ミーナ「書状は受け取りました。 しかし、 私達としましても……」

大神「分かつています。 今回の件には自分も少しキナ臭さを感じます。 既に十分に機能している隊にいきなり自分が入つても……隊長になるというのは受けかねます」

ミーナ「ですが上の決定のようですし……何より先程の活躍を見ると……」

大神「いえ……あの、 ミーナ中佐、 階級はミーナ中佐の方が上なので敬語で無くとも……」

ミーナ「あ、 そ、 そうね。 しかし大神大尉のこれまでの戦歴や先程の戦闘を見るとタメ口と言つのも……」

バルクホルン「ウイッチはその特性上軍曹から階級がスタートするからな、 このような事も起こり得るだろうが……だがどうする、

このままミーナに隊長を続けて貰えるのはこちらとしても有り難い事だが、 これ以上上層部に目を付けられるのも避けたい所だぞ」

大神「何か言つてきいたら自分が言い訳しますよ。ミーナ隊長の補佐官という事ならば文句は言われど処分とまでは行かないでしょう」

ミーナ「そうですね、では大神大尉にはバルクホルン大尉や坂本少佐のように私の補佐をして頂きます」

バルクホルン「よろしく頼む、正直、先程は驚かされたぞ」

大神「自分も無我夢中でした。よろしくお願ひしますバルクホルン大尉」

美緒「……」

ミーナ「どうかしたの美緒？ そう言えれば朝からそんな具合だったわね？」

大神「坂本さんですね、お話は伺っています、よろしくお願ひいたします。」

美緒「うむ……私も色々話を聞いているぞ」

美緒は怪訝な目付きを大神に向ける。

大神「自分が……何かしたでしようか？」

美緒「先日も扶桑海軍の同僚から聞いた……帝国華撃団及び巴里華撃団を率いた大神大尉はその立場を良い事に風呂場に突入したり13股を掛けるトンデモない男だと言う噂をな」

大神「そ、そんな物は事実無根の噂話です！ 自分は特定の女性とお付き合いもしていません！ それを13股など何かの間違いです！」

帝都や巴里に居る隊員達の耳に入つたら色々と問題になりそうな発言であつたが、大神は必死に坂本に身の潔白を証明しようとしている。

ミーナ「大神大尉……先に言つておきますが、ウイッヂ達と必要以上に交流を持つのは控えてくださいね」

大神「ミーナ中佐まで、自分は決してそのような事は！」

ミーナ「違うんです、大神大尉の事を疑っているのではなく、この隊では必要以上に男性とウイッヂが交流する事を」

その時、ドタドタ、と音を立てて盗み聞きしようとしていたウイッヂ達が執務室にと雪崩れ込んで来た。

バルクホルン「こ、コラお前達！何をやって」

ルツキー「うわー！これがさっきの機械に乗つてた人！？ねー名前は！？」

大神「お、大神一郎つて言うんだ」

ルツキー「イチロー？変な名前えー！イチロー！イチロー！」

大神「なんかデジャヴだな……」

エーリカ「びっくりしたよーネウロイを斬るなんて」

シャーリー「そうだぜ、一体どうやつたんだ？」

芳佳「あ、あの私宮藤芳佳つて言います！同じ扶桑の出身です！」

よろしくお願ひします！」

一斉に大神を取り囲むウイッヂ達を見て、ミーナは静かに頭を抱えた。

次回予告

バルクホルン「我が祖国はネウロイに蹂躪され炎の中に没した。

もう私には戦う事以外何もない。たつた一人になつても……だが

あの男が来てから……次回『君、死にたもう事なれ』」

第一話「君死にたもう事なけれ」（前書き）

ストパン×サクラ大戦SS

第一話「君死にたもう事なかれ」

第一話「君死にたもう事なかれ」

私、 宮藤芳佳がブリタニアに来てから更に数日が過ぎました。
なんと驚いた事に新しい隊員さんは男の方です。

坂本さんは警戒するように皆さんに言つていましたが、 そんなに
悪い人には見えませんでした。

早くもルツキーちゃんは打ち解けているようです。
私も……大神大尉がどうして戦い続けているのか聞いてみたいので
すが……

ルツキー「ネバネバーネバネバ～ねえイチロー、 扶桑の人は本
当にこれをおいしいって食べるの？」

大神「ああ、 納豆は美味しいし日持ちもいいから好んで食べる人
は結構多いんじゃないかな？」

ペリース「こんな腐つた豆なんて、 食べられた物ではありません
わ！」

朝食の時間、 大神の隣にはルツキーだけが座り、 後のウイツ
チ達は微妙に距離を取つて朝御飯を取つている。

芳佳「でも納豆は体にいいし、 坂本さんも好きだつて言つてまし
た」

ペリース「さ、 坂本さんですつて！？」

ルツキーへのおかわりを持つて来た芳佳が会話に割つて入る。
ペリースとの軽い言い争いをしている芳佳からルツキーの分のお
かわりを受け取り配膳してやる大神。

大神「（しかし……女性だけの部隊というのも慣れたつもりだつた
が……今日は何故か警戒されているような……）」

ルツキーと仲良くしていいる現在も常に警戒されているような目線

を感じるし、ここに来て数日がたつたがまだ隊員達とろくに会話していない状態だ。

大神「（俺が入ったせいで隊の士気が下がっては困る……ある程度は仲良くならないとな）」

大神は帝都、巴里での生活を思い返す、着任した当初は隊員達とも仲良くなれず空回りする事もあった。だが最後には皆で力を合わせて危機を乗り越えて来たのだった。このストライクウィッシューズでも皆と力を合わせてやつていこう。そう決意する大神であった。

大神「なあルツキー、俺何か悪い事したかな？」

ルツキー「うじゅ？」

朝食を終え、皆各自に訓練や整備に明け暮れている時間である。

大神はルツキーと整備に向つ途中の通路で、訓練飛行を行う

バルクホルンとエーリカを見上げてそう呟いた。

大神「どうしてか分からぬけど、どうやら俺は皆から警戒されているみたいなんだ」

ルツキー「……んーとね、んーと」

ルツキーは何かを知っているようであつたが、中々話だそうとしない。その様子を見て、大神は笑顔を浮かべてルツキーを撫でてやる。

大神「いや、いいんだ。いきなり男の俺が入つて来たら戸惑のは当たり前だよな。無理に言わなくていいよ」

ルツキー「あのね、あたしが言つたって言つのは内緒にしてね？」

大神「ルツキー？」

ルツキー「実はね……ミーナ中佐がイチローの来た日の夜にイチローに内緒で皆を集めたの、そこでね「大神大尉とも他の男性隊員と同じように必要以上に接触しては駄目だ」って言つたの」バルクホルンとエーリカが幾つもの複雑な動きを重ねて訓練を続けている。大神の目には多少バルクホルンが遅れているように見え

た。

大神「そうか、この隊では元々ウィッチと男性の接触は禁じられていたのか。それじゃあ仕方のない事だね」
ルツキー「仕方ないよ！ だつてイチローはちゃんとしたストライクウィッチーズの一員だもん！ 皆で仲良くした方が絶対にいいよ！」

自分の為に声を荒げてくれるルツキーを嬉しく思い、また大神はルツキーを撫でてやる。

大神「だからルツキーは仲良くしてくれるのかい？」
ルツキー「うん！ なんかお兄ちゃんみたいだし、優しいから！」

大神「ありがとうルツキー、嬉しいよ」

そう言って通路を歩いていると、ミーナと美緒が訓練飛行を済い表情で見守っていた。

ミーナ「……遅れがちね」

美緒「完璧主義のバルクホルンらしくないな、次のシフトは外しあほうがいいか」

ミーナ「エースが使えないのは少し不安ね、あら大神大尉」
ルツキーと歩いていた大神を見つけてミーナが声を掛けて来る、

美緒は少々訝し気な表情で一人を見つめる。

大神「お疲れ様です。これから光武の整備に向かいります、バルクホルン大尉は……調子が悪いのでしょうか？」

美緒「わかるのか？……普段はああではないのだが」

ルツキー「ねーイチロー行こうよー！」

大神「ああ、そうだね。では、自分はこれで失礼します」

年齢は大神の方が上だが、階級ではミーナ達の方が上なので敬語でミーナ達に挨拶をしてから整備室に向う。

美緒「……ルツキーの奴、すっかり大神を気に入っているようだな」

ミーナ「そうね……一応接觸は禁止だと伝えたのだけれどもね……」

美緒「うむ……バルクホルンの事、どうする？」

美緒は一拍置いてから本題にと戻る、ミーナは少し黙つた後に思い当たるふしをあげる。

ミーナ「……宮藤さんが来てから、色々と思つ所あるみたいなの」

美緒「宮藤に……？ うむ……組ませてみるか」

美緒の一言で、宮藤とバルクホルンは一時的にペアを組む事につた。

整備兵「大神大尉、もう休んでください。後は我々に」

大神「いや、いいんだ。光武整備のノウハウを伝えるだけ伝えておきたいんだ」

整備兵「……ですが、先程ウィッチの皆さんが集まつていたようですが」

大神「女性だけの集まりに俺が入つても邪魔になるだけさ、それとも俺がいたら邪魔かい？」

整備兵「いえ！ そんな事はありません！」

整備兵は急いで否定する、リベリオン系の男性であつた彼はシゲシゲと大神を見つめている。

大神「どうかしたかい？」

整備兵「いえ……自分は、どうやら思い違いをしていたようです」

大神「ん？」

整備兵「自分や他の国の整備兵達は新しい隊員が男だと聞いて、内心やつかんでいました。しかし扶桑の整備兵達だけは大神大尉を悪く言つていなかつたのでどんな方なのかと思つていましたが……下士官である自分にも威張るような事をせず整備まで手伝つてくれる。貴方になら安心してウィッチの方々を任せられます」

大神「任せると……そんな大袈裟な」

大神は笑つて整備用具を整備兵に渡した。

ルッキー「ねーイチロー！ なんで来ないのー？ ケーキ無くなつちやうよー？」

芳佳「大神大尉の分も用意しているので早く来てください」

その時、整備室までルッキーと芳佳が大神を迎えてきた。

整備兵「後は大丈夫です、どうぞ遠慮なさらずに」

大神「そうか……すまない」

そう言つて、大神は整備室を後にした。いい上官だと日々に咳く整備兵を見てどこか誇らしげな扶桑の整備兵達であった。イチローの分のケーキまで食べちゃおーと残してルッキーは元来た通路を走つて行つた。

芳佳と大神だけが二人で宿舎内のオープンカフェに向う。

芳佳「あの……大神大尉」

大神「なんだい？ 後階級はいいよ」

芳佳「はい！ 大神さん……大神さんは、今まで帝都と巴里で戦つて来たんですよね？」

大神「ああ、そうだよ。どうかしたのかい？」

芳佳はモジモジと何かを喋るうとしてはつつかえている、そして意を決したのか身構えて大神に言葉をぶつけた。

芳佳「大神さんは……どうして戦つているんですか？」

大神「どうして戦つているのか……か。守りたい物や、人が居るからかな」

芳佳「守りたい……からですか？」

芳佳は自身が戦う理由である「守りたい」という言葉が大神の口からも出て来た事を嬉しく思つた。

大神「ああ、尊敬する人達は皆信念を持つて戦つている。俺も自分が出来る範囲で守つて行きたいと思つてるんだ」

芳佳「でも、私怖いんです。いつか人を撃つ事になるんじゃないかつて」

大神「……昔、心から尊敬していた人を撃たなければならない事があつた」

芳佳「……」

芳佳は大神の口から語られる言葉を真剣な表情で聞いている。

大神「戸惑い、迷つて、躊躇して、結局俺は敵になってしまったその人を助ける事が出来なかつた」

芳佳「大神さん……」

大神「人を撃たなくとも大切な物を守る、芳佳君はその信念を持つて戦うのがいいかもしねない。でも、決めるのは君自身だ」

芳佳「……はい」

大神「大丈夫だ、俺がこの部隊に居る限り絶対に人を撃たせたりはしない」

芳佳「大神さん……ありがとうございます！」

大神の言葉に芳佳は笑顔を浮かべた、まだ迷いはあるようであつたが、幾分か芳佳の気持ちは楽になつたようであつた。

芳佳「じゃあ、私この後リーちゃんと坂本さんとバルクホルンさんと訓練があるので」

芳佳は大神をオープンカフェまで大神を送ると訓練にと向う。

芳佳「大神さん！」

芳佳の声に大神が振り向くと芳佳は笑顔でこちらを向いていた。

芳佳「私、まだ……怖いですけど……頑張ってみます！ 皆を守れるように！」

大神「ああ、頑張ってね、芳佳君」

笑顔で芳佳を送り出した大神を遠巻きから見つめるカールスラントの二人。

エーリカ「ふうーん、やるねえ大神大尉も」

ミーナ「……どうしたものかしら」

エーリカ「もうさ、いつその事で大神大尉と仲良くなつちゃえばいいじゃん。悪い人ではなさそうだし」

ミーナ「そういう訳にもいきません！ 他の者達に示しがつかなくなるわ」

ミーナはそう言い残してオープンカフェの席を立つた。

エーリカ「どこ行くのー？」

ミーナ「富藤さん達の訓練を見に行つてくるわ」

エーリカは溜め息をついて大神にじやれるルッキーを遠巻きから眺めた。

エーリカ「ミーナもトゥルーデも肩肘張らずにあなればいいのに」
そう呟くと、エーリカ自身も立ち上がって大神達の席にと親睦を深めに向かった。

美緒「ネウロイか!?」

空中での訓練中に下士官が出したプレートにはネウロイの襲来を伝える記載がされていた。

美緒「宮藤！ リーネ！ バルクホルン！ 私達はこのまま向つぞ！」

「了解」

未だバルクホルンの動きに違和感が残る物の、今はそんな事は言つていられない。

ミーナ「美緒！」

美緒「ミーナ！ それにペリースもか、よし続け！」

訓練を見学していたミーナとペリースがいち早く美緒達に続く。

大神「ネウロイの襲来か！」

後から席にやつて来たエーリカとも打ち解けエーリカとルッキーと共にお茶をしている大神達にネウロイ襲撃を伝える連絡が来た。

大神「よし！ 皆は待機していくれ！」

ルッキー「イチロー一人で行くの!? 危ないよ！ あたしも行く！」

エーリカ「そーそ、シャーリーはエイラとサー二ヤはもしもの為に待機してて！」

シャーリー「お、おう！」

掛けていく大神とそれに続くルッキーとエーリカをどこか淋しげな表情で見つめるシャーリー。

エイラ「……寂しいんだ口」

シャーリー「……別に！」

エイラの言葉にシャーリーはそっぽを向いてそう言った。

整備兵「大神大尉！ 準備は出来ています！」

大神「ありがとう！ ルツキー！ エーリカ君！ 準備はいいか！？」

素早く光武に乗り込み各兵装を起動させる、前回の出撃では突貫工事で装着されていた魔道エンジン搭載のウイングであつたが、今回は万全の整備がなされある程度の時間を飛行する事を可能にしていた。

ルツキー「おつけー！」

エーリカ「いいよ！」

大神「よし！ ジャあ！」

ルツキー「あ、待つてイチロー！」

出撃しようとしていた大神をルツキーがインカムを通して制止する、何事かと思いルツキーの方を見る大神の乗る光武F2ルツキー「イチローがさ、帝都や巴里でやつてたつて言う出撃のやつやつてよ！ あれやりたい！」

大神「ああ！ ジャあ……ストライクウェイツチーズ、出撃！」

ルツキー「了解！」

エーリカ「えー何それ一次は私もやる！」

そう言つて、三人は出撃して行つた。大神の光武を中心にして、挟むようにエーリカとルツキーが飛んで行く。

大神「坂本さん達が戦つてているポイントまで一気に行く、周りにネウロイの気配は無いか？」

エーリカ「大丈夫、坂本少佐達の近くにいる一匹だけだよ！」
最大戦速で坂本達の元に向う三人、一方で坂本達は苦戦をしり下っていた。

バルクホルンは自身のスタンドプレイによつて負傷していた、戦闘の最中宮藤はバルクホルンを治癒しに向う。

バルクホルン「私はいい……敵を撃て！」

芳佳「嫌です！ 必ず助けます！ 私に出来る事を……人を撃たず

に人を助けるんです！」

叫ぶ芳佳に、バルクホルンは自身の妹の姿を重ねていた。以前のネウロイの襲撃によって負傷していた彼女の妹は未だに病床に居た。バルクホルンは宮藤に守る事が出来無かつた自身の妹の影を重ね合わせ、結果ここ数日の不調に繋がっていた。

ペリー・ヌ「敵がこちらに気がついていますわ！……もう、持ちません！」

治癒を続ける芳佳を守っていたペリー・ヌは悲鳴を上げた、ネウロイの砲撃にペリー・ヌのシールドは限界を迎えていた。

大神「ペリー・ヌ君！離脱してくれ！ ルツキー二君、ヒーリカ君は敵機を攻撃！」

ルツキー二「ちよ、ちょっとイチロー！？」

大神は自身の光武F-2をペリー・ヌの前に滑り込ませ、三人の盾になつた。

ペリー・ヌ「無茶ですわ！ いくら靈子甲冑とはいえ長くは持ちませんわ！」

芳佳「大神さん！」

大神「芳佳君！ 俺は大丈夫だ！ 今バルクホルン大尉を守れるのは君だけだ！」

芳佳「は、はい！」

芳佳は大神の言葉で更に治癒に集中する、大神の元には更に激しく砲撃が飛来する。

大神「クツ……！」

ルツキー二「イチロー！」

特大のレーザーが飛来する直前、ルツキー二は固有魔法である多重シールドを展開して光武の前に立つた。

ルツキー二「うじゅじゅ……やばい……」

複数のシールドが一枚一枚剥がされて行く。ルツキー二の言葉には焦りがにじみ出でていた。

バルクホルン「そうだ……私も……今度こそ守つて見せる！」

芳佳「バルクホルンさん！？」

治療が完璧に行われる前に、バルクホルンは立ち上がり、銃を取りつた。

芳佳「バルクホルンさん！ まだ無理です！」

バルクホルン「もう……もう絶対にやらせはしない！」

そう言って、バルクホルンはネウロイにと突撃して行った。その凄まじさは鬼気迫る物があり、激しい猛攻で一気にネウロイのコアを撃ち抜いてしまった。

結果的に、ネウロイを撃破する事が出来たが彼女はスタンドブレイで自身の身を危機に晒してしまった。

ミーナはその事を律する為に、ネウロイを撃破してたたずむバルクホルンの頬を平手で打つた。

バルクホルン「……すまない、私達はチームだつたんだよな」

ミーナに抱きしめられながらバルクホルンはそう静かに呟いた。

ルツキー「モーアイチロー！ 無茶し過ぎだよ！」

大神「はは……すまない、ついね」

芳佳「あ、あの大神さん！ 本当に、本当にありがとうございました！」

大神「ああ、芳佳君、君がバルクホルン大尉を守つたんだ。胸を張つて良い事だよ」

ルツキー「にひひ、芳佳に張る胸なんてないけどねー」

芳佳「ちょ、ちょっとルツキーちゃん！？」

皆のインカムにも彼女達のじゃれ合いは聞こえて来ていたが、ミーナの言葉もあつたのでその輪に入つていいものか戸惑つていた。ルツキー「あ、そうだ！ イチロー！ ネウロイに勝つたんだからあれやろうあれ！」

大神「そうだね……よし、それじゃあ……勝利のポーズ！」

ルツキー「決めえ！」

ルツキーと大神だけがポーズを取り一瞬の沈黙が辺りを支配する。エーリカ「ふつ……あはは！ 何それ一変なのー」

ルツキーー「変じゃないよーカツ『いいじゃん！』皆も次からやる
よ」

ペリー・ヌ「お断りしますわ！」

その笑いで、皆自然と大神とルツキーーの元にと集まっていた。
少したつて、基地に帰還する最中にペリー・ヌとバルクホルンから
短い個人回線での連絡があった。内容はどちらも同じ。

「今日はありがとつ
との事だつた。」

次回予告

シャーリー「超高速で飛来するネウロイ！私の出番だな！更に
複数のネウロイも出た！？話が違うぞ！？海水浴なんてやつ
てる場合じやない！次回『はやい・いっぽい・まじやばい！』

海水浴に浪漫の嵐！」

三話「はやい・いっぽい・まじやっぽい」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦

二話「はやい・いっぽい・まじやばい」

二話「はやい・いっぽい・まじやばい」
私、 宮藤芳佳がブリタニアに来てから数週間が過ぎました。
新しい隊員である大神さんは戦う意味を、 信念を教えてくれました。

隊の皆も徐々に大神さんとの距離が埋まっているようです。
でも、 まだまだ皆警戒しているようです……

そんな中、 坂本さんから海上訓練の命令がありました。

大神「（内心……思つていたがやはりまだ慣れないな）」

廊下で走りまわるルツキーの姿を見て大神は内心ドギマギする。
ウイッチというその特性上、 仕方のない事なのだが、 彼女達の
格好には大神もかなり面食らっていた。

大神「（話には聞いていたが……『ズボン』と言うからにはショートパンツや短パンのような物だと思っていたのに……あれじゃまさ
に……）」

ウイッチをよくしらない降魔部隊出身の大神は彼女達の常識、 『ズボン』の形状にはかなり驚いていた。 大神から見ればどう見てもパンツである。 ルツキーは縞パンを丸出しにして廊下を走っている。 しかしあれは『ズボン』だ。

大神「（だが……彼女達はどうだ……恥ずかしがる事などなく、
当たり前のようにパン……ズボンを穿いている……俺がこれに反応
しているようでは駄目だ！ しかし……）」

「優秀なウイッチ程容姿に恵まれやすい」という調査結果があるよう、 に、 各国のエース級が集まつたこの「ストライクウイッチーズ」はかなり可愛い子が集まっている。 表向きは大衆演劇を演じていた帝国華撃団やショーを演じていた巴里華撃団と言つた容姿に恵ま

れた女性と多く接して来た大神でも彼女達の可愛しさは目を見張る物があった。 そんな彼女達が『ズボン』を丸出しにしている。それを見て平常心でいられる男が居るであろうか。

大神「（加山が『ウイット部隊なんて眼福じゃないか』と言つて、たのはこれの事だったのか……）」数週間気にしないようにしていたが……どうしたものか）」

溜め息を付いてから、 大神はこのままではいけないと言わんばかりにビシッと自分の雜念を振り払うかのように姿勢をただした。 その姿を柱の陰から見つめる色素の薄い髪を持つた少女の瞳。 大神はそれに気がついて声を掛ける。

大神「サー二ヤ君……だよね？ どうかしたのかい？」

サー二ヤ「……」

サー二ヤは話し掛けられビクッと反応すると、 数秒固まつてすぐ に逃げて行つてしまつた。

大神「……なんだろう、 やはりまだ警戒されているのかな？」

彼女はズボンの上に黒いタイツを穿いているのか、 それともあの 黒いタイツがズボンなんだろうか。 そんな雜念塗れでサー二ヤの 後ろ姿を見送つた大神。 その後強い殺氣じみた視線をすぐ後ろ に感じる。

大神「え、 エイラ君！？」

エイラ「……サー二ヤに何をしたンダ？」

大神「な、 何もしていないよ。 今も話掛けたら逃げられてしまつて……」

エイラ「……サー二ヤの事をやらしい目で見ていたんじゃないノ力 ！？」

大神「そんな事ないよ、 誤解だ」

エイラ「……フン！」

突然現れては大神を問い合わせたエイラ、 サー二ヤが逃げて行つた 方に向かつて歩き出し始めた。

ルツキー「あつ！ 居た！ おーいイチロー！」

大神「あれ、ルツキー二どうしたんだい？」

先程走りまわっていたのはどうやら大神を探していたからだったようだ。

ルツキー二「んとね、坂本少佐が言ってたんだけどね。明日芳佳とリー・ネが海上訓練するんだって！」

大神「海上訓練？ そんな訓練もあるのかい？」

自身の海軍士官学校時代の訓練を思い出す大神、しかしルツキー二は何故かとても楽しそうだ。

ルツキー二「うん！ だからね！ 明日は海水浴だよ！」

大神「成程ね、訓練が関係ないルツキー二は泳ぎに行けるな」

ルツキー二「うん！ 一緒に遊ぼうね！ あ、後ね一緒にお風呂行こ！」

大神「……何だつてルツキー二？」

ルツキー二の口から出た衝撃の言葉を受け止められず、大神はもう一度聞き返した。

ルツキー二「だからあ、丁度お風呂入ろうと思つてたから一緒に行こつて」

大神「（アイリスや「クリ」には無かつたパターンだ……）そんな純粋な瞳で……」

純粋な気持ちで大神を誘つているルツキー二、帝国華撃団のアイリスや巴里華撃団の「クリ」と年も近いが変に大人ぶつていないと言つた、いい意味で年相応な少女であつた。

大神「さ、流石に男と女で一緒に入るのはまずいだろルツキー二？」

ルツキー二「え？ シャーリーも誘つて皆で入ろうよ～」

大神「シャ、シャーロット君もかい！？ い、いや俺は遠慮しておくよ！」

ルツキー二となればまだギリギリ何も問題は起きないだろうが、シャーリーも一緒となれば大問題である、大神の強い精神力を持つとしても間違いが起こってしまう可能性もある。大神はルツキー

一一からの誘いを全力で断つた。

ルツキー二「ちえ～じゃあシャーリーと入つてこよ！」

そう残して、ルツキー二は残念そうな面持ちで帰つていった。

流石にただでさえ警戒されている中でこれ以上警戒されるような事をする訳にはいかない。

その後、ミーナの居る執務室に書類を届け一段落してから大神は部屋に戻ろうと宿舎を歩く。その時であつた。大神一郎の「持病」とも言える悪癖が発動したのは。

大神「（ん？ ここが大浴場か）」

これまで、何か問題が起きては困ると自主的に整備兵達が使う別宿舎のシャワールームを使つていた大神は、初めてウイッヂ達が使つている大浴場の前を通り掛かつた。

その時、大神を「あの感覚」が襲う。

大神「（こ、これは……この感覚は間違いない……『アレ』が来たのか……！）」

帝都や巴里で幾度と無く大神を苦しめた持病。風呂場を前にすると彼はその病気に悩まされていた。

大神「くつ……体が勝手に！」

吸い込まれるように大浴場内に入つて行く大神であつた。

その数分前。大浴場内

ルツキー二「でねーイチローと一緒に入ろうつて言つたのに来てく
れなかつたんだよー」

シャーリー「……あのなルツキー二、それは当たり前だ」

ルツキー二の言葉に半場呆れながら、まだ子供なルツキー二にそれはイケナイ事なのだと教え込もうとする母親代わりであり親友でもあるシャーリー。

ルツキー二「えーなんで！？」

シャーリー「つて言うか私もその場に呼ぶつもりだつたのかよ！」

ルツキー二「いいじゃん！シャーリーいつもリーネや芳佳みたいに隠さないでみんなに見せてるじゃん！」

シャーリー「それは女同士だからだ！ 大尉は男で私達は女だろ？」

男と女は一緒に風呂に入らないんだ！」

ルツキーを諭すように、湯船から立ち上がって諭すシャーリー。

ルツキーはえーと納得の行かない表情だ。その時、大浴場

の扉が音を立てて開かれた。

ルツキー「あ、イチロー！ やっぱり一緒に入るの！？ 早く
脱いできなよ！」

シャーリー「……」

大神「い、いやこれは体が勝手に……」

もはや伝統芸能とも言える大神の行動にルツキーは純粹に喜んで
彼を向かい入れようとする。しかし。

シャーリー「は、早く出て行けー！」

大神「す、すまないシャーロット君！」

シャーリーは聞いた事もない大声を出して大神を追い払った。

その数分後、大浴場前で先程の無礼を謝ろうと大神はルツキー
達が上がるのを待っていた。

大神「はあ……本当にこの癖は直さなければいけないな……」

ルツキー「あ、イチローどうしたの正座して」

大神「あ、いや……その、シャーロット君、さつきは本当に
すまなかつた」

俯いているシャーリーの表情を伺う事は出来ないが、とにかく謝
らなくてはと大神は頭を下げた。すると。

シャーリー「あ、あつはは！ 全く無茶苦茶するなあ大神大尉は

！ あたし達以外だつたら大騒ぎになつてたぜ？」

バンバンと大神の背中を叩いて何事もなかつたように振る舞つてくれた。

大神「本当にすまなかつた……」

シャーリー「まあいいって事よ！」

ルツキー「ねー流石シャーリーでしょーー！？ 全部見られても全

然気にしないもんね？だから次も一緒に……シャーリー？」

ルツキーの言葉に引っかかる箇所があつたのか、大神の背中を

叩いていた手がピタリと止まる。

シャーリー「あ、あはは……ぜ、全部……大神大尉に」

顔を真っ赤にして数秒固まつた後、シャーリーは物凄いスピードで走り去つて行つた。

ルツキー「どうしたんだろうシャーリー、いつもと全然違う」

大神「ま、まずい事になつてしまつた」

大神はなんとか今日の内に謝つておきたいとルツキーに懇願して一緒にシャーリーを探す事にした。

ルツキー「んーストライカーコニットの所だと思つたけど違うかー」

シャーリーを探して周囲を探索するが、シャーリーの姿は見えなかつた。

大神「これがシャーロット君のストライカーコニットか」

ルツキー「そうだよーシャーリーは音速の壁を超えるようにつも改造してるんだよ！」

いつも愛用の魔道エンジン「マーリン」とストライカーコニットを改造しているシャーリー、それは彼女の音速の壁を超えるという夢があつての事だつた。

ルツキーはシャーリーのストライカーコニットの上で遊んでいる。

大神「ル、ルツキー！ 危ない！」

ルツキー「うわわわ、うにやあ！」

ガシャン！ と大きな音を立てて転倒するルツキー。一緒にシャーリーのストライカーコニットも倒してしまつた。

大神「大丈夫かいルツキー？」

ルツキー「いてて……うにやー！」

大神に打き抱えて貰いなんとか大怪我はま逃れた物の、シャーリーのストライカーコニットを壊してしまつた。

ルツキー「う、うわあどうしようイチロー！ 早く直さないと

！」

大神「直せるのかい！？」

ルツキー「ここをこうやって……ええとお……んとお……」

大神「正直に言つた方がいいよルツキー、このまま適当に直して出撃させたらシャーリーの命にかかる事故になつてしまふかもしない」

なんとか直そうとするルツキーを見て大神は正直に言つよつに囁める。

ルツキー「うじゅ……どうしよ~」

大神「明日、正直に言おう。俺も一緒に謝りに行くから」

ルツキー「うん……」

ルツキーは泣き出しそうな表情でストライカーコニットを形だけ整備して元に戻した。

次の日に海上訓練を控えた日の夜は各自複雑な気持ちで床に就いたのであつた。

次の日、芳佳とリーネの海上訓練が行われている最中、一人ボツンと体育座りをして俯いたり空を見上げたりと挙動不審なシャーリー。

大神「（ま、まずい……なんとかして謝りに行かなくては……）」

ルツキー「（い、イチローがまず行つてよ！）」

大神「（そんな！一緒に行こうルツキー！）」

ルツキー「（だつてなんか知らないけどシャーリーがあなつたのはイチローのせいみたいじゃん！ まずイチローが謝つて！ その後あたし行くから！）」

二人は小声で相談する、その姿を不信に見ている他のウイッチ達。バルクホルン「うむ……シャーリーが大人しいと思つたら、何かあつたのか？」

エーリカ「一郎が何か言つたのかなー？」

しゃがみ込むシャーリーを見てバルクホルンがエーリカに声を掛け

る。

エーリカは犬かきをして海面から顔だけ出して呴いた。

バルクホルン「……待て、何故大神を下の名前で呼ぶ？」

エーリカ「ん？ 別にいいじゃん」

先日仲良くなつてからエーリカがやけに大神と一緒に居る所を田撃していいたバルクホルンは内心気にくわない気持ちでエーリカに尋ねるが軽く切り替えられる。

シャーリー「……ん、何がが太陽を横切つた……？ ……あれは空を見上げていたシャーリーは太陽を横切つた物体に見覚えがあつた。

大神「よ、よし。俺が行こう！」

ルツキー「頑張つてイチロー！」

立ち上がつてシャーリーの元に向かおうとするが、通信機の音が大神の歩を遮る。

美緒「何！ 高高度から超高速で接近するネウロイだと！？ レーダー網を搔い潜つたのか！？」

その言葉に、真つ先に反応したのがシャーリーであつた。一番に走り出してストライカーユニットの格納庫にと向つ。

大神「まずい！ 待つんだシャーロット君！」

ストライカーユニットが壊れていいる事を知らないシャーリーは一番に出撃しようと物凄いスピードで大神から離れて行く。

ルツキー「あわわ……」

大神「ルツキー！ 正直に皆に言つんだ！ 俺はシャーロット君を追いかける！」

ルツキー「う、うん……」

皆がまだ自体を把握していない内に大神はかけ出して行つた。

ペリー・ヌ「な、何があつたんですの？」

バルクホルン「それよりネウロイだ！ 皆早く向こうぞ！」

ルツキー「あ、あのね……」

ミーナ「どうかしたの？ ルツキーさん」

ルツキーは申し訳なさうに、基地に向う皆に事実を告げ始めた。

大神「待つんだ！ 出撃しては駄目だシャーロット君！」

大神が格納庫に着いた時には既にシャーロットはネウロイに向けて出撃して行つた所であつた。

大神「くつ…… まざい！ 早く俺の光武を！」

急いで戦闘服に着替え、大神は自身の光武を起動し大急ぎでシャーリーの後を追いかけた。

ミーナ「シャーリーさん！ シャーリーさん！ すぐに戻つて！ …… 駄目ね。 繋がらないわ」

ルツキー「うう…… シャーリー……」

ウイッチ達はシャーリーや大神が出た少し後に基地に到着して簡易な指揮所を作つて対応に追われていた。

美緒「しかし…… どういう事だ？ このネウロイは何処に向かつている？」

基地から大きく外れて通常のネウロイとは異なる動きをしていた。

ミーナ「そうね…… ただ通過して行くだけなのかしら……？」

通信兵「報告します！」

美緒「どうした！ 何があつた」

通信兵の緊迫した声が通信機に響く、その声がただ事で無い事を物語つていた。

通信兵「ネウロイです！ 先程のネウロイとは別物です！ 数は三！ かなりの大型です！」

美緒「何！ 別のネウロイ！？ 三匹もだと…？」

ミーナ「ネウロイが組織的な行動をしている……？ 先日の囮を使つたネウロイといい、何かがおかしいわ！」

バルクホルン「今は考えるより迎撃だ！ 皆水着から着替えろ！ ネウロイは待つてくれないぞ！」

訓練でヘトヘトの芳佳とリーネの着替えを急かすバルクホルン、基地は異様な雰囲気に包まれていた。

シャーリー「（なんだ……？ 加速が止まらない……！ 激しい！

これなら音速の壁だつて！」

ルツキーの適当な整備が奇跡を産んでいた。偶然が偶然を呼び、

シャーリーの加速は音速の壁を突破しようとしていた。

大神「シャー……君……聞こ……止ま……」

大神の途切れ途切れの通信は電波の影響からかシャーリーには届かない、シャーリーはグングン加速を続けてネウロイに迫る。

大神「シャーロット君！ 止まるんだ！ 君のストライカー二ツトは！」

シャーリー「な、なんだ大神大尉か！？ なんで！」

大神「シャーロット君！ 前！ 前だ！」

シャーリー「うつうわっ！」

目前までネウロイに迫っていたシャーリーは瞬時にシールドを展開してネウロイに追突した。そのままの勢いで貫通し、加速を続けた彼女はついに音速を突破したのだった。

シャーリー「これが……音速か……腹減つたあ！」

音速を突破した反動でシャーリーの水着がボロボロに破けてしまっていた。音速を超えた快感で彼女はゆっくりと空に浮かぶ。

大神「シャーロット君！ まずい！ 落ちているぞ！ 早く光武に！」

大神の緊迫した声でシャーリーは平常心を取り戻す、そして自分を冷静に見る事が出来た。

シャーリー「……だ、駄目だ！ 大神大尉！ 来るな！」

大神「何を言つているんだ！ 落ちているんだぞ！ ストライカー

ユニットも機能していないだろう！？」

大神は空中でコクピットハッチを開ける、本来一人乗りの光武に二人も乗るスペースは無いがこの際そんな事を言つてはいる場合ではなかつた。

シャーリー「う、う……じゃ、じゃあ！ 目を瞑つてくれ！」

大神「目、目をかい！？ 何故？」

シャーリー「いいから！ 早く！」

そう言つて、回収される事を祈つてシャーリーはストライカーウニットを放棄し、光武に乗り移つた。

大神「いいい！？ あ……あのシャーロット……君！？」

シャーリー「な、何も言わないでくれ……音速を超えた衝撃で……」

大神「と、とにかくこれを羽織つてくれ！」

大神が自身の戦闘服の上着を脱いでシャーリーに渡す、無いよりはマシであつたが狭い光武内では色々と感触が直に伝わつて来る。

大神「基地までの辛抱だから……我慢してくれシャーロット君」

シャーリー「ああ……あの大神大尉」

ミーナ「大神大尉！ 応答してください！」

シャーリーが何か言いたげであつたが、それをミーナの緊迫した声が遮つた。

大神「こちら大神機です！ シャーロット中尉を無事保護しました！ なおネウロイはシャーロット中尉が撃破しました！」

ミーナ「緊急事態です！ そのネウロイは囮よ！ 新たなネウロイが三匹！ かなり大型のネウロイよ！ ポイントをレーダーに転送します！」

大神「なんですって！ 了解しました！ すぐに向かいます！」

通信が終わり、指示されたポイントに向かっていく大神。

大神「すまないシャーロット君、狭い光武内だがもう少しの我慢だ」

シャーリー「ああ。分かった……あ、あの大神大尉」

大神「なんだいシャーロット君」

シャーリー「シャーリーだ」

大神「ん？」

シャーリー「皆は私を愛称のシャーリーって呼ぶんだ。だから……」

大神は出来るだけ前だけを見つめるようにして、前のスペースに入つて、いるシャーリーの表情を伺う事が出来なかつたが、ゆ

つくりとうなずいてシャーリーの名前を呼んだ。

大神「ありがとうシャーリー、俺も名前で呼んでくれていいよ」
シャーリー「……分かった、今日は助けてくれてありがとう。」

昨日の事は皆に黙つててやるよ一郎」

狭い光武の中で二人はなんとも言えない雰囲気でネウロイの居るポイントにと飛行して行つた。

ミーナ「ネウロイを確認したわ、皆、行くわよ…」

「了解！」

ウイツチ達は三匹のネウロイは視界に捉えて各自攻撃行動に移る。キューブ型のネウロイが三匹ウイツチ達の眼前まで迫つており、切り込み役で初弾を打ち込んだルツキニーの攻撃を受ける瞬間に、夥しい数に分離した。

バルクホルン「な、何！」

エイラ「ぶ、分裂したノ力！？」

芳佳「凄い数！ 一体何匹に……！」

サー二ヤの能力を転用して送られて来るリアルタイムの情報は大神の乗る光武や各地の指揮所に届けられている。

大神「なんだ……この数は！ レーダーが真っ白で敵の数が分からぬ！」 観測手！

観測手「なんて数だ！ 空がよく見えません！ 敵が七分で空の青が三！ 敵が七分に青が三です！」

多少距離の離れた所からウイツチの戦闘を記録している観測手に問い合わせるが観測手も混乱していて明瞭な答えが返つて来ない。

シャーリー「どういう事だ？ 何が起こつているんだ！？」

大神「仲間を呼んだのか、大型のネウロイが創りだした分身か……分からぬが早くポイントに向かわなくては！」

更にスピードを上げてポイントに向う大神にシャーリーが寄り添う。

大神「シャ、シャーリー！？」

シャーリー「い、いいから！ 神経を集中させてくれ」

大神「一体何を！？」

シャーリー「一郎達が靈力つて呼んでる物も、私達が魔力つて呼んでる物も元は同じ物なんだろ？ だったら私に同調してくれ！」

大神「あ、ああ！」

シャーリーが魔力を展開して行く。 ヒョウヒョウと、シャーリーの頭から使い魔であるウサギの耳が出てくる。

シャーリー「飛ばすぜ！ 一郎！」

彼女の固有魔法である「高速」を展開し、光武が通常では出せないスピードでポイントにと向かつて行つた。

ストライクウィッチーズが分離型ネウロイとの激戦を繰り広げ始める数分前。

場所はガリアの重要都市巴里。

「どおいう事ですかあ！」

大神の同期で同じく帝国華撃団に所属する加山は複数の女性達に囲まれていた。

加山「だ、だから説明した通り。大神は特命を受けて帝都では無くブリタニアに向かつたんだ」

「そんなあ～私てつきり帝都に戻るものだと思つて色々手紙に書いたのにい～」

「そんな事を言つている場合ではない！ どついう事だ？ 確かあそこはネウロイとの激戦区だつた筈だろ？ 何故降魔部隊を率いた隊長がブリタニアに行つているんだ？」

「じゃあじゃあ！ まだイチロはこの西部戦線に居るんだよね！ ？ 会いに行こうと思えば行ける距離だよ！」

小さな少女のその一言を聞いて皆はピタッと動きを止める。

「そうですよ！ 仲間として増援を送るべきです！ 隊長代理として、私が行きますね！」

「何を行つてているのだ！ 隊長代理が隊を留守にしてどつするのだ

！ わ、私がブルーメイル家を代表して支援物資と共にそのストライクウィッチーズとやらの部隊に

「ずるいです！ 自分が大神さんに会いたいだけじゃないですか！」

「な、何を言つか！ それを言つたら」

加山を置き去りにし言い争いを始める少女達。 先程からこの調子

なのでちつとも話が進まない。

「どうもキナ臭い話だな…… あのお人好しがまた良からぬ事に巻き込まれてるんじやないのか？」

一人雰囲気の違う女性に加山は詰め寄られた。 彼女も巴里華撃団の一員であるようだつた。

「大神自身も怪しんでいたが、俺達軍人の身としては命令には従わざるを得ない所もあつてね」

「やれやれ…… 何も起きなきゃいいが」

「心配ですか？ 大神さんの事」

その女性の分と加山の分のお茶を持つて来た日本人の少女が、 その女性にそう尋ねかけた。

「馬鹿言つんじやないよ…… だがあんな奴でも私達の隊長だつた男だ。 そつそつ簡単に死んで貰ちや困るぞ」

「大変です！」

その時、 シヤノワールの一員である少女が顔色を変えて部屋に入つて来る。

「ドーバー海峡……！？ 大神さんの居るブリタニアの田と鼻の先ですが……！」

「ドーバー海峡……！？ 大神さんの居るブリタニアの田と鼻の先じゃないですか！」

修道服に身を包んだ少女はそう叫んで、 一田散に作戦司令室にと向かつて走つて行く、 他の隊員達と加山もその後に続いた。

「……正式に援軍要請があつた訳じやない。 第一、 私達は降魔部隊だ。 ネウロイ退治はウイッチ達に任せればいい」

シヤノワールを取り仕切つている支配人であり、 巴里華撃団の総司令でもある女性は神妙な面持ちでモニターを見つめている。 モニターには物凄い数の反応が表示されている。

「でも！ 」の数は尋常ではありません。 増援に行かせてください！」

「……あんた達がムツシユに会いたいから、 そういうんじやないんだね？」

「……正直に言つてしまえばその気持ちだつてあります、 でも、 巴里からも近いドーバー海峡にこれ程の反応があつたなら。 大神さんはこれを見逃すような事は絶対にしません！ 私は大神さんの代わりを預つている身です！ 大神さんなら絶対出撃します！」 修道服の少女は引かない、 総司令の女性はしばらく彼女を見つめた後に。

「だがどうするんだい？ ネウロイってのは空を飛んでるんだよ？ 「私の光武なら、 短時間の飛行ならば出来ます！」

そう言って、 彼女は確固たる意思を突きつけた。 後ろで聞いていた隊員達も諦めて彼女にこの場を託す事にした

「……色々と言いたい事はあるが、 仕方あるまい。 巴里は私達に任せて行つて来るのだ隊長代理よ！」

「よし…… それならば…… メル、 シー！ リボルバー・カノン照準合わせ！ 目標『大神一郎』！」

「「ウイ、 オーナー！」」

修道服姿の少女は、 いつもの天然な表情から一変し、 真面目な面持ちで戦闘服にと着替え始めた。

大神「駄目だ！ これじゃあキリがない！」

エーリカ「撃墜数稼ぎには持つて来いだけどね！」

バルクホルン「だがどうする！？ どうやら奴らは再生しているようだ…… 確認しただけで六百匹以上、 コアを見つける事には……」

「…… 弾幕のようにネウロイの攻撃が展開される、 ウィッチ達はなんかシールドを張り、 回避し、 これをやり過ごしてはいたがそれにも限度があった。 徐々にだが、 彼女達は消耗して行った。

大神「坂本さん！ コアは見えませんか！？」

美緒「駄目だ……！ せめて一四分の……一百程の分離の中では探せただろうが……この数では！」

大神「クツ……一気に殲滅しなければ駄目か！ 誰か広範囲を攻撃出来る魔法を持つていないのでか！？」

ミーナ「ペリースさんの電撃と……ハルトマン中尉の疾風ならばあるいは……でもこれまでの戦いで魔力を消費しているので威力は保証出来ないわ」

ミーナの声から事態がかなり深刻である事が伺われる、 皆通話している間も攻撃の手を緩めていないが相手の再生能力の方が上回っているようだつた。

ペリース「でも……やらない訳にもいきませんわ！」

エーリカ「そうだね……皆一旦引いて！ ペリース！ 合わせて！」

シユトウルム！」

ペリース「ええ！ トネール！」

ウイッチ達が引いた後に電撃と疾風が辺りを疾走する、 多くのネウロイを撃破して辺りは爆炎に包まる。

ルツキー二「いやつたあ！ これなら！」

美緒「いや……まだだ！ コアは破壊されていない！ だが場所は特定出来た！ ハルトマン！ ペリース！ もう一度私の指示する場所に！」

ルツキー二は歓声を上げたが、 戦いはまだ終わってはいなかつた。

美緒は爆炎の中一点を突き刺し位置を二人に知らせる、 しかし。エーリカ「ごめん坂本少佐……今の威力の半分以下しか出せそうにない」

ペリース「私もですわ……」

美緒「クツ……それでは！」

それではコアの破壊に至らない。 その言葉を飲み込み美緒は次の手段を考える。

大神「（クツ……『アレ』が使えば……しかしアレは帝都や巴里

の皆の力を集約しなくては使えない……」

大神はギリッと歯を噛んだ、 事態は刻一刻と悪くなっていく、
ネウロイはドンドン再生を始めている。

ミーナ「一旦……撃退するのも視野にいれなくてはいけないわね」
美緒「何を言つて……ここにこつらを逃したら……どれ程の被害が
出るか！」

大神「だが……三つのコアを一気に破壊する手段がもう……」
サー二ヤ「……何？」

その接近に気がついたのはサー二ヤであつた。 自らの能力『魔導
針』によつて高速で接近する物体をいち早く察知した。

サー二ヤ「何かが高速で接近しています……ネウロイではあります
ん」

美緒「ネウロイではない！？ では援軍のウイッチか？ 援軍の申
請はしていないが……」

大神「あの弾頭は……！？」

大神は遠くに見えて来た弾頭に見覚えがあつた。 その弾頭は徐々
に分解し。 そして天使の羽が姿を表した。

ルツキーニ「は、 羽！？」

リーネ「凄い……お話の中の天使みたい……」

大神「あ、 あの機体は！」

エリカ「エリカ・フォンテーヌ！ 行きまーす！」

天使の羽を広げ、 ついに彼女はブリタニアの空に舞い上がつた。

大神「え、 エリカ君！？ どうしてここに…」

エリカ「大神さんのピンチとあらば、 地球の裏側にだつて出撃し
ます！ それが巴里華撃団です！」

大神「エリカ君……ありがとう。 本当に助かつた。 皆の回復を
！」

エリカ「はい！ あ、 でも大神さん、 その前に……」

大神「ああ……巴里華撃団、 出撃！」

エリカ「了解！」

ウイッチ達の飛び空に大きく十字架が描かれた。その一帯を飛んでいたウイッチ達に聖なる光が降り注ぐ。

エーリカ「うわ凄い……力が戻つてくる！ 全開だよ！」

ペリーヌ「これなら行けますわ！」

エリカの回復によつてウイッチ達に魔力が戻つてくる、エリカとペリーヌは坂本の示したポイントに既に向かつている。

エーリカ「これで……」

ペリーヌ「決めますわ！」

先程以上の威力で二人の魔法は繰り出された。三匹の内、二匹のコアの破壊を坂本が確認したが最後の一匹が攻撃から逃れていた。

美緒「一匹逃げている！ 誰か

美緒の言葉より早く反応していた機影、一気に加速して逃げたコアを持つネウロイに迫る。

エリカ「祈りなさい！」

エリカの光武は機銃を掃射し、ネウロイのコアを見事に打ち抜いて見せた。

ネウロイが崩壊して辺りがキラキラと輝いている。

大神「エリカ君……ありがとう。助かつたよ」

エリカ「いえ……お役に立て良かつたです。それより！ 光武の中ですけどあれやりましょう！」

エリカは大神の元に飛んで来て恒例の『アレ』を急かす。

ルツキニー「あ、そうだ！ 皆もやろー！」

ペリーヌ「だからやりませんわ！」

大神「勝利のポーズ！」

エリカ・ルツキニー・エーリカ「決め！」

エリカの横ではルツキニーとエーリカが並んでポーズを取つていた。バルクホルン「ハ、ハルトマン！ お前まで何をしているんだ！」

エーリカ「いいじゃん、面白いし」

エリカ「うわーやっぱりこっちでもやつてるんですね！」

大神「そうだ、皆紹介が遅れたね。この光武に乗つているのが

巴里華撃団のエリカ君だ」

エリカ「エリカ・フォンテーヌです！　『巴里華撃団の』大神さん
がお世話になつてます！」

何故か巴里華撃団を強調して挨拶するエリカ、しかし皆は再び光
武でネウロイを撃破した事に驚いているようだつた。

エリカの光武がそう長時間飛行出来ない事もあり、ひとまずは基
地にと戻る事にするウイッチ達。　基地が目と鼻の先にと迫つた
時、大神は自身がトンデモない事態に置かれている事に今更なが
ら気がついた。

シャーリー「なあ、一郎」

大神「なんだいシャーリー」

シャーリー「さつきの子は……巴里華撃団の子なんだよな？」

大神「ああ、そうだよ？」

シャーリー「じゃあ……まずいんじゃないのか？」

大神「何がだい？」

シャーリー「いや……この状況」

大神「……」

大神の顔を冷や汗が流れる。　冷静にこの状況を見てみると。狭
い光武の中に半裸のシャーリー。　状況を飲み込めていないウイッ
チの皆やましてエリカにこの状況を見られるのはどう考へてもよろ
しくない。

更に悪い事に、皆は既に基地に到着していて大神の光武の到着を
外で待つてゐる。

大神「こ、これは……どうしたものか」

基地の滑走路にと着陸したものの、どうしていいか分からず大神
は光武から出る事が出来ない。

エリカ「大神さん？　故障ですか？　非常用で開けますよー？」

外部に付いている非常用のノズルを操作して光武を開けるエリカ。

大神「ま、待つんだエリカ君！　こ、これは」

エリカ「もーちゃんと開くじゃないですか大神さん。　何をやつて

』

数秒後、 固まつたエリカを不信に思い次々光武の中を覗くウイック達。

その後の惨状は戦闘で疲れた大神を更に疲弊させる物となつた。正座させられている大神から少し離れた所で芳佳とリー・ネが持つて来てくれたバスタオルにくるまりながら。

「……責任とれよな」

シャーリーはそう小さく呟いたのだった。

次回予告

エリカ『大神さん酷いです！ 私と一夜を共にしたあの日々も全部遊びだつたんですね！ それにしてもウイックの皆さんは大胆ですねーパンツ丸出しなんて私にはとても出来ないです！ え？ ウイックの皆さんのパンツが無くなつた！？ え、 わ、 私のもですか！？ 次回『スースーするの』 愛の御旗のもとに！』

四話「スースーするの」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦S.S.です！

四話「スースーするの」

四話「スースーするの」

第501統合戦闘航空団「ストライクウェイツチーズ」の元に巴里華撃団から増援としてやって来た私はパパッタとネウロイをやつつけて大神さんの本妻としての威儀を見せつけたんですがなんと大神さんはブリタニアでも新しい女の子を作っていました！

私、エリカ・フォンテーヌと大神さんの関係は海よりも深く空よりも高い。そう信じていたのに、結局大神さんは私の事を現地妻程度に考えていたんですね！ 酷い！

でもウイツチの皆さんはとっても良い人達でした！ 取りあえず今晩は一泊してから巴里に帰還したいと思います！

酷い目にあつた。

ベッドに横たわっている大神は重たいまぶたをまだ開けずにいた。もうすぐ起床ラッパがなる時間だろうか。

昨日、あの時一番初めに光武を開けたエリカは中の様子を見るなり固まってしまい、ドンドンと他のウイツチ達が中を覗き始めた。狭い空間だったのでシャーリーは大神に抱きつくような格好で光武に乗つっていた。勿論その格好はビリビリに破けぼぼ跡形もなくなつてしまっている水着の上に大神の戦闘服を羽織つているだけの物なのでかなり刺激的な格好だ。

大神が怪我をしているのではないかと心配してエリカの次に駆けつけた芳佳は中を見るなり顔を真つ赤にして騒ぎ始める。

芳佳「お、大神さん！ 戦闘中に一体何をしていたんですか？ と、とにかくバスタオル持つて来ますから！」

ルッキー「わーキャーリー ほほ裸じゃん！ なんでそんな格好してるので？」

芳佳は中をチラッと覗いては同じく赤面しているリー・ネを連れてバ

スタオルを取りに向かつた。 続いてルッキーーやペリーヌに「
リカ達が光武の中を覗く。

エーリカ「ひゅー一郎やるねー戦闘中でも余裕しゃくしゃくつて訳
ー?」

ペリーヌ「ひ、ひ、卑猥ですわ！ 何を考えているんですの貴
方は！」

美緒「噂は本当だったのか……私はお前を信じていたのだがな」
大神「ち、違います坂本さん！ これはネウロイを擊破したシャ
ーリーが音速を超えた衝撃で」

エイラ「昨日までシャーロットって呼んでたのに……深い仲になつ
たノ力……」

大神「違つよエイラ君！ これはシャーリーがそう呼んでくれつて
！」

坂本やエイラまでその騒ぎに入つた、サニーヤは遠くから赤面し
て光武の中を眺めている。騒ぎが更に大きくなつた時バルクホル
ンは腕を組んで大神の前に立塞がつた。

バルクホルン「お、大神よ！ 貴様は軍人として、人間として
恥ずかしくないのか！ 戦闘中に……」、「」のよつた行為を！」

エーリカ「どのような行為？」
バルクホルン「だ、だから……男女の……つて関係ないだろハル
トマン！」

バスタオルを持つて再び駆けつけた芳佳とリーネがシャーリーをバ
スタオルに包んで光武から出してやる、ようやく光武から降りる
事が出来た大神を待つていたのは正座地獄だった。

エリカ「びいええええええええええええええええええええええええええ
ね！ あの夜私をもて遊んだんですね！」
固まつていたエリカが我に返るなり大声をあげて泣き出す、しか
もかなり誤解を招きそうな言葉まで添えて。

バルクホルン「あ、あの夜とはなんだ大神！」
大神「エリカ君何を言つてゐるんだ！ 話がドンドンおかしくなつ

ているぞ！」

エリカ「グス……グス……布団に入つて……優しく声を掛けてくれて……その後私達は朝まで……夢ですけど」

最後の一言は本当に小さく付け加える程度に言つたので皆の耳には勿論届いていない。

大神「エリカ君！ 最後！ 最後の一言が一番重要じゃないか！」

エーリカ「ふーんやつぱり巴里でやる事やつてたんだねー」

エイラ「ここでもあわ良くばとか思つてたんだ口？ サー二ヤを見る目がやらしいと思つてたンダ！」

ジトツとした目で正座している大神を見つめるエーリカ、ここぞとばかりに捲くし立てるエイラとそれぞの反応を見せているウイツチ達。

ルツキー二「ねーねーペリー・ヌう」

ペリー・ヌ「なんですのこんな時に！」

ルツキー二「さつきから何の話してるの？ イチローはエリカと布団に入つて何をしたの？ リーネと芳佳に聞いたらペリー・ヌなら分かるんじやないかって」

ペリー・ヌ「（何言つてくれてるんですのあの二人はーー！）」

怒りと照れが織り交じつた表示で芳佳とリーネの方を睨むが二人は顔を真つ赤にしてごめんないとジェスチャーで伝えてくるばかりだ。ペリー・ヌ「そ、 それはですね……エイラさんがよくご存知の筈だわ」

エイラ「お、 お前ふざけるナヨー！」

ペリー・ヌの横に居たエイラはこの話には関わらないようにしようとして、後退りしていたが逃げるのが若干遅かっただようだ。

ルツキー二「エイラあー」

エイラ「わ、 わ、 私は知らないゾ？ そういうのは誇りある力

ールスラント軍人であるバルクホルン大尉殿に聞くンダ！」

バルクホルン「ん？ 私を呼んだか？」

大神にクドクドと説教をしていたバルクホルンの元にルツキー二が

歩いて行く、ペリーヌとエイラは一田散に逃げだした。

バルクホルン「どうしたのだルッキー、ふむふむ……ん？……んん？　だ、誰がそんな事を私に！……エイラ・イルマタ

ル・ヨーティライネン少尉は何処に行つたあ…」

ミーナ「皆さん、落ち着いてください！　お話はシャーリーさんに全て聞きました！」

隊長であるミーナがこの混乱を収束させる為に立ち上がつた。

ミーナ「これは不可抗力の事故です、シャーリーさんはネウロイ撃破時に音速の壁を超えたそうです、その衝撃に水着とストライカーコービットが耐えらず自壊してしまつた所を大神大尉に助けて貢つたとの事です」

ミーナの言葉に皆は自分達がとんでもない誤解をしていた事を知る。エリカ「な、なーんだ大神さん！　そなうならそなうと早く言つてくださいよー」

大神さん「俺は初めからそう言つていたよ……」

エイラ「ま、まあ誤解が解けてよかつたじゃナイカ」

大神さん「……エイラ君何故俺の後ろに？」

エイラ「う、うるさい！　しばらく隠れさせてクレ！」

バルクホルンから逃げていたエイラは大神の後ろにと隠れていた。

ルッキー「ねえ、ミーナ隊長おー」

ミーナ「あら、どうしたのルッキーさん、泣きそうな顔をして」

ルッキーは涙目でミーナの元にやつて来る。

ルッキー「皆ひどいんだよ、私が知らないからつてたらい回しにしてえ、ミーナなら絶対知つてるつて皆が言つからー」

ミーナ「あら、皆酷いわね、私で良かつたらなんでも聞いて頂戴」

ルッキー「本当！　じゃあね、布団に入つて男女がやる事つて何？　イチローとエリカは何をしていたの？」

ミーナの視線を絶対に見ないように、皆は一目散に滑走路から逃

げだすのであつた。

それが昨日の事、 なんとか誤解が解けたのはいいのだが夜食の時もシャーリーとは少し気まずい雰囲気であつたし、 何より食事の時も隣で大神に甘えるエリカのせいでいつもより皆の視線が数倍鋭い物になつていた。

大神「ふう……そろそろ起きる……ん？」

だんだん覚醒し始めた大神は自分の布団の中に自分以外の体温を感じた。 恐る恐る目を開けるとそこにはスヤスヤと眠るエリカの姿があつた。

大神「……エリカ君？」

エリカ「んふう……あ、 おはようございます大神さん」

大神「な、 なぜ俺のベッドに？」

エリカ「ミーナさんが新しくベッドを用意してくれるって言つてい
たんですけどね、 それも悪いと思つたので大神さんと寝るのでい
つて言つたんです。 大神さんの部屋に来たらもう寝ちゃつてた
後だったので……大神さん？」

大神は静かに頭を抱えた。 この後一体どんな表情をしてミーナに
会えればいいのだろうか。

大神「そ、 そうか……それよりエリカ君早く起きないと、 こん
な所を誰かに見られたら」

エリカ「きやつ！ 大神さんのエツチ！ 駄目ですよー布団引っ張
つたら！ 下着だけなんですから！」

大神「な、 何故そんな格好で！？」

エリカ「だつて私戦闘服しかないですよ？ 戦闘服ピチピチしてて
寝にくくて」

当然でしょう？ という表情でそんな事を言うエリカ、 大神は愕然としてしまうがそんな事をしている場合ではない。 起床ラップ鳴る少し前にはいつも芳佳が日課である掃除をしに来るのであつた。 そう、 このように。

芳佳「大神さんおはよ〜」わいります、今日も一日頑張つて……す、すいませんでした！」

芳佳から見れば素肌を大きく露出させたエリカの布団を大神が引っ張つているの図である、これで誤解されない方が奇跡である。

エリカ「大神さんどうしたんですかー？」

大神「いや……なんかエリカ君とのドタバタも久々だなと思つてね、またもや頭を抱える大神、ド天然のエリカに今何故自分がこんなに焦つているのか説明しても無駄である事は巴里での生活で学習していました。

エリカ「そうですね……大神さんが巴里を旅立つてからまだ一ヶ月も過ぎてませんけど……会えて本当に嬉しかつたです」

大神「……エリカ君？」

エリカ「お手紙……読んでくれましたか？」

大神「ああ、 読んだよ。 嬉しかつた」

エリカが大神に宛てた手紙、巴里を離れる際に手渡された手紙にはエリカの正直な気持ちが記されていた。「巴里での恋人ではなく、貴方の恋人になりたい」と、まさかこんなに早く再会するとも思つていなかつたエリカは多少照れくさそうに笑つている。エリカ「えへへ、ちょっと照れくさいですねお手紙、ちゃんと持つてくれていますか？」

大神「ああ、勿論さ」

エリカ「あ、あの鞄の中ですねー？ちゃんと持つてているか持ち物検査です！」

大神が巴里で使つていた鞄を発見しそこに走つていくエリカ、バリバリの下着姿なのだが大神に取つて今はそれ所ではない。

大神「ま、待つんだエリカ君！」

エリカ「うわーやつぱりちゃんと持つていてくれてるんですね！」

……あれ？」

鞄の中にはエリカが出した手紙の他に四通の手紙が入つていた。差出人にはエリカの他の巴里華撃団のメンバーの名前。

エリカ「……大神さん？」

大神「い、いや。やはり隊長として皆の手紙を受け取る義務があるだろ？」「

エリカ「酷いです！ 大神さんが五股したあ！」

大神「そんな誤解を招くような事を大声で！」

エリカ「酷いですー酷いですー！ 帝都と合わせて十三股ですー！」

ウイッグの皆さんと合わせれば一十四股ですー！」

大神「え、エリカ君！ 朝だから静かに！ 落ち着いてくれ！」
エリカを落ち着ける為に大神はエリカをベッドに座らせようとすると、起床ラップが宿舎に鳴り響くころだった。 「ンンン」と、部屋の扉がノックされるが大神達には聞こえない。

シャーリー「あ、あのさー郎。 昨日はちょっと色々心の整理が付かなくてちやんと言えなかつたからお礼……何やつてんだお前ら？」

下着姿のエリカを布団の上に押し倒している大神、 部屋に入つて来たシャーリーの目にはそう[写]つっていた。 早くも本日一回目の誤解イベントである。

シャーリー「……わ、私は一睡も出来なかつたんだからな！」
バーン！ と音を立てて部屋の扉が閉まる。 シャーリーはまたもや物凄いスピードで部屋を出て行つたのだった。

エリカ「あれー？ シャーリーさんどうしたんでしょうか？」
相変わらずのトラブルメイカーっぷりを發揮するエリカにガツクリと肩を落とす大神であった。

バルクホルン「何をしているかハルトマン！ 起床だ！」

エーリカ「もうちょっと……後七十分」

バルクホルン「そんなもうちょっとがあるか！ 早く……なんて格好をしているのだハルトマン！」

脱いだ服を布団替わりにして眠つていたエーリカは下半身に何も着用していなかつた。 それを見たバルクホルンが彼女を律する。

バルクホルン「さつさと服を着んか！」

エーリカはまだ頭に布団を被せたまま「一度寝の体制に入っている。何も着ていない下半身を丸出しにして。

バルクホルン「……まったくどう思う大神、ハルトマンは毎日こうなのだ」

エーリカ「ええ！？」

ガバッと起きて布団替わりにしていた服で下半身を隠すエーリカ、しかしそこに大神は居ずうつすらと笑っているバルクホルンしか居なかつた。

バルクホルン「起きたようだなハルトマン、流石のハルトマンも大神の前ではちゃんとするようだな？」

エーリカ「……嘘付き、トルウーデはカールスラント軍人なのに嘘付きだ」

エーリカは赤面した頬を隠すようにまた布団を頭に被つた。

バルクホルン「う、嘘ではない！お前を起こす為の戦略的行動であつて決して私は嘘をついた訳ではない！」

エーリカ「嘘付きートルウーデの嘘付きー」

バルクホルン「むむむ……早く起きて来るんだぞ！今日はお前の柏葉剣付騎士鉄十字章の授与式があるのでからな！」

バルクホルンにしてやられたのもそうだが、無意識の内に大神の前ではだらしない自分を見られたくないと思つていた自分に少し腹が立つてエーリカは一度寝を敢行した。

エーリカ「……ない」

しばらく一度寝してからゆっくり体を起こすエーリカ、自分の『ズボン』が何処を探しても見当たらない。

エーリカ「ま、いつか」

そう言つて廊下にと歩き出すのだが、先程のバルクホルンの言葉を思い出す。

エーリカ「……別に、見られても平気だし」

自分に言い聞かせるようにそう呟くがやはりエーリカにも人並みの

羞恥心はある、下半身を全て大神に見られるのは流石にまずいと思いつ大浴場の更衣室にと寄つてルツキーのズボンを借りる事にしたのだった。

大神は執務室にて上層部に送る報告書作成の手伝いをしていた、しかしどうにもミーナからの指示や視線が冷たい気がする、原因は分かっているのだが。

大神「あ、あのミーナ中佐。何か誤解をして」

ミーナ「昨晩はお楽しみでしたか大神大尉？エリカさんは巴里華撃団の一員なので文句はいいませんが、ストライクウェイツチーズ内ではそのような事をしてはいけませんからね？」

大神「じ、自分はそのような事はしていません！エリカ君はなんというか……人懐っこい所がある子でして……決して後ろめたい事をしていた訳ではありません！」

ミーナ「……本當ですか？」

大神「勿論です、自分は正義に殉ずるつもりです、特定の女性とお付き合いというのは……考えておりません！」

ミーナ「そこまで言わなくとも……すいません、私が少しムキになりましたね。大神さんを信じます」

大神の覚悟をミーナは信じる事にした、誤解が解けたので大神はニコッと笑つてミーナを見つめる。

大神「良かつた……ミーナ中佐なら信じてくれると思つていました」その時、コンコン、と執務室の扉がノックされる。

ミーナ「はい、どうぞ」

バルクホルン「ミーナ少しいいか？事件が起きた」

神妙な顔をしたバルクホルンが執務室にと入つて来た。彼女が言うには、なにやら事件が起きたらしい。

大神「ズボンが盗まれた？」

ペリーヌ「そ、そうですの……私のズボンが……な、何をマジ

マジと見ているのですか大神隊員！」

大神「す、すまないペリーヌ君！」

エリカ「大神さあ～ん私のパンツも無くなっちゃいました～」

大神「エリカ君のもかい？」

バルクホルンは重大な事件だと息巻いている、芳佳は必死にセーラー服の上は引っ張つて下半身を隠している。

大神「芳佳君もかい？」

芳佳「い、いえ私のはあるんですけど……バルクホルンさんが証拠だからって……」

大神に見えないように必死に隠そうとしている芳佳、そんな芳佳を尻目にエーリカはパクパクと朝ごはんを食べている。その隣には汗ビツショリなルツキー。

バルクホルン「ふむ……皆にはアリバイがある……他に、更衣室に居た人物は？」

ブルブルと震えるルツキーを大浴場に居た美緒、芳佳、ペリーヌ、エリカが見つめる。

ルツキー「うにやあー！」

バルクホルン「逃げたぞ！ 追え！」

小動物のような俊敏さで逃げ出すルツキー、その姿はすぐに見えなくなってしまう。

美緒「ルツキーが犯人だったのか？ 手分けして探すぞ！」

「「はい！」」

大神までも巻き込んでの大捕物が始まったのだった。

大神「やれやれ……何処に行つたんだルツキー！？」

ルツキーを探している最中、ドサツ、と何者かに倉庫の中に引き込まれる大神。

大神「痛てて……誰だいこんな事をするのは……」

微かな明かりしかない倉庫内で目を凝らす、そこにはジッと自分を見つめるエーリカの姿があつた。

大神「エーリカ君？ どうしたんだい？」

エーリカ「……別に、普通だよね」

ペタペタと大神の体を触るエーリカ、エーリカは朝何故自分がこのような見え透いたトラップに引っ掛けてしまったのか確かめたかったのだ。

エーリカ「（……別になんともない、一郎と一緒にいても普段通りの私だ）」

大神「エーリカ君？ どうしたんだい？」

エーリカ「……ねえ一郎、シャーリーの裸見てどう思つた？」

大神「な、何を言うんだエーリカ君！ あの時は戦闘中だつたら見ている場合じゃなかつたよ」

エーリカ「本当かなー？ 今日シャーリー凄い顔してたよ？ 何かしたんじゃないの？」

大神「一体どうしたつて言うんだい？ 何か変だぞエーリカ君」

エーリカは少し迷つてズボンにと手を掛ける、

大神「え、エーリカ君何を？」

エーリカ「……」

一気に下りようとすると、やはり出来ない。

エーリカ「（……私、見られたくないんだ、一郎に、だらしない所を、恥ずかしい所を）」

自分の気持ちを確かめる為とは言え、かなり大胆な行動に大神は終始ドギマギしている。

エーリカ「ね、一郎はさ。やつぱり綺麗好きで料理が上手いやマトナデシコみたいな子が好きなの？」

大神「何を言い出すんだエーリカ君？」

エーリカ「いいじやん、教えてよ」

大神「……そうかもしけない、でも深く考えた事がなかつたな」

エーリカ「……ふーん」

そう言つて、エーリカは思いきつて大神の胸に寄り添つてみる。

大神「エーリカ君！？」

エーリカ「（ありや～こりや確定かなー）」

大神の体温を感じながら、驚くくらい早鐘を打つて自分の鼓

動を確かめてエーリカは小さく溜め息を付いた。

エーリカ「ね、一郎」

大神「どうしたんだいエーリカ君、さつきからおかしいぞ?」

エーリカ「……私さ、一郎の事」

ガチャーン! と大きな音を立てて入り口が開かれ、そして閉じる、

外ではルツキニーを追い掛ける声が通りすぎて行った。

ルツキニー「ふう……助かつたあ……あれ、ここは……うにゃあ

!」

暗がりの中つまずいたルツキニーは警報機に引っかかり、それを鳴らしてしまった。

ルツキニー「あわわ……どうしよ……どうしよ……」

そんなルツキニーの姿をエーリカは溜め息を付いた。

エーリカ「まつ……いつかまたの機会つて事で」

大神「エーリカ君?」

大神の胸からスッと立ち上がつてルツキニーを確保しに行くエーリカだつた。

エーリカの勲章授与式典が行われている、罰としてバケツを持たされているルツキニーはブルブル震えている。

芳佳「でも……結局ルツキニーちゃんのズボンは何処に行つたんでしょうが?」

バルクホルン「そう言えば……そうだな」

エリカ「そうですよねー私は自分で戦闘服のポケットに入れてたの忘れてましたー」

ルツキニー「そうだよ! 私は被害者なんだよー」

リーネ「じゃあ、一体誰が?」

ミーナから勲章を受け取り、それを受け取つたエーリカは壇上を降りて大神の前にと歩み寄つた。

ミーナ「ハ、ハルトマン中尉、まだ記念撮影が……」

大神「エーリカ君?」

エーリカ「……えい！」

そう言つて、抱きついて来たエーリカを大神が受け止める、所
謂お姫様抱つこの格好だ、

エーリカ「ぶい！」

そう言つて、大神にお姫様抱つこをされながらポーズを決めるエ
ーリカに各取材陣のフラッシュが降り注ぐ。

エリカ「酷いです！ やつぱり二十四股ですー！ 巴里の皆に報告
しますからね！ 大神さん！」

芳佳「ああ！ あ、あのズボン！」

フラッシュの雨に包まるエーリカ、そのズボンを見て驚きの声を
あげる芳佳達、今回の事件の真犯人は天使のような笑顔で写真撮
影に応じていた。

次回予告

エイラ「全く、なんて奴なんだ大神ハ！ サーニャを毒牙に掛け
る訳にはいかナイ！ 私がサーニャを守るンダーハ！」 サーニャ「
次回、『いつしょだよ』 ブリタニアに……浪漫の嵐」

第五話「いつしょだよ」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦SS

第五話「いつしょだよ」

第五話「いつしょだよ」
私、 サーニャ・Ｖ・リトヴャクには最近悩みがあります。 それは新しく隊に入つて来た隊員の方についてです。 帝都、 巴里を救つた歴戦の隊長である大神一郎大尉。 彼には色々お話を聞いてみたいと思っているのですが、 私には夜間哨戒任務があつて昼夜逆転の生活を送つてゐるし、 エイラからは「大神大尉はケダモノだから近づくな」とショッちゅう言われます。 何より私は中々人に自分から話掛ける事が出来ないので、 なのでずっと遠くから大神大尉の事を見ていたのですが……ついに大尉とお話出来るチャンスがやつてきました。

エリカ「大神さあ～ん帰りたくないです～」
エーリカの勲章授与式も終わつた夕方の事。 巴里華撃団の関係者がエリカを迎えてストライクウイッchez基地にとやつて來た。
大神「わがままを言つちゃ駄目だよエリカ君。 エリカ君には巴里の街を守るという責務があるだろう?」
エリカ君「そうですけどあ……」

エリカは光武の詰め込み作業が終わつた大型車両の前で未だに駄々をこねている。 次に大神に会えるのはいつか分からない、 エリカは単純に寂しいのであつた。

大神「大丈夫だ、 エリカ君ならきつと巴里華撃団の隊長としてやつて行けるさ」

その言葉を聞いて、 エリカ君の表情が曇る。

エリカ「大神さん、 私は隊長代理です。 大神さんの代理として一生懸命頑張りますけど……私達の、 巴里華撃団の隊長は大神さんなんです……大神さんじゃないといやなんです！」

大神「エリカ君……ありがとう。 その気持ち凄く嬉しいよ。 必

ずまた巴里に行くから、 その時まで俺の代理を務めてくれるかい？」

エリカ「大神さん……はい！ 私にドーンと任せてくれ！ だから……約束ですよ？」

エリカは少し涙ぐんだが、 すぐに涙を拭いて大神に笑顔を見せた。

大神「ああ、 分かった、 約束だ」

エリカ「えへへ……皆さんもお元気で！ また助けが必要だつたらいつでも呼んでくださいねー！」

エリカはウイツチーズの皆さんに手を振つて大型車両にと乗り込み、巴里にと戻つて行つたのだった。

シャーリー「……」

バルクホルン「どうしたリベリアン？ 嫉妬か？」

シャーリー「な、 何言つてんだよ！ お堅いカールスラント軍人でもそんな事言うんだな！」

バルクホルンにしては珍しく人をからかつて、 皆エリカに向かつて手を振つて見送つているが、 先程の大神とエリカのやり取りを見せ付けられて複雑な表情を浮かべている者も数人居た。

ミーナ「巴里華撃団の手を借りなければならなかつた…… それ程今回のネウロイは強力だつたわ」

美緒「そうだな、 ここら辺でネウロイが複数匹で行動する事は珍しい事だ、 そがあんな強力なネウロイが一気に三体も…… 何かが起こつていてるのか？」

エリカを見送り、 日も傾いてい来つてるので皆宿舎にと戻る、 その道中でミーナは深刻な表情で呟いた。

大神「ネウロイの動きが活発化して来つてるのでしようか？ 幸い悪魔や怪人、 亡靈と言つた魔の存在は各地の華撃団の奮闘で抑えこまれていますが…… こちらも活発化して来るといよいよ手の打ちようがありません」

ミーナ「そうね、 帝都、 巴里に続いて紐育でも華撃団設立の動きがあるようですし…… 魔の者達は大丈夫でしょうが、 ネウロイ

の活発化は非常に危険です。現存で対抗出来るのはウイッチのみ、中には特例で大神大尉やエリカさんのような靈子甲冑で対抗出来てしまう方もいますが……極少数です。このブリタニアを破られる訳には行きません」

大神達のシリアルスな話を他の者達は静かに聞いている、皆は自然にミィーティングルームにと集まつていた。

美緒「うむ、その通りだ。サー二ヤ、確かにここ一週間の夜間哨戒で数度に渡つてネウロイと遭遇したと報告していたな？」

サー二ヤ「はい、いずれもこちらに仕掛けて来るような動きではなく、ずっとこちらを見ているような感じでした」

ミーナ「……ネウロイもこちらの戦力を測つてはいる？」

バルクホルン「まさか、ネウロイがそんな行動しているなど聞いた事もないぞ？ どう思う大神。……大神、なんだそれは？」

大神「い、いえ。自分は普通に座つただけなのですが……」

大神の左右にはエーリカとシャーリー、膝の上にはルツキニーと両手どころか全身に花状態である。

バルクホルン「ハルトマン！ シャーリー！ お前達は何をやつているのだ！」

エーリカ「んー？ 一郎の隣に座つちゃ駄目なんて規則あつたつけ？」

シャーリー「そ、そうだ！ 私はただルツキニーが大神の所に行つたからついて来ただけだぞ？」

ルツキニー「まーいいじゃん、皆仲良くして良い事だよー！」

ペリー・ヌ「……仲良くで終わればいいのですけど」

ペリー・ヌの言葉をルツキニーだけが理解出来ずに頭上に？を浮かべていた、エリカと大神の関係、ウイッチ達の目にはどう見ても恋人同士に見えていた。当初美緒が言つていた十三股が真実味を帯びて来ていたのであつた。

ミーナ「……大神大尉、その夜間に現れるネウロイの事が少し気になります。夜間哨戒班を結成し夜間の戦力を強化するべきだと

考えているのですが、 その指揮をお願い出来ませんか？」

大神「自分がですか？ 了解しまし 」

ルツキー「反対はんたーい！ そしたら昼にイチローと遊べなくなっちゃうよ！」

エーリカ「そうだね、 一郎は大事な戦力だし、 迎撃部隊に残して置いた方がいいんじゃないの？」

シャーリー「うん、 うん、 私もそう思う」

ミーナはこの三人の反応を見て、 恐れていた事が起こりつつある事を悟った。 今回の夜間班に大神を配属するという案も大神と彼女達を一定距離取らせるべきだと考えての事であった。 ミーナの中のトラウマ。 自分のように大切な人を、 愛した幼馴染みを戦争で無くしてしまった自身のよつたなトラウマを皆に抱いて欲しくなかつたのだ。 他にも隊の風紀や士気が滅茶苦茶になつてしまふ恐れもある。 隊長として、 ミーナの判断は正しい物であると言える。

バルクホルン「ミーナ、 わ、 私も大神は昼の部隊に残して置くべきだと思つ」

ミーナ「バルクホルン大尉、 貴方まで？」

バルクホルン「い、 いや。 ハルトマンの言つ事にも一理あると……やめろ！ つづくな！ 何をするんだハルトマンにリベリアン！」バルクホルンの言葉を聞いてエーリカとシャーリーがうりうりとバルクホルンをつつく、 バルクホルンは顔を真っ赤にして一人を振り払う。

ミーナ「大神大尉、 どう思うでしようか」

大神「はい、 昼の迎撃部隊は元々自分が居なくとも十分に機能していました。 夜間に現れるネウロイも気になるので夜間哨戒班のお話を受けたいと思います」

ルツキー「ええ、 イチロー本当にー？」

ルツキーはスネたような声を出している、 昼の部隊のウイツチ達も何処となく悲しそうな表情を浮かべている。

ミーナ「ありがとうございます」大神大尉、では一週間から十日程
ネウロイの動きを探つてください」

美緒「宮藤、飛行時間がまだ少ないお前も夜間に行くんだ。い
い経験になるだろ？」

芳佳「は、はい！ 分かりました！ 大神さん、エイラさん、

サー二ヤちゃんよろしくお願ひします！」

大神「ああ、こちらこそ。エイラ君、サー二ヤ君よろしく頼
むよ」

サー二ヤ「は、はい。よろしくお願ひします」

たどたどしく挨拶するサー二ヤを見て、最高に面白くなさそうな
表情を浮かべるエイラなのであった。

夜、大神は資料を作成した後に布団に入ろうとしていた、その
時軽くドアがノックされる。

大神「はい、どうぞ」

エーリカ「おっじやましまーす」

大神「え、エーリカ君？」

突然部屋を訪れたのはエーリカであつた。彼女はタンクトップの
ような上着とズボンだけと言うラフな格好である。

大神「どうしたんだいこんな時間に？」

エーリカ「それがさ、久々に部屋を片付けようと手を付けたのは
いいんだけどね？ 雪崩みたいに服とか本が崩れて来てベッドを埋
め尽くしちゃつてさ。寝るとこ無くなつたから泊めて？」

大神「と、泊めてつて……それは別に構わないが、一体どうや
つたら部屋で雪崩が起きるんだい？」

エーリカ「細かい事はいーの！ も、寝よつ？」

エーリカは大神のベッドに飛び込んだ。

大神「い、一緒にかい？ いいよ俺は床で寝るから」

エーリカ「ふうーん……エイラとは一緒に寝るのに私とは寝てくれ
ないんだ？」

大神「いい！？ …… だ、 誰に聞いたんだい？」

エーリカ「ミーナ」

大神「み、 ミーナ隊長…… しかし色々まざいんじやないのかい？」
既にベッドに入つて布団まで被つてゐるエーリカ、 寝る気満々である。

エーリカ「まざい事、 するの？」

大神「な、 何を言つてゐるんだエーリカ君！ からかわないでくれよ」

エーリカ「…… いいから寝よ！ 大丈夫だよ一晩くらい。 バレないばれない」

大神「…… 仕方ないか」

スツと布団を捲つてベッドに入る大神、 エーリカの体温をすぐ近くに感じる。

その時、 ロンロンとまた部屋の扉がノックされた。

シャーリー「あ、 あの一郎…… もう寝てるか？」

大神「い、 いやまだ起きているよ」

ついつい条件反射的に返事を返してしまつた。 扉が空いた瞬間に

エーリカを布団の中にと抱き込んで隠す。

エーリカ「（ちょ、 ちょっと一郎！）」

大神「（すまないエーリカ君！ すぐに終わるから）」

シャーリー「よ、 よお一郎。 あの…… なんだそのふくらみ？」

大神「い、 いやこれは少し布団を重ね過ぎてね」

シャーリー「…… ほーう、 布団をね」

パツと布団を捲るシャーリー、 その中には勿論抱きしめられたエーリカの姿が。

大神「…… 違うんだシャーリー君」

シャーリー「わ、 わ…… 私だつてええええ！」

そう残してまたもや物凄いスピードで走り去つて行つてしまつたシャーリーであつた。

エーリカ「ありやりや…… シャーリーに悪い事したな」

大神「……どうすればいいんだ」

二日連続で自身の痴態を見られてしまった大神、ガックリと肩を落としてしまった。

エーリカ「あ、あの一郎、そろそろ離してくれれば助かるんだけど……」

大神「す、すまない！」

パツとエーリカを解放するとエーリカは大神から離れて後ろを向いてしまった。

大神「すまなかつたエーリカ君……エーリカ君？」

エーリカ「……わ、私シャーリーの誤解解いて来るから！ やつぱり今日は自分の部屋で寝るよ！」

大神「エーリカ君！？」

そう言って、エーリカも疾風のように走り去ってしまった。

エーリカ「ふう……こんな顔誰にも見せられないよ」

エーリカは普段の彼女からは考えられない程赤くなつた顔の火照りが冷めるのを待つてから、シャーリーの部屋にと向かつたのであつた。

その翌朝、夜間哨戒班となつた大神と芳佳、そしてサー二ヤとエイラは一緒に朝食を取つていた。美緒の指示でこの食事の後すぐ夜間に備えて寝る事になつていた。

芳佳「さつき起きたばっかりなのに……寝れるかな……」

大神「そうだね、流石に寝れるかどうか」

エイラ「で、私達はどうすればいいんだ？」

寝れるかどうか心配顔な大神と芳佳であつたが、エイラとサー二ヤにとつては慣れっこであつた。

美緒「うむ、皆一部屋に固まつて寝ればいい。大神のベッドは男性用のベッドが支給されているから大神の部屋がいいだろう」

エイラ「ま、待つてくれよ！ 大神と一緒に寝ろつてノカ！？」

エイラの声に離れた所で食事を取っていたエーリカとシャーリーが反応する、ルッキーは大神が取られたような気持ちで寂しそうであった。

美緒「任務の内だ、大神も分かつていてるだろ?」

大神「は、はい。勿論です」

美緒の威圧するような視線を受けて若干たじろぐ大神。 サーニヤは芳佳と多少恥ずかしそうに大神を見つめている。

エイラ「いいか? サーニヤに絶対変な事するナヨ!?」

大神「分かつていてるよ、取りあえず……皆はベッドに寝てくれ」

芳佳「大神さんはどうするんですか?」

大神「俺は床でも何処でも大丈夫さ」

皆は大神の部屋にと集まっていた。 外からはリーネと坂本が訓練する声が聞こえて来ている。

芳佳「駄目ですよ! ここは大神さんの部屋なんですから!」

サーニヤ「うん……そんなに気を使ってくれなくとも大丈夫です」

エイラ「サーニヤ!」

サーニヤ「エイラ、大神さんはそんな人じゃないわ」

サーニヤに反論されると滅法弱いエイラはうむむと唸つてから「今日だけダカンナー」と叫んだ。

まず寝る前に問題となつたのが配置決めである。

芳佳「大神さんの布団なんですから、大神さんが真ん中に寝てください」

エイラ「じゃあ隣は宮藤だな、それで……もう片方がわたしダ!」

大神「エイラ君が?」

エイラ「か、勘違いスンナヨナ! 大神が変な事しようとか考えたらわたしの未来予知ですぐにサーニヤを助ける為ダカンナ!」

そう言って、大神を真ん中にして芳佳とエイラが挟む、サーニヤは少し不服そうであつたが無言でエイラの隣にと寝転んだ。

芳佳「……寝れませんね」

大神「そうだな……」

エイラ「い、いつもだつたらすぐ寝れるンダ！ 大神が居るカラダ！」

大神「お、俺のせいかい？」

サー二ヤ「あの……大神大尉」

それまで口を閉ざしていたサー二ヤが大神にと話掛けた。

大神「なんだい？ サー二ヤ君」

サー二ヤ「私も眠れないの……大神大尉のお話を聞かせて欲しいです」

大神「俺の？」

サー二ヤ「はい、帝都や巴里で……どんな戦いをしていたのか気になります」

芳佳「私も気になります！ 是非聞かたいです」

芳佳もそれに食付いたので大神は帝国華撃団や巴里華撃団に居た頃の話を始める。

まだ駆け出しの新人だつた頃、帝国華撃団の皆と協力して悪魔を退けた事もあつた

。軍部のクーデターを鎮圧した事もあつたし、巴里では怪人や亡靈との激戦を繰り広げた。色々な出会いがあつて別れがあつた。話している内に段々と皆の事を思い出してくる大神であつた。

芳佳「本当に凄いですね……扶桑でニュースになつていていた事件ばかりじゃないですか。全部大神さんが解決してましたか！？」

サー二ヤ「巴里での戦いもつい最近までニュースになつてた……本当に凄いんですね」

大神「いや、俺だけの力じゃないさ、帝国華撃団の皆も、巴里華撃団の皆も必死に戦つて、なんとか勝つて来たんだよ」

エイラ「まあ……大神の戦いを見てれば分かるよ、色々戦い抜いて來たんダナつて」

大神「このストライクウィッシューズでも、一生懸命戦うよ。だから皆も力を貸して欲しい」

大神は何気ない気持ちで皆に声を掛けた。

芳佳「は、はい！ 私なんかの力でよかつたらお貸します！ 一緒に皆を守りましょう！」

サー二ヤ「私も……協力します」

エイラ「……フン」

サー二ヤ「エイラ」

エイラ「分かってるよ！ 言われなくたって戦うつテノ！」

その後も、エイラやサー二ヤの過去の話や色々な事をして時間だけが過ぎていった。気がつけば皆眠っていて起きた時には夕方になっていた。

皆で寝起きの汗ばんだ体を綺麗にする為に宿舎内に作られたスオムス名物のサウナに向う夜間哨戒班。

しつかりとアイマスクまでされている大神は何も見る事が出来ずに、皆が上がった後に一人だけで川に向かわされた。

大神「ふう……成程気持ちがいいな。サウナの後には冷たい川に入るのか。 独特な文化だなあ……しかしい気持ちだ」

川の流れに逆らわずにプカプカと浮んで流れて行く。

エイラ「止まれバカ！ こつから先は行かせないゾ！」

大神「え、エイラ君！？」

岩の上に立塞がっていたのはエイラだった。タオルを体に巻いて、サー二ヤを守ろうと待機していたのであった。

エイラ「案の定来たな！ 大神ならぜつた ウワツ！」

ツルツと、苔の生えた岩の上などに立っていたのでバランスを崩して川に落ちてしまうエイラ。

大神「エイラ君！？」

エイラ「う、ウソダロ！？ あ、足が……」

大神「今助ける！」

エイラの元に泳いで行く大神、なんとかエイラを助け出して川岸まで運んでやる。

大神「大丈夫かいエイラく……」

ピタッと動きが止まる大神、それを不思議そうな目で見つめるエイラ。

エイラ「何見て……」

シャーリーの時とは比べ物にならない大惨事が発生していたのであつた。必死に泳ごうとしたエイラ、そして必死にエイラを助けようとした大神、二人のタオルはプカプカと川下にと流れ行つた。

大神「……」

エイラ「……」

完全に思考が停止してしまった二人。傍から見れば裸同士で見つめ合つた一人である。ド変態にしか見えない絵だ。

大神「……あ、あのエイ」

エイラ「うううううわあああ！な、なんてモノ見せるんだよバカア！って言うか見るナ！なんだよコレ！何が起こってるんだヨ！」

大神「お、落着くんだ！今タオルを拾つて来るから！」大混乱を起こしているエイラを為に一刻も早くタオルを拾つて来なければならぬ。大神は急いでサー二ヤや芳佳に見つかる事無く二人のタオルを拾つて来たのだった。

エイラ「……い、イイカ！？今この場では何もなかつたし見なかつた！ソウダナ！」

大神「あ、ああ。その通りだ」

エイラ「マッタク……あつ……あんなグロテスクなモノ見せやがッテ……」

大神「エイラ君！何もなかつたし見なかつたつて今言つたばかりじゃないか！」

エイラ「う、ウルサイ！」

再びタオルを巻いて岩場に座り込む二人、中々に衝撃的な出来事であつた。中々立ち上がるうとしないエイラを心配して覗き込む大神。

大神「そろそろ行こうエイラ君、大丈夫かい？」

エイラ「……まだ足が痛いんだよ……おんぶして運んでくれ」

大神「お、おんぶかい？」

エイラの体を見る、薄手のタオル一枚の状態でおんぶなどしたら色々と大変な気がする。しかしあ先程彼女の全裸を見たばかりだ。

鋼の精神力を持つ大神と言えどもかなりまずいと自覚出来ていた。エイラ「サー二ヤや宮藤に見つからない内に早くするんだよ！」

そう言つて催促するエイラ、大神は覚悟を決めてエイラをおんぶしてやる。

大神「（……いや駄目だろうこれは）」

体にタオルを巻いているだけである。もはや裸であると言つてもいい。その感触が直に伝わってくる。

大神「（心を無にするんだ！）」

ふにゅ、ふにゅ、と悩ましい感覚が一定間隔でやつて来る。いくら大神と言えども回避は不可能であった。

大神「（そうだ！薔薇組の皆を思い出すんだ！薔薇組の皆……よし少し収まつて来たぞ！）」

帝国華撃団薔薇組、つまりモーホーの人達ばかりが所属する部隊である。彼らを思い出す事によつて多少大神は冷静さを取り戻す事が出来た。

エイラ「オイ……大神、分かつてるダロウナ？」

大神「あ、ああ。今回の事はすっかり忘れて」

エイラ「そ、そうじゃない！ふ、扶桑の人間は……裸全部見ておいて……せ、責任も取らないノカ？」

大神「せ、責任かい！？」

背中に乗るエイラの表情を見る事は出来なかつたが、彼女の声は緊張で震えていた。

エイラ「当たり前ダロ！ソノ……ダカラ……優しくしろマナ……」

大神「え、エイラ君！話が飛躍し過ぎていまいち何を言つているのか分からぬぞ！？とにかく一旦宿舎に帰つて落ち着けづー！」

エイラ「あ、ああ……」

見つからないように慎重と宿舎にと戻り何事もなかつたようにサー二ヤと芳佳と合流した大神とエイラであつた。

勿論、平然と出来る訳もなく夕食の時にはギコチナイ一人に容赦なく勘織るような目線が集中していたのだった。

サー二ヤ「エイラ、大丈夫なの？」
エイラ「サー二ヤまで何言つてンダ、大丈夫ダ！ まあ早く行くゾ！」

ついに夜間哨戒の時間となつた。大神は光武にと乗り込み、飛行準備を整えた。

芳佳「あ、あのサー二ヤちゃん……手を握つていいかな？」
サー二ヤ「芳佳ちゃん？ どうしたの？」

芳佳「真つ暗な夜の空に飛び立つて行くつて……ちょっと怖くて」
サー二ヤ「……うん、分かつた、一緒に行こう？」

エイラ「……ツタク、行くぞホラ」

サー二ヤとエイラが芳佳の手を取る。三人は手を繋いで暗闇にと飛んで行く。

大神はその後に続いて光武を発進させたのであつた。

芳佳「うわー綺麗！」

目が慣れて来ると、これ程素晴らしい景色はなかつた。月光に照らされ、星々が輝く夜空を飛ぶ。中々に神秘的である。

芳佳「よかつた、誕生日にこんな景色見れて嬉しいよ」

大神「芳佳君、今日誕生日だつたのかい！？ なんで言わなかつたんだい！？」

芳佳「え、だ、だつて皆さんには関係ないと思つて……」

エイラ「何言つてンダヨ、誕生日だぞ誕生日！ ツタク、サー二ヤといいお前といい。変な所で氣を使うなヨナーハ」

エイラは信じられないと言う表情で芳佳を見る。サー二ヤは無言で魔導針を開けし神経を集中させる。

エイラ「ン？ つてサー二ヤ！ 一人だけの秘密じゃなかつたの力

三一」

サー二ヤ「」めんねエイラ、 芳佳ちゃんに誕生日プレゼントと思つて」

芳佳「え、 一体……え、 漂い！」

初めは小さかつた音が徐々に大きくなる、 どこかの国のラジオ放送をサー二ヤの能力で受信してしたのだった。 綺麗な旋律が皆のインカムに届く。

大神「サー二ヤ 君の魔法は凄いね」

サー二ヤ「いえ……私の能力なんて、 ネウロイをやつける事も出来ません……」

大神「何を言つているだサー二ヤ君、 君の能力でどれだけの人が救われた事か、 なにより見てごらん。 いつもやって、 人を笑顔に出来るんだ。 素晴らしい魔法だよ」

芳佳「そうだよ！ ありがとウサー二ヤちゃん！ 最高のプレゼントだよ！」

サー二ヤは少し戸惑つてエイラと芳佳を見た、 そして静かに、 月光に照らされ、 ヒツソリと咲く月見草のよう美しい笑顔で微笑んだ。

しかし、 その微笑みを遮るよつにラジオにノイズが入り始める。

大神「…………これは？」

サー二ヤ「…………間違いありません、 前方にネウロイ、 距離は一万二千です」

大神「よし、 皆戦闘準備だ、 向こうの出方を伺う」

皆は小さく了解、 と答えるとネウロイと一定距離を取つて飛行を始める、 サー二ヤの魔道針は不気味な音を拾つていた。

芳佳「これは……？ もしかしてネウロイの声？」

エイラ「何言つてるんだヨ……ノイズダロ？」

サー二ヤ「いえ……真似しているみたい…… さつきのラジオの音楽を……」

大神「ネウロイが、 学習していると言うのかい！？」

エイラ「そんな……ツ！ 避けろミンナ！」

エイラの叫び声の数秒後、ネウロイからの光線が到達する、エ

イラの未来予知のおかげで被弾無しで回避する事が出来た。

芳佳「どうしましょう……あんな大型のネウロイを……私達だけで？」

エイラ「現にもう戦闘が始まってるンダ！ 背中見せて飛ぶ訳にいかないダロ！」

大神「……俺が攪乱する！ この中で一番の火力はサー二ヤ君のフ

リー・ガーハマーの連射だ！ サー二ヤ君頼んだぞ！」

エイラ「バカ！ 無茶だ大神！」

大神は光武でネウロイの懷にと飛び込む、長距離レーザー主体の

攻撃だつたネウロイが迎撃用のレーザーを隙間なく斉射する。

芳佳「私が、壁になるから！ サー二ヤちゃんが！」

芳佳はサー二ヤの前に立塞がリシールドを開する。

サー二ヤ「……」

ブルブルと震える手で照準を合わせる、ここで自分がミスを犯したら皆ヤラれてしまうかもしれない。

エイラ「大丈夫だよサー二ヤ、私が居る」

ソッと、サー二ヤの手を取るエイラ。その手が何もない空間に

とフリー・ガーハマーの照準を持つていく。

サー二ヤ「エイラ？」

エイラ「大丈夫、信じるンダ」

サー二ヤ「……うん」

懸命に攻撃を回避する大神、迎撃するネウロイは徐々にエイラが構えた照準の位置にと近づいて来る。

エイラ「3、2、1 イマダ！」

サー二ヤ「つ！」

フリー・ガーハマーが発射される、真っ直ぐに飛翔して、エイラの示した位置にと着弾する。

轟音が辺りを包んでネウロイが火だるまになる、しかし。

芳佳「そんな！」「アが！」

むき出しになつた「アは未だ健在である。

サー二ニヤ「……そんな」

エイラ「大丈夫だ、信じろってイツタロ？ やつぱり凄い奴だよ、
アイツは」

エイラの言葉に一人は戸惑たが、その数秒後にはエイラの言った
言葉の意味を理解する事が出来た。

大神「狼虎滅却」

ネウロイの更に上空、急上昇した光武がネウロイのコアを狙つて
いた。

大神「無双天威！」

カツと閃光が辺りを包む、大神の必殺剣がネウロイのコアを貫いたのだった。空には、また静寂が訪れていた。そしてその静
かな空に、綺麗な曲が流れて来たのだった。

サー二ニヤ「……この曲」

サー二ニヤは月光に照らされながら上昇して行く、その姿は、月
の妖精であると言われば信じてしまつ程に美しい姿だった。

サー二ニヤ「……この曲は……お父様が……お父様！」

寝る前に話していたサー二ニヤの過去、自身の父とネウロイの侵攻
によつて生き別れになつてしまつっていた。その父が、音楽家であつた父が自分の為に作ってくれた曲、サー二ニヤの詩が夜空に響
いている。

芳佳「凄い……凄いよ！ こんな事……奇跡だよ！」

エイラ「……奇跡なモンカ」

大神「どういう事だい」

エイラ「……今日はな、 サー二ニヤの誕生日でもあるんダヨ」
エイラは小さく呟くと、空を泳ぐサー二ニヤの姿を見る。サー二
ニヤの瞳には涙が浮んでいた。

サー二ニヤ「お父様……サー二ニヤは、 サー二ニヤは！」にいります……

サー二ニヤは……十四歳になりました……」

その曲が終わるまで、 サーニャは上空高くに浮んでいたが、 曲が終わると大神達の元に戻つて來た。

サーニャ「『めんなさい……つい……』」

大神「いいんだ、 それよりサーニャ君、 そして芳佳君。 お誕生日おめでとう。 明日はパーティにしよう！」

芳佳「ほ、 本当ですか！？」

大神「ああ、 当たり前さ。 ハイラ君、 準備を手伝ってくれるかい？」

エイラ「勿論だ、 皆で盛大なパーティにしてやるからナッ！」

サーニャと芳佳は、 笑い合つて、 大神とエイラに礼を言つのであつた。

そして基地にと歸投する途中、 サーニャは芳佳と大神に声を掛けた。

サーニャ「あの……さっき上昇した時に感知したんですけど……多分、 扶桑のラジオだと思うんですけど……」

大神「本当かい？ 芳佳君、 ラジオとか聞いて居たかい？ 僕はあんまり詳しくないんだが……」

芳佳「わ、 私もあんまりです。 でも久しぶりに扶桑の音楽が聞けるかもりせませんよ！」

大神「そうだな、 ジャあお願い出来るかいサーニャ君」

サーニャ「はい」

サーニャは神経を集中させて魔道針を展開する、 段々と音声がクリアになって行き、 音楽が聞こえて来る。

芳佳「こ、 これつて！ 大神さん！」

大神「……」

歌をさあ歌いましょう それが夢の続き さよならは言わない
の また会えるから

春は巡る いつも 美しく いつかまた この夢のつづきを

大神は自分の目頭が熱くなるのを感じていた。この曲は、大神が巴里に飛び立つ前最後の公演で歌っていた物。そして、それを生で歌っているのは勿論、彼女達である。

大神「……ありがとうサニヤ君、最高にうれしいよ」
サニヤ「いえ……これは、大神さんの前居た帝都の……？」

大神「……ああ、最高の仲間達だ！」

大神は目に少し浮かんだ涙を拭つてそう宣言した、今はまだ泣く時ではない。まだ人類は驚異にさらされているのだから。さよならはいわない また会えるのだから。

これで、これで終わっていればなんと感動的で素晴らしい話であつただろうか。

翌朝、帝都、帝国劇場。

加山は眠たい目をコスつて、ロビーを歩いていた。

彼女達にその事実を告げるのは巴里華撃団の面々に伝える数倍の大仕事であつた。

なにせ一年ぶりに再会出来ると皆信じていたのだ。

それが突然のブリタニア赴任である。

当然の如く、その場は大荒れであつた。

泣き出す者

自分の家で圧力を掛けて自分もストライクウィッヂに行くと言

い出す者

無言の圧力を掛けて来る者

冷静さは装つては居るが軍部に乗り込んで真相を探る等と物騒な事を言い出す者

カタコトの日本語で捲くし立てて来る者

そして、どうしていいのか呆然とたたずむ事しか出来ない者と皆それぞれ大神のストライクウイッチーズ入りはショックを受けているようであった。

でも、自分達が今大神に出来る事は何かと考え、届くという保証も無いままラジオにと出演したのであった。

そんな彼女達は今ロビーに集合して新聞の朝刊を見入つている。

加山「どうしたんだい雁首揃え……何かあつたのかい？」

彼女達の様子は明らかにおかしい物であった。皆一様にウフファハハと狂氣を感じる笑い声を上げている。

加山は皆を搔き分けて朝刊を手にとった。彼女達がそうなつた原因はデカデカとその日の朝刊の一面にと載つていた。

加山「……大神、俺は知らんぞ」

加山はそう言つてその場を逃げ出し、次の任務地に逃げるように出向いたのであった。

その文面はこうである。

『柏葉剣付騎士鉄十字勲章を授与されたカールスラント軍、エーリカ・ハルトマン中尉とそれを抱き抱える我が國の大神一郎大尉』

写真付きで、でかでかと、エーリカをお姫様抱っこする大神の姿がその記事には掲載されていたのであった。

大神「ふう……ようやくブリタニアに来てから初めての休みだ、最近、何故か体に戦慄や悪寒が走る事があるし、ゆっくりと体

を休めて……つてサー二ヤ君！ ここは君の部屋じゃないぞ！ エ
イラ君まで！ 次回『ブリタニアの長い休日』 大正桜に浪漫の嵐
！

第六話「ブリタニアの長い休日」（前書き）

ストライクウェイブチーズ×サクラ大戦S.S.です

第六話「ブリタニアの長い休日」

第六話「ブリタニアの長い休日」
俺、 大神一郎がブリタニアに来てから一ヶ月が過ぎようとしている。 サーニャ君と芳佳君の誕生日パーティを盛大に上げたのが二週間程前、 それから夜間哨戒を続けたがあの戦闘以後ネウロイが出現する事はなかった。 夜間哨戒の任務を解かれて通常の部隊に戻った俺にブリタニアに来てから初めての休日が訪れようとしている。 そう通常の任務より余程忙しい休日が。

ガリアの重要都市、 巴里、 シヤノワール地下。

そこには新聞を広げて雁首を揃える巴里華撃団の面々

グリシーヌ「……エリカの話を信じていなかつた訳ではないが……ここまで堂々と証拠を晒すとは、 余程隊長は死にたいらしい」
花火「グリシーヌ、 落ち着いて……扶桑では浮氣は男の甲斐性ともいいますし……それにまだ本当に大神さんが」
グリシーヌ「そんな扶桑の理屈を私は知らん！ いいのか？ こうやって隊長がドンドン知らない女達と関係を持つて行つて！？」
花火「それは……嫌ですけども」

物議をかもしているのは勿論あの記事である。 扶桑よりも早くこの記事が大々的に報じられ、 ここ連日こうやって対策会議をしているのであった。

「だからあ～皆でイチローに会いに行つて直接聞こうよ～」
エリカ「駄目ですよ……巴里の街を開ける訳には……」
ロベリア「そう言つがよ隊長代理、 敵の総大将を倒してから三ヶ月、 私達に出撃機会なんてあつたかい？」

皆ロベリアの言葉にだんまりとする。 巴里での激戦を終えてから、 ネウロイの接近はある物のそれらは全て巴里のウイツチ部隊が迎撃している。 実際の所、 巴里華撃団の戦つべき敵は現在存在し

ていないので。

エリカ「でもでも……やっぱりいつ敵が来てもいいように準備しておかないとですよ！」

「コクリコ……ボク、イチローに会いたいよ」

「コクリコが小さな声で呟く、勿論、皆も口には出さないが同じ気持ちであった。出来る事ならばすぐに光武を持ち出してストライクウィッチーズに参戦したい気持ちである。

「グラン・マ……あんた達」

連日、こうやって巴里華撃団の面々が集まっているのをシャノワールの支配人であり巴里華撃団の司令であるグラン・マは勿論知っていた。彼女達の気持ちを痛い程理解しているつもりだし、なんとかしてやりたいと思っていたのも事実である。

エリカ「あ、あの！ 実はお願ひしたい事があります！ どうか私達を少しの時間でいいのでストライクウィッチーズに入れて貰えないでしちゃうか！」

「グラン・マ「ああ、いいよ」

エリカ「勿論駄目だつて言つるのは分かっています！ でも……え？ エリカは隊長代理として、皆の気持ちを代弁する事に必死になつていてのでグラン・マの口から出てきた言葉を一瞬理解する事が出来なかつた。

エリカ「え、えつと。ちょっと話がよくわからないんですけどお……いいんですか？」

「グラン・マ「……本来であれば、ふざけるんじゃないよ。 と言いたい所なんだけどね。 これを見な」

「グラン・マは立派な箱を開けて書状を皆に見せる、エリカやコクリコはそれを見ても「何これ？」 状態であったが他の三人は息を飲んでいた。

「グリシース「これは……ガリア政府からの！？」

エリカ「数ヶ月後にガリア、ブリタニアを跨ぐ超巨大なネウロイの巣に総攻撃を仕掛ける。 我が国はこれに全戦力の四分の三を投

入する事を決定した。 巴里華撃団もこれに参加する事を命ずる…

…つてつまりどういう事ですか？」

花火「エリカさん！ その下です！」

珍しく大きな声を出す花火に驚きながらもエリカはその文の下を読み進める。

エリカ「巴里華撃団は対魔用である光武に速やかに飛翔用のパーティを装備し、特別部隊ストライクウェイツチーズに合流する事。 本作戦が終わり次第通常の降魔部隊にと復帰するよう… つてつまり大神さんに会いに行けるって事ですか！？」

コクリコ「そうだよ！ やつたあ！」

エリカやコクリコや花火は純粹に大喜びしているが、グリシーヌとロベリアはまだ不満そうな表情を浮かべている。

グラン・マ「あんた達は不服かい？」

グリシーヌ「いや……どうにもな」

ロベリア「隊長がそのなんとかウイツチーズに行つた時と同じだ。キナ臭いんだよ。 どうにも裏を感じるぜ」

グラン・マ「私もそう思つて色々聞いただしてみたが……どうにもブリタニアの上層部が怪しいね。 それを察知したのが我がガリアと扶桑さ」

エリカ「怪しい？」

エリカはコクリコと抱き合つて喜んでいたがグラン・マの表情から緊張感を感じていた。 どうにも、これは単純な話ではないようだ。

グラン・マ「まだ確たる証拠は掴めていないようだけどね。 どうやらブリタニアはネウロイのコアを使ってネウロイをコントロールする研究を進めているらしいね。 ネウロイをコントロール出来たら最後、それを軍事転用するのは目に見える」

グリシーヌ「そんな馬鹿な！ ネウロイは人類の天敵だ！ 人間の欲望の為に使うなどもつての他だ！」

グラン・マ「勿論さ、だからその動きをいち早く察知した扶桑は

手を打つたのや。 ブリタニア空軍が目の上のたんこぶとしてなんとか解散させようとしていたストライクウイッチャーズ。 そこに最強の刺客を送り込んだ。 歴戦のね」

エリカ「えー凄いですねー！ 一体誰ですかー？ 私が行つた時も居たんですか？」

全然話を理解していないエリカを置き去りにして、 グラン・マは話を続ける。

グラン・マ「ムッシュをストライクウイッチャーズに入れてブリタニア軍上層部の動きを見ていた訳さ、 幸いまだ大きな動きが起きていないようなので扶桑とガリアは先手を打つた。 数ヶ月後の大規模作戦の打診、 まだまだネウロイに居て貰わなくては困るブリタニア軍は必ず動きを起こして来るつて訳さ」

エリカ「ええー 最強の刺客つて大神さんですか！？ 流石大神さんです！」

グラン・マ「恐らく、 ムッシュにもこの事は伝えられていないだろうね。 今頃扶桑の諜報部隊が多くブリタニアに潜入している筈、 大きな動きはまだ先さ。 今は私達と扶桑の部隊がストライクウイッチャーズに合流して、 ブリタニア軍が動きを見せたなら対処、 動き無ならそのままネウロイの巣を殲滅すればいい」

グラン・マの口から語られる言葉に皆は複雑な心境であった。 純粹に大神と再会出来ると思っていたが、 その裏では国家間の色々な思惑が錯綜している。 だが、 エリカにはそんな事はお構いなしであった。

エリカ「とにかく、 また大神さんの元で戦えるんです！ 早く光武を改造してブリタニアに行きましょー！」

ロベリア「お前なあ……まあ、 国取り合戦は上の馬鹿共にやらせておけばいいんだ。 私達は私達の仕事をするだけさ」

隊長代理より隊長らしい事を言つロベリアは、 そう言つて作戦司令室から出て行つた。

グリシーヌ「口は悪いが、 ロベリアの言う通りだ。 早速準備に

取り掛かるつ

エリカ「そうですよ！ つてそう言えば扶桑からも部隊が来るんですか？」

グラント・マ「ああ、多分合流すればストライクウィッチャーズはこの地球上で最強の部隊になるだろうね」

エリカ「ええ～！ 楽しみですぅ！ どんな人達ですかね？」

エリカの天然具合に皆ズッコケそうになるが、無言で部屋を出て行くのであつた。

ブリタニア空軍、極秘施設内部。

マロニー「では……お受けになつたのですか！？」

首相「ああ、断る要素はあるまい」

ブリタニア国空軍大将であるマロニーは自分の策が後手後手になつて居る事に苛立ちを隠せなかつた。本来であればストライクウィッチャーズに一定期間戦わせた所で自身が極秘開発している「ウォーロック」を投入してネウロイを殲滅及び掌握、後々にはブリタニアや世界をこの手に、と野望を抱いていたのだが扶桑の人間がストライクウィッチャーズに加入してから計画が狂い始めている。

マロニー「了解いたしました……私も準備を進めます」

首相「頼んだぞ」

そして今回の大規模作戦、まだネウロイに退場されでは困るのだ。

なんとしてもネウロイを支配下に置かなくてはならない。

マロニー「計画を繰り上げるぞ！ 一分一秒でも早くウォーロックを完成させるのだ！」

すべてを独断で進めるマロニーの怒号が、施設内に響き渡たるのであった。

大神「ん……んん」

大神はあまりの寝苦しさに目を覚ました。自分のベッドの筈なのに右にはサー二ヤ、左にはエイラ。あの夜以降、サー二ヤは

夜間哨戒後、度々寝ぼけて大神のベッドにと潜り込んでいた。

そのサー二ヤを追いかけて、「大神がサー二ヤに手を出さないよう見張り」と言つ名田でエイラもベッドに潜り込んで来る始末であった。

大神「（……）そうか、今日はブリタニアに来てから初めての休みか……」

先日、夜間哨戒班での任務を終え、その後ミーナと坂本と共にブリタニア軍に呼び出され報告等を行つて来た。大神が隊長に就任していない事を詰め寄られるかと思ったがなぜかそんなに聞かれる事も無かつた。

そしてブリタニアから帰つてきたらすでに夜だつたので皆と会話する事無く布団に入つたのであつた。

昼間の部隊で活動しているウイッチ達は既に一週間程大神と話をしないのだ。ルツキーなどは大神が夜間哨戒から解放されたと聞いてテンションが上がつていたのに報告に連れ出されてしまい泣きそうな表情であつた。

大神「えつと……取りあえず起きるか

サー二ヤとエイラを起こさないようベッドから起き上がるが、寝間着の裾をエイラが握つて離さない。

大神「エイラ君……寝ぼけているのか

エイラ「サー二ヤあ……大神い……何やつてんだヨオ……私も混ぜてくれヨオ……」

大神「……何の夢を見ているんだろう

若干身震いしながらエイラの真つ白な指を取る、あれからエイラを見る度に『あの時』の事を思い出すがどうやら向こうもどうのようで、どことなくきこちなくつてしまつ。

静かに扉を閉めて廊下に出た。今日の予定はまだ決まっていなかつたので取りあえず朝御飯を取ろうと食堂に向う事にする。なんとなく廊下の窓から外を見る限り、ネが花壇に花を植えていた。な氣になつて階下に降りて花壇にと向う。

大神「やあリーネ君、 おはよつ」

リーネ「お、 大神大尉！？ おはよつ！」

大神「花を植えているのかい？」

リーネは花の苗に囲まれている。 久しぶりに大神と会つたので緊張しているようであつた。

リーネ「はい、 でも色々苗の種類があつて植え方がよく分からなくて……」

大神「そうか……俺も詳しくないからな……」

苗を見渡すが大神にも区別が付かないような苗が多々あつた。

大神「俺も出来る限り手伝うよ」

大神も苗を手に取るが、 リーネの表情はドンドン曇つて行つた。

大神「リーネ君？」

リーネ「……大神大尉は、 その実力で多くの人々を救つて來ました。 とても尊敬しています……私は毎日坂本さんに訓練して頂いても全然成長出来ません……私にはこうやって花を植える事しか……」

リーネは俯いて苗を植えている。 彼女は地元であるブリタニアの出身であつた。 なんとしても故郷を守りたいとの思いでストライクウィッチーズに加入した物の、 元来彼女は戦争をするような性格ではない。 優しい彼女はウィッチとして伸び悩んでいたのであつた。

大神「リーネ君、 自身を持つんだ。 君は芳佳君と二人でネウロイだつて撃破した。 もう立派なウィッチさ」

リーネ「……でも」

大神「それに、 こんな時代だからこそ花を植えるが大事だ。 戦争が終われば俺らのような軍人は必要なくなる。 人々の心を支えるのは花や木々さ」

リーネ「大神大尉……ありがとうございます」

ペリー「まあ、 大神大尉にしては良い事を言つていますわね。

リーネさん、 その花はもつと日当たりのいい場所に、 水をあ

げすぎてはいけませんわ」

リーネの後ろからペリーヌが手を伸ばす、 いつの間にかやつて來ていたペリーヌに驚きながらもリーネは指示通り苗を植えていく。リーネ「私……まだまだ自信が持てませんが……精一杯頑張つてみます」

大神「ああ、 誰だつて新人の時期があるんだ。 僕も一杯失敗して、 少しずつ成長して來たんだよ。 ペリーヌ君、 手伝つてくれるかい？」

ペリーヌ「……まあ大神大尉には一応恩もござりますし、 ここは私も手伝つて差し上げますわ」

大神「恩？ 僕何かしたかい？」

大神はペリーヌが言つている事に心当たりが無かつたのでペリーヌに聞き返す。

ペリーヌ「……先日もネウロイの攻撃から庇つていただきましたし。 私、 出身がガリアですの」

リーネ「そつか、 大神さんはガリアを救つていますもんね」

大神「俺だけの頑張りじゃないさ、 巴里の皆と力を合わせた結果さ。 ブリタニアのネウロイを倒す為に、 一緒に頑張つて行こう」ペリーヌとリーネと一緒にしばらく花を植えてから、 大神は食堂にと向かつたのであつた。 苗を植えている間に皆起床して來ていたようで食堂には多くのウイツチ達が集まつていた。

ルツキー「あつ！ イチロおー久しぶりい！」

真つ先に大神を見つけたルツキー飛びついて來た、 久々の再会を喜んでいるようだ。

大神「久しぶりだね、 僕の分の御飯あるかい？」

芳佳「はい、 用意してあります」

芳佳が大神の分の食事を持つて來て配膳して行く、 席に付いた大神の周りには既にウイツチ達が着席している。

大神「こうやつてちゃんと話のは久しぶりだね皆」

シャーリー「ちよろちよろ見かけてたから久々つて感じではないけ

87

どな

エーリカ「それよりひ、一郎今日休みでしょ？遊びに行こうよ
大神「エーリカ君も休みなのかい？今日オフなのは俺にシャーリー君とリーネ君だと聞いていたけど」

エーリカは隣に座つて大神のおかずを勝手に食べながら遊びに誘っている。

エーリカ「前々から溜まつてた休暇を使えつてミーナがうるさくてさ。仕方なく使つたんだ」

本当は一昨日に戦力不足を心配するミーナになんとかお願ひして休みを貰つていたエーリカであつたが、そんな事を言つて誤魔化している

シャーリー「本当かあ？一郎と一緒に遊びたくて休み取つたんじゃないのかあ？」

シャーリーがからかうような口調で勘ぐつて来るがエーリカは涼しきな表情で受け流している。

大神「ブリタニアの街を見てみたいと思つてるんだが……誰か一緒に行くかい？」

ルツキニー「はいはーい！行く行く！」

シャーリー「ルツキニーは休みじゃないだろ！まあ、私は暇だから付き合つてもいいぜ」

エーリカ「シャーリー行く気満々の癖にい、勿論、私も行くけど。リーネも今日オフだからリーネに道案内お願ひしようよ。

いい？リーネ？」

リーネ「は、はい！大丈夫です！」

作業を終えて食堂に来たリーネはいきなりの問い合わせに驚きながらもそれを了承する。

大神「すまないリーネ君、ついでに物資もいくらか調達して来よう、バルクホルン大尉、何か必要な物資がありますか？」

大神はバルクホルンと物資の相談をはじめたが、他の一緒に行くウイッチ達は大神と街に行けるとあつて内心ウキウキであった。

それから一時間後、ストライクウェイツチーズの備品である軍用トラックが基地の前に回される、運転席にはシャーリー、助手席にリーネが座っている。

残りの数人が荷台に乗っている。御世辞にもデートとは言いがたい格好であったが、エーリカが元気に出発の号令を掛ける。

エーリカ「よし！ しゃつぱあつつ～！」

エイラ「おー！」

サニヤ「……おー！」

シャーリー「……なんでエイラとサニヤが居るんだ？」

バルクホルン「まったくだ、夜間哨戒班は夜からの勤務とは言え昼間何をしてもいいと言つ訳ではないのだぞ！」

そう言うバルクホルンに皆の視線が集まる。

バルクホルン「な、なんだ！ 私は正式な任務中だぞ！？ ミーナからの指示も受けた！ 補給物資の量が思つた以上に多かつたので直接私が行き調達する事となつたのだ！」

エーリカ「ミーナ頭抱えてたよー？ あんまり無理言つて困らせちゃ駄目だよトゥルーデ」

バルクホルン「無理など言つていない！ 私は……」

シャーリー「なーもう車出していいか？ 昼までには街着かなきやまずいだろ？」

大神「ああ、出してくれシャーリー」

バルクホルン「待て！ まだ話は……」

シャーリー「よつしやあ！ 飛ばすぜ！」

後ろに乗っていた数人が吹つ飛びそうになるくらいの加速でトラックが基地を飛び出して行くのを、基地内部でミーナが見つめていた。

ミーナ「はあ……」

美緒「……まさかあのバルクホルンまでもがな」

ミーナ「本人は任務だと言い張つていたけれども……どうしたもののかしら」

坂本「多くの人間に好意を持たれながらその人間関係を円滑に進め、特に問題が起きていないと言つのが凄い物だな」

当初ミーナが注意を促していた「必要以上の接触禁止」などはもう誰も守るつもりはないだろう。それで隊に問題が起きているのならば事なのであるが、隊の士気は高く風紀の乱れも見られない。かえつて大神が夜間哨戒で居なかつた一週間の方が隊員達の動きが悪かつた程だ。

ミーナ「三度に渡る英雄的戦功、人柄も良く皆に等しく優しい……まあこれでモテない方がおかしいわね」

美緒「まさかミーナ！ お前まで！」

ミーナ「……美緒には前も話したでしよう？ 私には忘れられない人が居るから……でも素敵な男性だとは思います」

美緒「そ、 そうか。 それならば問題無いが……」

ミーナ「そう言う美緒はどうなのかしら？」

美緒「私は……嫌いではないが、 ウイッヂとして人々を守る盾とならねばならないんだ。 恋愛などしている暇はない」

ミーナ「……」

美緒の表情から多少満更でもない雰囲気を感じ取つたミーナは苦笑を浮かべて窓の外に再び目をやる。トラックは既に見えない所まで行つてしまつたようだ。

リーネ「あう……」

エイラ「だ、 だらしなイナリーネ……ウツ」

シャーリーのトンデモな運転であつという間に街にと着いたがその代償を受けた者が数人苦しんでいた。

エーリカ「一郎は平氣なんだね」

大神「酔いは士官学校時代の艦上訓練で一生分やつたさ、 大丈夫かいリーネ君、 エイラ君」

バルクホルン「私は物資の調達に掛かる！ 荷物を持つのには力のある男手が必要だ、 と言う訳で大神に やめろ！ またお前ら

か！ つつくな！」

自信の固有魔法が「怪力」であるバルクホルンが力のある男手が欲しいなどの見え透いた嘘を言っている事にエーリカ、シャーリー、エイラがツンツンとバルクホルンをつついてからかう。

エーリカ「トゥルーデは任務なんだよね？」

バルクホルン「そうだ、正真正銘」

エーリカ「じゃあ、休日の私達が任務の邪魔したら悪いよね。行こつか一郎」

多少バルクホルンに悪いような気がしたがエーリカであつたが、任務をダシに一郎と二人で街を歩こうとしたトゥルーデもトゥルーデだよねえ。と内心つぶやき大神の背中を押して街のメインストリートに向う。

大神「押さないでくれよエーリカ君。バルクホルン大尉、後で手伝いに行きます！」

エーリカの後にシャーリーやエイラ、申し訳無さそうな顔をしてサー二ニヤまでもが続いて行つた。残されたのはバルクホルンとリーネだけであつた。

リーネ「あ、あの。私で良かつたらお手伝いします……」

バルクホルン「お前はいい奴だなリーネ……よろしく頼む」

少し肩を落としたバルクホルンであつたがめげずにメモ帳を開き物資を調達に向かつたのであつた。

エイラ「中々大きい街ダナ」

シャーリー「リーネが言うには首都に続く街道からなる街らしいからそれなりに栄えてるんだと。あれ？ 一郎はどうした？」

サー二ニヤ「……あそこ」

サー二ニヤが指差す先にはベンチに座つてアイスを食べるエーリカと大神の姿があつた。

エーリカ「いやー悪いね、奢つて貰つて」

大神「いや、俺もブリタニアのアイスを食べてみたかったんだ」

エーリカ「へえ、じゃあハイ！ あん……なーんて」

大神「うん、美味しいね」

エーリカが冗談半分期待半分のつもりで差し出した自分のアイスをパクつと食べる大神、笑顔を浮かべる大神にエーリカは赤面して俯く。

エーリカ「お、おかしいな、扶桑の男の人はこういう事あまりしないって聞いてたのに……いやいいんだけどね」

大神「エーリカ君も食べるかい、はい」

エーリカ「い、いただきます。うん、美味しい」

大神が差し出したアイスを今度はエーリカが食べる。

それを見ていた市民達がヒソヒソと会話しているのが遠巻きから眺めていたシャーリー達の耳に入つて来る。

市民1「あれ、この前の新聞に載つてたストライクウェイツチーズのハルトマン中尉と大神大尉じやない？ やっぱり付き合つてるのかな」

市民2「そうでしょ、全世界にお姫様抱っこされてる所見せびらかす程だもん。でもお似合いだよね」

通り過ぎる市民の話を聞いて怪訝そうな顔を浮かべるエイラとシャーリー。

シャーリー「ああ見えてハルトマンやるなあ……計算でやつてるのかあ？ そんなタイプじやないか」

サー二ヤ「ハルトマンさんはそういう人じやないと想いいます……」

エイラ「本当に恐ろしいのはああいうタイプだナ。素であんな事されればそりや男だつて口口つと行くサ」

シャーリー「なんだよエイラ、随分恋愛知つてますみたいな言いぐさじやないか」

エイラ「そ、そんなんじやネーヨー。仲間なんだから嘔みついて来るなヨナ」

シャーリーは悪い悪いと流している、「見られた」同士と言ひつ事で妙な仲間意識がエイラの胸の中で生まれていた。勿論シャーリーはそんな事は知らないのであるが。

エーリカ「あれ皆どうしたの？ 皆もアイス食べようよ！」 一郎が奢ってくれるよ！」

大神「中々美味しかったよ。 種類は何がいいかな？」

皆の元に帰つて来た大神達と合流し、その後アイスを奢つて貰いきこちなく近づいては大神に「私にもアーンさせろ&しろ」ノノヤロウ「オーラを放つエイラとシャーリー、それとは対象的に素直に言つてアーンして貰い静かに上機嫌なサー二ヤと共に街の探索に移る大神であった。

サー二ヤ「あつ……」

街の小さな露店、そこには小さな猫の置物が売られていた。 猫の置物集めが趣味のサー二ヤはそれに見入つて買うかどうか迷つているようだつた。

大神「サー二ヤ君、 猫が好きなのかい？」

サー二ヤ「あつ……はい、 置物集めて……」

大神「そうか、 おじさん、 これを一つお願ひします」

サー二ヤ「え？ そ、 そんな。 いいです大神大尉、 自分で買えます」

大神「まあ、 そんな高い物じゃないし、 記念つて事で貰つてくれないかい？」

遠慮するサー二ヤに大神が微笑んで袋に入つた置物を差し出す。

サー二ヤは少しの間遠慮していたようであつたが、 大神の言葉を聞いて嬉しそうに受け取つた。

サー二ヤ「ありがとうございます大神大尉……大事にします」

大神「ああ、 皆何処に行つたのかな。 探そつか」

サー二ヤ「はい」

その二人を遠巻きから見つめる二つの影。

シャーリー「……ハルトマンと言ひサー二ヤと言ひ、 上手いねしかし」

エイラ「サー二ヤア……サー二ヤアアア！」

エーリカ「ちょ、 ちょっとお。 さつきの見てたの？」

シャーリー「見せ付けてたじやないか」

エーリカ「そんなんじやないよー！ 一人も素直になつたら一郎はきつと答えてくれるよー！」

エーリカの言葉に必死に反論している一人であつたが、さつさとその場から離れて追いかけるエーリカであった。

バルクホルン「まったく、ハルトマンと云いルッキーと言い富藤と言い。皆大神とベタベタし過ぎなのだ！ そう思わんかリーネ！」

リーネ「はあ……そ、 そうでしようか……」

バルクホルン「特にハルトマンだ！ これまで私が何度も言つて聞かせても掃除をしようともしなかったのに！ この前自主的に掃除を始めようとしたのだぞ！ 結局あまりの量に挫折していたが……あれは絶対大神に部屋を見られたくないからだ！」

リーネ「掃除はしていないんですね……」

リーネはアハハと苦笑いしながらバルクホルンの手伝いをしている。固有魔法の怪力を発動させ、大量の物資をトラックにと運んでいるバルクホルンは先程からブツブツと文句を呴いていた。

大神「凄いですね……俺が手伝う必要もないかな。 リーネ君、俺も持つよ」

後ろからやつて来た大神はリーネから荷物を受け取りバルクホルンの隣に並んだ。

バルクホルン「む、 むう……大神！ 私は前々から言つべきだと思つていたのだ！」

大神「な、 なんでしょうか！」

階級的には同じ大神であるが彼女の迫力に押されてつい姿勢をただしてしまった。

バルクホルン「そ、 その、 なんだ。 お前は随分多くの隊員達と仲良くしているようだがな」

エーリカ「もつと私にカマつてよー」

バルクホルン「そうだ！ もっと私にも力マッテ……って何を言わせるのだハルトマン！ 違う！ 私は……その、 そうだ！ 必要以上の接触は禁止されているのだ！ 節度をわきまえるようにな！」いきなりバルクホルンの後ろに現れて彼女を茶化すエーリカ達とも合流し、 大神達のトラックは夕焼けの街道を走り出すのであった。

そして、 その日の夜。 ミーティングルーム。

大神「大規模反攻作戦……ですか？」

ミーナ「そうです、 皆さんも聞いてください。 本日夕刻にあつた連絡で全軍に通達されました。 数ヶ月後にガリア及びブリタニアに跨ぐ超巨大敵拠点に攻撃を仕掛けます。 これはブリタニア、 ガリア、 扶桑軍の合同作戦となります」

バルクホルン「なるほど…… こちら辺一体のネウロイを掃討するつもりか…… しかし敵の本丸を突くのはいいがそこまでの道をどう切り開く？」

ミーナ「それがこれから先の私達の任務です。 今まで防戦一方でしたがこれからは攻勢にでなければいけません」

ミーナはホワイトボードを使って作戦を伝えて行く。
当初は全長数キロ程だったネウロイの巣であったが、 最新の調査では数十キロの大きさまで成長しているらしい。 世界的に見ても有数の規模である。

芳佳「……守るんじゃなく…… 戦争をしなきやないんですね」

大神「芳佳君、 気休めにしかならないかもしないが。 ネウロイを倒す事で間接的に多くの人を守る事が出来るんだ。 分かってくれ」

芳佳「大神さん…… はい…… 頑張つてみます」

ミーナ「本作戦には多くのウイッチが参戦する手筈になっています。 このストライクウイッチーズにも数週間以内に臨時の援軍が参戦する予定です。 戦力は三倍以上になるわ」

美緒「そんなにか…… どこのウイッチ達が来るんだ？ 一応エース

部隊なんだ。それなりの実績が欲しいぞ」

ミーナ「実績は問題ないです。超一級ですが……その……」

ミーナはチラッと大神の方を見る、大神はなぜそこで自分が見られたのか皆目見当も付かなかつたが、その真意をすぐに思い知る事になる。

ミーナ「まず……大神大尉に電報です」

大神大尉「電報……？ 自分にですか？」

大神は一枚の紙を受け取る。その紙を見つめて数秒大神の動きが固まる。

ルツキー「ねーなんて書いてあるの？」

電報内容は至つてシンプル。

「トウチャクシダイシャシンノセツメイモトム、シングウジサクラ カンザキスミレ マリアタチバナ アイリス リコウラン キ リシマカンナ ソレツタオリヒメ レニミルヒシュトラーセ」との事であった。

大神の頭の中を写真という言葉が駆け巡る。いつの何の事であろうか。彼女達が電報までよこす程の写真とはなんであつたろうか。そして到着とはどういう事であろうか。

ミーナ「援軍は、ウイッチではありません。大神大尉の働きで、ウイッチ部隊でも靈子甲冑の改造次第で降魔部隊でも十分通用する事が判明しました。そこで……帝国華撃団と、巴里華撃団が決戦時に援軍として参戦します」

美緒「……成程、確かに最強の部隊になりそうだ」

坂本の言葉に皆は明るい表情であつたが、一名だけが切羽詰まつた表情であつたと言つ。

次回予告

美緒「……これが運命だと言つなら受け止めよつ、だが、もう少し、ほんの少しでいい……持つてくれ……せめて、この戦い

が終わるまでは 次回「君を忘れない」 それまで……私は飛ぶ！」

第七話 「君を忘れない」（前書き）

ストライクウイットチーズ×サクラ大戦S.S.です

第七話 「君を忘れない」

第七話 「君を忘れない」

私、坂本美緒は幼少の頃から空を飛んで来た。富藤博士の開発したストライカーコニット、鋼の篳を駆り幾多のネウロイを撃破して来た。だが、どんなに凄んでみせようと所詮私はウイッチなのだ。ウイッチの運命からは逃れる事は出来ないだろう……。近い内に私は……だが、まだ飛べる。富藤博士の娘である富藤芳佳、せめて彼女を一人様のウイッチにと育てるまで。私は飛び。

ストライクウィッチーズ基地、整備室

整備兵「はあ……可愛いなあ……」

一人の整備兵が溜め息をついてウイッチ達を眺める。魔力、靈力は容姿端麗の者に多く宿りやすいとの調査があるように、ウイッチ達は皆美人、美少女揃いであった。特に各国のヒーラー達が集まるこのストライクウィッチーズではなおのことである。

整備兵「俺達はこうやって眺めてるだけ……酷つてもんじやないかい？」

整備を進めながら彼は周囲にボヤキ続けている、整備兵達は皆少なくからずこの気持ちを持っていたが、上司からの命令である以上従わざるを得なかつた。

大神「……」

大神は今日も整備兵達と共に整備をおこなつていたが、彼の言葉になんとも言えない申し訳なさを覚えていた。

整備兵「いやね、別に大神大尉がどうこうって事じやないんですね。でも男として、可愛い子にお近づきになりたいって気持ちは分かるでしょう?」

男は大神が居る事に気がついて慌てて弁明を始める、そう言いな

がら大神に肩を組んでくる。 欧州の国々出身であろうか、 隨分
フランクな奴である。 別段大神も階級等にこだわる人間ではない
ので気にはしていないのだが。

大神「うむ…… 必要以上の接触禁止というのは確かに他部隊では聞
いた事が無い規則だが……」

整備兵「でしょう！？ 大神大尉の事ですから。 もうミーナ隊長
とはねんごろなんでしょう？ せめて世間話くらいはOKって事で
お願ひしてくれませんかねえ」

他の整備兵は失礼な態度を取るこの男を制止しようかどうか迷つて
いるようだ、 立場上止めた方がいいのであろうが、 彼の提案は
自分達にとつても非常に有益な物である。 結局彼らは見て見ぬふ
りをして大神達の会話を聞き耳を立てるのであつた。

大神「話すだけ話してみよう。 それと、 言つておくが俺はどの
ウイッチ達ともそんな関係にはなつていらないからな」

バルクホルン「大神！ 今後の進軍予定を会議するので執務室まで
来てくれ！」

大神「了解しました！ ジャア、 あんまり変な噂を流さないでく
れよ？」

大神はバルクホルンに呼ばれたのでその整備兵との会話を終え、
執務室にと走つて行つた。

整備兵「お願ひしますよー大尉！ いやいや、 話の分かる大尉殿
だねえ」

整備兵はそう言って、 大神の光武の整備にと戻るのであつた。

執務室にはミーナに坂本、 バルクホルンそして大神の四人が集ま
つていた。 ストライクウイッチーズの上級士官達が顔を合わせ今
後の作戦を立てて行く。

ミーナ「では、 超巨大敵拠点への道を切り開く為には……」

バルクホルン「周りにある小型の巣、 これらを破壊して行くしか
あるまい。 各国の戦艦が長距離射撃を行える距離までのネウロイ

の巣はすべて取り払いたい」

大神「扶桑からは大和、及び大和型一番艦武藏も来ます、大型ネウロイには大きなダメージを与える事は出来ないでしちゃうが、小型ネウロイ程度ならば一掃出来るでしちゃう」

ミーナ「作戦開始は早ければ二ヶ月程で始まります。それまでにこれら小型の巣に攻撃を仕掛けましょう。厳しい戦いになるでしょうが、皆さんのが奮闘を期待しています」

大神「あの、ミーナ中佐」

ミーナの話が一区切りした所でミーナを呼び止める大神。

大神「下士官からウイットとの必要以上の接触禁止について少しずつ不満の声が出ています。多少の立ち話程度ならばと思うのですが……一考していただけませんか？」

ミーナ「……規則は規則ですので、それは各員に徹底させます」

大神「しかし……」

ミーナ「……坂本少佐とバルクホルン大尉は退席してください。大神大尉に話があります」

ミーナの言葉で二人は執務室の外にと出た、この二人はミーナと旧知の仲である。彼女の事情は知つていが、いささか接触禁止の規則は厳し過ぎるとも考えていた。

バルクホルン「……ミーナの奴、話すつもりだらうか」

美緒「……」

バルクホルン「少佐？」

美緒「宮藤だ」

坂本は窓の外で戦闘訓練を行なう宮藤達を見つめている。

バルクホルン「宮藤の奴、少しずつですが成長しています。少佐の訓練の賜物ですね」

美緒「……いや、きっと私だけではあそこまで宮藤を成長させる事が出来なかつただろうな、主に精神面でな」

宮藤はリーネとペアを組みシャーリー、ルッキー二チームと戦っている。宮藤の動きはストライクウイットチーズに来た当初とは比

べ物にならない程によくなつてゐる。

バルクホルン「……大神ですか？」

美緒「ああ、流石と言つ所だな。歴戦の隊長だけあつて隊員の事を良く見ているしアドバイスも的確だ」

バルクホルン「ですが、まだ宮藤には少佐が必要です。宮藤が指針としているのは間違いなく貴方だ」

宮藤は空中を駆け巡り、坂本が得意とする「左ひねり込み」を決めてシャーリーとルツキーにペイント弾を当ててみせた。

バルクホルン「ほう、ルツキーとシャーリーから一本取るか」

美緒「……」

坂本は無言のまま、通路を歩き始めた。バルクホルンは感心するように宮藤を眺めていた。

ミーナ「……下士官達の気持ちは分かります」

大神「では、何故でしようか。ミーナ中佐程聰明な方がわざわざ隊の士気を下げるような真似をするとは思えないのですが」

ミーナ「……一説では。ウイッチ達は純潔でなければその力を発揮出来ないとされています。若い男性の近くに置くのがどれほど危険な事か分かるでしょう？」

純潔、大神はその言葉の意味を理解していたが、ただの絵空事だと思えた。何故純潔でなければ力を発揮出来ないのか。嫌な大人の言い訳に聞こえた。

大神「それは一説の筈です。ミーナ中佐。貴方程の方がそんな科学的根拠のない話を本気で信じていてのですか！？」

ミーナ「……大神大尉、貴方も靈力を扱う者として。覚えがある筈です。術者の精神状態がどれほどに大事であるか」

大神「……ミーナ中佐？」

ミーナはしばらく考え込んでから。いつものトーンとは全然違う、感情的な声で話始めた。心なしか声も震えているようであつた。

ミーナ「……例えです。もし今貴方が死んだら。ウイッチー

ズの半数以上が魔法を使える精神状態でなくなるでしょうね」

大神「……」

ミーナ「……私は、過去にとても大切な人が居ました。幼馴染みで……はつきり言えば恋愛感情を持つていました……でも、彼が戦場から帰つて来る事がありませんでした……私が再び空を駆けネウロイと戦闘出来るようになるまでには長い時間が掛かりました、そして今でも……忘れる事の出来ない思いとして心に残つています」

大神は言葉を発する事が出来なかつた。ミーナは泣いていた。涙を流しながら、大神に向き直つた。

ミーナ「大神大尉……分かつてください、これは……」

大神「死にません」

ミーナ「……大神大尉？」

大神「戦争である以上、難しい事かもしません。でも、俺がここに居る以上、絶対に誰一人として殺させません。もう、目の前で大切な人に死なれるのはコリゴリです。ですから。俺が誰一人として殺させません。勿論、俺も絶対に死にません」ミーナ「何の、何の根拠があつてそんな事を言うんですか！」ミーナは珍しく感情を爆発させてている。大神はそれでも取り乱さず、ミーナに向かつて微笑み。まったく根拠の無い言葉を投げ掛けた。

大神「何故ならば、それが帝国華撃団で、巴里華撃団で、ストライクウィッシュチーズだからです」

ミーナ「……」

科学的根拠などまったくない。根性論の域に達していない酷い理論である。いや理論とも言えない屁理屈のレベルだろう。しかし。大神一郎が、そう言つてゐるのである。誰一人として仲間を失わず、悪を蹴散らし、正義を示す。それが帝国華撃団で、巴里華撃団で、ストライクウィッシュチーズなのだ。

ミーナ「馬鹿みたいです、私に科学的根拠の無い事を信じるのか

なんて言つてそんな事を……でも、凄いですね。その言葉に説得力を持たせる事が出来るのは多分世界中で大神大尉だけです

大神「ミーナ中佐の言う事は分かります。でもせめて、整備中の会話や日常会話くらいならばいいんじやないですか？」

ミーナ「分かりました、考えてみますね」

涙を拭いてミーナは、大神に向かつて微笑んだ。

ミーナ「大神大尉がモテる訳ですね。こんなムチャクチャな人。他には絶対居ないもの」

大神「モテるなんて、自分は全然ですよ」

ミーナ「……死なないでくださいね大神大尉。もうあんな思いしちゃないので」

大神「了解です。では自分は早速整備兵達に伝えてまいります」

大神はそう言つて、執務室を後にした。

ミーナ「はあ……あの人の事はやつぱり忘れられないけど。凄い人ね、大神大尉は」

エーリカやバルクホルンには比較的に素の自分を見せているが、まさか男性に素の自分をまた見せる事になるとは思つていなかつたミーナは溜め息をついて自分の気持ちを落ち着かせた。

整備兵「ほら見ろ皆！ 我等が大神大尉ならやつてくれると思つてたぜ！ 僕だぜ？ 僕がお願ひしたんだぜ！？」

整備兵達は大神の言葉に大喜びであつた。これまで日常会話も隠れて少しだけであつたり、ウイツチ達も警戒してろくに会話など出来なかつたが、これでウイツチ達と正々堂々と会話する事が出来る。

大神「だが、節度は守るんだぞ。ミーナ中佐を後悔させるような事は絶対するんじゃないぞ」

整備兵「分かつてますよ大神大尉！ あんな美人泣かせる男なんてよっぽどのクズが余程の伊達男だぜ！」

果たして自分はどうかと苦笑いを浮かべて大神は整備兵達

の輪の中に入つていつた。

その時、基地にネウロイの襲撃を伝える警報が鳴り響く、これまで歓喜していた整備兵達はまたたく間に皆持ち場について行く。大神「ネウロイか……こちらが打つて出る前に向こうから来たか……」

大神は急いで自らの光武に乗り込んだ。

ミーナ「私と夜間哨戒班の二人はもしもの事を考へ基地に待機します。現場での指揮は坂本少佐と大神大尉にお願いします」

「「了解！」」

インカムにはミーナの声が響いている。 ウィッヂ達は大神を中心横一線に編隊を組み飛行している。

美緒「発見した。 距離一万二千、 大型ネウロイが一、 小型が三……なんだあれは！？」

緊迫した坂本の声が伝わつて来る、 レーダーには通常のネウロイのようにしか写つていなが、 坂本の魔眼は何か別の物を捉えたようだ。

バルクホルン「……あれは……人型だと！？」

他のウイッヂ達が坂本に遅れて敵を目視する、 ネウロイ達を指揮するかの如く、 ネウロイ達の最奥に人型のネウロイが確かに居た。

芳佳「そ、 そんな。 人型つて……」

美緒「宮藤！ 人型でもネウロイだ！ 撃て！」

芳佳「は、 はい！」

坂本の激が飛ぶ時には既に戦闘が始まつていた。 大型のネウロイの光線を掻い潜り、 まずはエーリカとバルクホルンが小型のネウロイを撃破した。

続いて大神が光武を飛翔させ最後の小型ネウロイを一刀両断する。

ペリース「あの大型ネウロイ、 今までのネウロイと段違いですわ！」

リーネの支援射撃が飛ぶ、 しかし大型のネウロイの表面は堅くり

一ネの魔弾ですら貫く事が出来ない。

リーネ「そんな……私の弾じゃ……」

エーリカ「私が！」

エーリカが俊敏な動きで弾幕の中を掻い潜つて行く。しかし収束したビームがエーリカを襲う。

芳佳「ハルトマンさん！」

巨大なシールドがエーリカの前に展開される、芳佳が反応してエーリカの前に立塞がつたのだ。

エーリカ「ありがとうミヤフジ、助かつたよー」

シャーリー「ルツキーー！」

ルツキーー「あいさー！」

シャーリーの元にルツキーーが飛んでいく、多重シールドを展開したルツキーーをシャーリーがネウロイに向けて高速で投げつける。

ルツキーー「おりやあー！」

相手の光線すら切り裂いて、ルツキーーは敵大型ネウロイを貫通した。

ルツキーー「一機げきはー！」

結果として撃破出来た物の、ルツキーーの多重シールドですら一枚を残すだけで他は破られてしまつていて、ネウロイは戦う度にその戦力を増して来ていた。

大神「後一機！ 各員奮闘せよ！」

エーリカ「りよーかい！ つてミヤフジ！？」

芳佳は人型ネウロイと平行して飛んでいる。向こうのネウロイも攻撃して来る様子もなく、二人はただ互いを見つめあつて飛んでいるだけであつた。

芳佳「な、なんで……撃つてこないんだろ？……まさか……この子……」

美緒「宮藤！ 何をやつている！ 撃て！ 撃つんだ！」

芳佳「で、でも……坂本さん……」

大神「宮藤芳佳軍曹！」

大神の大声に、芳佳は反射的に人型ネウロイから距離を取った。

芳佳「大神さん……」

大神「宮藤芳佳軍曹！君の覚悟はその程度か！」

芳佳「な、何を……」

大神「守るんじゃないのか！皆を守るんじゃなかつたのか！守る為には撃たねばならない時もある！君には君にしか出来ない事がある筈だ！」

芳佳「私に……私に出来る事……」

大神が芳佳を一喝している間も、戦闘は続いて行く。四人がかりで大型ネウロイを撃退し、徐々に敵の装甲を削る。

美緒「宮藤の奴……もう大丈夫か……ツ！？」

一瞬の気の緩みを突かれて、坂本の元に収束された光線が襲う、この距離では回避は間に合わない、瞬時の判断でシールドを開するが、しかし。

美緒「そんな」

シールドは光線を防ぎきれず、坂本を襲つた。

ペリー・ヌ「少佐！」

芳佳「坂本さん！」

大神「芳佳君！君が助けるんだ！君にしか出来ない事だ！完全に坂本さんを治療してみせるんだ！」

芳佳「は、はい！私のせいで……私があんな事しなければ坂本さんは……絶対に治してみせます！」

落下していく坂本を芳佳が空中でなんとか捕まえ、最寄りの島に緊急着陸する。芳佳は全神経を集中させて治療に取り掛かつた。ペリー・ヌ「私が……指一本触れさせませんわ！安心して治療をなさい！」

芳佳の後ろをペリー・ヌが守る、大神はその姿を一瞬だけ見てすぐに敵にと向き直つた。

大神「どう思うバルクホルン大尉、あの人型ネウロイ、ただこちらを観測しているように見える」

バルクホルン「ああ、考えにくい事だが。ネウロイにも感情や意思のような物があるのかもしだ……どうした！？ 何故引いていく！？」

大型ネウロイと人型のネウロイは一定時間戦つた後、逃げるように戦場を脱して行った。

大神「退却したのか……！？ 成程、確かに意思があるような行動だ……」

エーリカ「坂本少佐は大丈夫なの！？」

リーネ「基地の方が設備も充実しています！ 早く基地に戻りましょう！」

負傷した坂本を基地に移送し、芳佳が懸命の治療を続ける。

傷が完治し、坂本が目を覚ましたのはその日の夕方の事であった。

芳佳「……大神大尉」

大神「芳佳君、お疲れ様。大変だつたね」夕焼けのテラス、大神は一人海を眺めていた。

芳佳「本当に、本当にすみませんでした！ 私の……私の身勝手な行動で……坂本さんを負傷させてしました……」

大神「確かに、戦闘中のああいう行動はよくないけど。こうして坂本少佐を救う事が出来たんだ」

芳佳「私も分かつていませんでした……口先だけで守る守るつて……現実は守るどころか……怪我をさせてしまうなんて……」

大神は無言で芳佳の頭を撫でてやる、芳佳は流れて来る涙を懸命に拭いていた。

大神「優しい子だね、芳佳君は。でも、今は君のような子が戦争に出てこなければいけない時代なんだ……人類の天敵ネウロイが今もこの地球上で多くの人々を殺めている。魔の者達も虎視眈々と人類を狙っている……芳佳君の気持ちも分かる、あの人型ネウロイは確かに変だつた。でも今君は軍人だ。それを忘れてはいけない」

芳佳「はい……」「めんなさい……」「めんなさい大神さん」

大神「ああ、今日は疲れたね。 芳佳君の美味しい御飯が食べた
いな。 きっと、皆もそうだ」

芳佳「はい……はい！ 迷惑を掛けた分、一杯作ります！」

大神「ああ、楽しみにしているよ」

芳佳は一生懸命涙を拭いてから、笑つて調理場にと走つていった。
大神「……さて」

大神はそんな芳佳を見送つて、意を決つしたように基地の内部に
と戻つていった。

その日の夜、今日は綺麗な月夜である。月光に照らされながら、
坂本は中庭を歩いていた。

大神「傷の方は大丈夫ですか、坂本さん」

美緒「大神か……どうしたこんな夜中に」

大神「……女性にこんな事を聞くのは失礼かもしませんが、坂
本さんは今年で二十になられるんですよね？」

美緒「……そうだ」

坂本は静かに答えた。一般的にウイッチがその絶対的な魔力を発
揮出来るのは二十歳前後まで。多くのウイッチ達は二十を前に引
退して行くのが現状だ。そんな中坂本は現在十九、未だ一線級
の力を発揮しているのが奇跡のような物だった。

大神「今日のシールド、坂本さんは止められると思つて展開した。
ですが……」

美緒「分かつてているさ、大神の前にバルクホルンとミーナが来て
同じ事を言つて来た。引退しろとな。失礼な奴らだ。私はま
だまだ戦える」

大神「……坂本さん、皆貴方を心配しているのです。貴方は、
ここまでよく戦つて来ました。全てのウイッチの鏡とも言える
働きです」

美緒「……私が、無用だと言うのか」

虫の鳴く声だけが辺りに響く、 大神と坂本は顔を見合つたまま、 どちらも動こかない。

大神「今、 坂本さんに死なれる訳にはいけません。 宮藤軍曹を始め、 貴方を慕うウイッチは多くいます」

美緒「だが！ 私の声は宮藤に届かなかつた！ きっとお前が居なければもつと厳しい状況に陥つていただろう！ もう……私は……居らない人間だと言うのか！」

大神「坂本少佐！」

大神は坂本の腕を引く、 細く、 か弱い乙女の腕である。 上官ではあるが、 自分より年下の少女の手なのだ。 大神は優しくその手を取り。 諭すように言つ。

大神「自分達も……勿論嫌です！ 出来る事ならば貴方と共に飛びたい！ ですが……ですが……」

美緒「……私は、 小さな頃からずつとネウロイと戦つて来たんだ……私の……人生の全てなんだ……その全てを失つた私など誰も慕つてくれない！ 私は！ 私は飛び続けなきやいけないんだ！」

大神「坂本さん！」

大神は坂本の肩を掴む、 坂本の目にはうつすらと涙が浮んでいる。これまでの人生を全てネウロイ殲滅の為に費やして来た少女、その双肩は今やあまりにも弱々しかつた。

大神「坂本さん……悲しい事を言わないでください……魔力を失おうが！ 鋼鉄の笄を失おうが！ 皆は貴方を慕います！ 貴方の背中を追いかけて皆走つているんです！ そんな情けない事を言わないでください！」

美緒「大神……でも……でも……私は……飛びたいんだ……せめてこの戦いが終わるまででいい……私が宮藤を連れて来たんだ。せめて宮藤が一人様になるまでは……」

大神「……坂本少佐！」

坂本の気持ちは大神にも痛い程に伝わつていた。 だが、 ウイッチの運命に逆らう事は出来ない。 なんとかして、 目の前の少女

に力を与えたい。 せめて、 あとほんの数ヶ月でいい。 大神は無意識の内に彼女を抱きしめていた。

美緒「お、 大神……？」

大神「（エリカ君のようにいかないかもしない……でも……それでも！）」

大神は坂本を抱きしめたまま、 靈力を最大に放送出する。 大神の体から目視出来る程に靈力が溢れ出す。

美緒「な、 何をして……」

大神「坂本さんに……自分の靈力を渡します。 意味の無い事かもしれない……それでも……受け取つてください」

美緒「……温かいな」

坂本はその靈力ごと大神を受け入れ、 目を閉じる。 あながち、

大神の行動は間違つてはいない。 エリカの治癒能力と原理は同じである、 いささか強引なやり方ではあるが。

大神「……なんだが、 気恥ずかしいですね」

美緒「お、 お前からして来たんだろう……その……もっと……近づいていいか？」

大神「ええ……どうぞ」

数分経つてから、 少し冷静になつて来て二人とも気恥ずかしくなつてしまつ。 それでも心地いい大神の靈力に坂本は大神の肩に寄り掛かる。

美緒「……皆の言つ事も分かる……でも……私は戦いたいんだ」

大神「……まつたく、 頑固ですね。 坂本さんは」

美緒「な、 なんだと！ 私は上官だぞ！」

軽口をいいながらも、 たつぱりと三十分程抱き合いながら坂本は魔力を補充した。

大神「どうでしょうか？」

美緒「うむ……大神のが体の中に入つてゐるのを感じるぞ」

大神「そ、 そうですか」

かなりアレな発言であつたが、 大神は坂本から離れて立ち上がつ

た。少し名残惜しそうな表情をする坂本であつたが大神が立つた。一緒に立ち上がつた。

大神「少しでもこちらから見て違和感を感じたら、 戦闘中でも離脱して貰います。 これだけは約束してください。 扶桑海軍の一員として、 貴方を失うのはどうしても避けたいのです」

美緒「……扶桑海軍としてか？」

大神「え？」

美緒「お、 大神は……どうなんだ！」

大神「……当たり前の事を聞かないでください、 自分も絶対に貴方を失いたくありませんよ」

美緒「そ、 そうか……ならば、 コマメに魔力を補充しなくてはいけないな！」

大神「……はい？」

大神は坂本が何を言いだしたのか咄嗟に理解出来なかつたが、 坂本はそつぽを向いて乱暴に言い放つた。

美緒「だから！ またお前から補充する！ ……私が呼んだ時は部屋に来てくれ。 以上だ」

大神「……了解しました。 自分のでよければいくらでも」

坂本の衰えが解消された訳ではない。 だが、 もうしばらくは空を飛び続ける事が出来るだろう。

決戦の日は、 刻一刻と迫つている。

次回予告

大神「ついにこちらから攻勢に出る事となつた、 だが俺らの目の前に現れたのは巨大な空母型ネウロイだつた。 ウィッチーズ全員で攻撃しても苦戦を強いられる戦いに、 一筋の光が差し込んだ。

次回「光は東方より」 大正桜に浪漫の嵐！」

第八話「光は東方より」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦SS

第八話「光は東方より」

第八話「光は東方より」
俺、 大神一郎がストライクウイッチャーズに赴任してから早くも数ヶ月が過ぎた。

ついに俺達ストライクウイッチャーズが攻勢に出る事になった、 までは小型の巣を潰しに掛かつたのだが現れたのは俺達の想像を遥かに超える敵だつた。

ミーナ「以上、 これが本作戦の概要です。 作戦に備え明日は全員オフにしますが、 スクランブルの可能性もあるので常に数人は基地に残るようにしてください。 出撃は明後日の正午。 各員準備をお願いします。 それでは解散してください」

ミーティングルームには全てのウイッチ達が集まつてゐる。 これからストライクウイッチャーズが攻略するのは複数確認されている小型の巣の中でも一番重要と言われてゐる地点だ、 ここを攻略する事で戦艦の砲撃が超巨大敵拠点に届くようになる。 ウイッチ達の力がいくら強力とは言え、 支援砲撃は欲しい所である。

ルツキー二「よーし一郎！ どっちがネウロイ倒せるか勝負しよう！」

バルクホルン「遊びじゃないんだぞルツキー二少尉」

解散を言い渡した筈であるが、 大神の周りから皆離れようとしない。 ミーナは溜め息を付いて大神の近くに座る。

ミーナ「まったく、 いいですか皆さん、 私から正式に必要以上の接触禁止を解除しましたが、 節度は守るんですよ？」

エーリカ「一番節度守つてないのはシャーリーだよね。 もう全部だもん」

シャーリー「その事は忘れてくれつて言つただろ！ そう言つハルトマンだつていつもイチャイチャしてるじゃないか！」

芳佳「……その、毎朝違う方と寝ているのは駄目だと思います」

大神「よ、芳佳君！？」

芳佳の爆弾発言で一気に場が沸騰する、大神は確かに嫌な予感を感じとつていた。

坂本「どういう事だ大神！お前は……道理で、随分手馴れていると思ったのだ！」

大神「誤解です坂本少佐！」

バルクホルン「宮藤、詳細を頼む」

芳佳「え、あの……毎朝お掃除に行くとハルトマンさんだつたりエイラさんだつたりサー・ヤちゃんと寝ているので……」

バルクホルン「大神、歯を食いしばれ」

大神「違うんです！バルクホルン大尉！」

この手の修羅場にどうにも縁がある大神である。これでもまだ「彼女達」が居ないのでマシな方ではあるが。

エーリカ「ねー坂本少佐」

美緒「なんだハルトマン、いくらお前程の戦績を残そうともやって良い事と悪い事が

」

エーリカ「手馴れているって言つたけど。一郎と何したの？」
ミーティングルームの時が止まる、坂本は固まってしまいどうにか誤魔化さなければと思考をフル回転させる。

美緒「別に、なんでもないさ。なあ大神」

ルツキー「あーそう言えば最近何回か、夜坂本少佐の部屋にイチローが入るのを見たよ？」

ペリー・ヌ「大神大尉！あ、貴方まさか……少佐を……！」

エーリカ「……一郎？」

大神「それは……坂本少佐と今後の扶桑海軍について語りあつて

」

エイラ「お、お、お、オマエハー！私の裸を見ただけでは飽き足らず少佐とまでそんな事しているのカア！」

」

エイラの一言が決定打だった。大神の長い長い夜の始まりであった。超個性派揃いの帝国華撃団に巴里華撃団、大神は内心その彼女達に比べればストライクウィッシューズの面々はまだまだアクの少ない方だと思っていたが。誤解を解き終わったのは既に日付が変わる頃であった。その間、大神は彼女達の怖さを存分に思い知るのであつた。

翌朝、大神が目を覚ますと隣にはリーネと芳佳が眠っている。凄まじい出来事であった。昨夜正座の大神を取り囮んだ少女達は終盤になると謎の取り決めをし始めた。これまでエーリカ、エイラ、サー・ニヤのみが大神と寝ている事が不平等だと訴えるミーナを除く他の隊員達の圧力によつて、夜の大神の隣は輪番制で変更していくと言う驚愕の新ルールが採用された。ジャンケンによつて初日に選ばれたのは仲良しコンビのリーネと芳佳であった。

大神「……まずい事になつた」

帝都や巴里の皆に知られたら昨夜以上の惨状が繰り広げられるであろう。自業自得とは言え溜め息が止まらない大神であった。

今日は攻勢に出るストライクウィッシューズにとつて最後の休みになる。ゆっくりと体を休ませてあげよう。そう考え大神は静かに自分の部屋を出た。

ミーナ「あら、おはようございます。随分お疲れのようですね？」

大神「……勘弁してください」

昨夜何度も比較的冷静であつたミーナに助けを求める視線を送つた大神であつたがことごとく無視されてしまつていた。

ミーナ「自業自得です、この事が他の兵達に知られたら大騒ぎなんですからね？ くれぐれもお願ひします」

大神「……分かつてします、ミーナ中佐はこんな朝早くから何をしていらしたんですか？」

ミーナ「軍からの緊急連絡があつたの。これを見てください」

大神「急な天変地異？」

報告書に書かれていたのは日蝕や高波と言つた普段は起きない怪奇現象がここ数日起きているとの事であった。

大神「東から徐々に発生していますね……新手のネウロイでしょうか？」

ミーナ「その可能性もあるわね……一応頭に入れておくべきかしら」
明日に迫つた作戦を今から変更する訳にはいかない。念のために注意を払つておく事を確認してその場を離れるミーナと大神であった。

大神「さて……どうしようかな」

まだ芳佳は寝ているので朝ごはんもまだであろう。大神はブラブラと基地を散歩する事に決めた。

廊下を歩いて行くと、エーリカの部屋の前にバルクホルンが立つていた。今まさにエーリカを起こそうとしていたようで気合を入れて部屋に入ろうとしている。

大神「おはようございます、バルクホルン大尉」

バルクホルン「ん……大神か、何もしていないだろうな？」

ギロつと大神を睨むバルクホルン、昨夜の取り決めで大神が芳佳とリーネと寝ていた事は周知の事実なのだつた。

大神「も、もちろんです。バルクホルン大尉」

バルクホルン「……大神、前から気になっていたのだが。なぜ私には敬語なのだ」

大神「階級が同じなので……軍も違うので一応と思いまして……」

バルクホルン「階級は一緒だが年はお前の方が上だ。敬語は必要ないだろう。どちらかと言えば私が敬語で話すべきだ」

大神「了解しました。以後敬語はやめます、ではなんと呼べばいいでしょうか？」

バルクホルン「うむ……」

大神の言葉を聞いて、バルクホルンは少々考えると頬を染めて大神を見つめた。

バルクホルン「皆がいる時はバルクホルンでいい……色々うるさい奴らもいるしな……だが！……一人の時はトウルーデと呼ぶんだ！」

大神「分かつたよ、トウルーデ」

バルクホルン「……」

体の底からこみ上げてくる物を感じて身もだえしそうになるバルクホルンであつたが、大神の目もあつたのでなんとか平静を保つ事が出来た。

大神「これからエーリカ君を起こすのかい？」

バルクホルン「ああ……そうだ大神、お前も手伝ってくれ」

大神「ああ、いいよ」

バルクホルンは一応前回のような格好をしていたらあまりにもかわいそうなので一旦部屋の中を覗く、今日はちゃんとズボンを穿いているようだつたので大神を手招きして中に入れる。

大神「（す、凄い部屋だな……）」

バルクホルン「（何度言つても）これなのだ、大神からも言つてやつてくれ……さて）」

バルクホルン「ハルトマン起きろ！ もう朝だ！」

エーリカ「……後五時間」

バルクホルン「寝過ぎだ！ 早く起きろ！」

エーリカ「……おやすみ」

エーリカは一応ベッドの上に居るが、その周りには脱ぎ散らかした服が散乱している。

バルクホルン「……まったく、大神からも何か言つてやつてくれ」

エーリカ「……またそんな事言つて、トウルーデはいつからそんな嘘付きに」

大神「エーリカ君……流石に片付けた方がいいと思うが……」

エーリカ「嘘！」

エーリカはガバッと起き上がりつて大神達の方を向く、まさか本当に大神が居ると思っていなかつたので驚愕の表情を浮かべている。

エーリカ「……トウルーテのいじわる」

エーリカはベッドに倒れこむと顔を枕に突つ伏した。
バルクホルン「つ、連れて来た訳じやないぞ！？ たまたま部屋の前を大神が通り掛かつたからだ！」

エーリカ「……引いたよね、一郎」

大神「なぜ引くんだい？ それより今日はせつかくの休みなんだ。

一緒に片付けてしまおう」

エーリカ「え……手伝ってくれるの？」

バルクホルン「駄目だぞ大神！ こういうのは自分でやらなければいけないのだ！」

大神「だが、これは一人で出来る量を遥かに超えているよ。 手伝つから一旦片付けてしまおう」

エーリカ「ありがとう一郎……そんな優しい所が大好き」

バルクホルン「な、な、何を言つてているのだハルトマン！」

突然の告白にバルクホルンは完全にテンパっている。

大神「た、隊員としてつて事だらう？」

エーリカ「んーん、男の人として、一人の人間としての一郎が大好き」

バルクホルン「……」

大神「な……なんと言うか、ありがとうエーリカ君、嬉しいよ」

エーリカ「返事は戦いが終わつてからでいいよ、一郎の事情は察してゐるつもりだし。さ、頑張つてお部屋掃除しよー」

あまりの展開に閉口してしまうバルクホルン、しかしどこかでここまで素直になれる彼女に羨ましさを感じていた。大神にとつてもここまでストレートに好意を伝えられた事はあまり経験のない事であった。その後は何事も無かつたかのように大掃除が始まり、数時間掛かりでエーリカの部屋をなんとか綺麗にしたのであった。

エーリカ「ありがとー凄いね、来たばかりの時みたいだよ！」

大神「次からは一人でやるんだよエーリカ君」

エーリカ「りょーかーい。ありがとう一郎」

大神「じゃあ、俺は行くよ」

そう行つて部屋を後にする大神を見送つたエーリカとバルクホルン、扉が閉まるとエーリカはベッドにと再び倒れこんだ。

エーリカ「……言つちゃつたなあ」

バルクホルン「ある意味、そこまで素直に言えるのは感心するぞ」

エーリカ「一郎、カールスラントに来てくれないかな」

バルクホルン「……無理だらうな。今回の任務が終われば扶桑に帰るだらう」

エーリカ「私とトゥルーデとミーナに一郎を加えてさ、カールスラント華撃団なんてどうかな?」

バルクホルン「……ハルトマン」

エーリカ「分かつてゐる、無理だよね……私、ウイッヂなのに……たまにこの戦いが終わらなければいいのについて思つちゃう……ウイッヂ失格だよね。この女だけのウイッヂ社会の中で一郎に出会えた事が奇跡みたいな物なのに……」

バルクホルンはエーリカになんと声を掛けでいいか分からなかつた。普段あれ程天真爛漫な彼女がこんな事を言つとは思つてもみなかつた。

バルクホルン「……私達が戦場に立つ限り、いつかまた大神ともめぐりあう事が出来る筈だ。今は明日の作戦を成功させる事だけを考えなればいけない」

エーリカ「……うん」

バルクホルン「……カールスラント華撃団と言つのは少し語呂が悪いな、ほかの物を考えよう」

エーリカ「……ありがとうトゥルーデ。トゥルーデも大好きだよ」

ルツキニー「あ、イチロー！ おーい！」

テラスに向うとルツキニーとシャーリーがお茶をしていた。ルツキニーはブンブンと手を振つて大神を呼ぶ。

大神「おはようルツキー、シャーリー君」

シャーリー「よつ、宮藤とリーネに変な事してないだろ?」

大神「勘弁してくれよ……俺もいいかい?」

ルツキーが大神の分のティーセットを走って取つて来てくれた。

大神「何の話をしていたんだい?」

シャーリー「いや……別になにも」

ルツキー「えー話してたじやん! ねえ、イチローはこのストライクウイッチーズでの任務が終わればどうなるの?」

大神「俺かい? 多分帝国華撃団に戻るんじやないかな?」

ルツキー「うじゅ……やっぱりそうだよね……紐育華撃団には行かないの? 新しく出来るんじよ?」

先日大神が話していた事を覚えていたルツキーとシャーリーは少しの希望を持つてその事を聞いた。

大神「多分、俺は行かないと思うな……どうかしたのかい?」

シャーリー「私達の今後の身の振り方を話してたのさ。指令があればその場所に行くまでだけ……ルツキーにリベリオンを見せてあげたくてさ」

大神「良い事じやないか。リベリオンか……俺も行つた事がないなあ」

ルツキー「それでね、もしイチローが一緒に来てくれたならなつて話でて……」

シャーリー「……その、やつぱり難しいか?」

大神「多分、難しいと思う……でも、俺もリベリオンを見てみたいよ。旅行にだつたら行けると思う」

ルツキー「そつか……残念だったねシャーリー」

シャーリー「る、ルツキー! なんで私の名前が出るんだよ!」

ルツキー「残念じやないの? 私は凄い寂しいよ……シャーリーも寂しいでしょ?」

シャーリー「え……いや勿論寂しいけども……」

大神「ありがとう、きつとまた会いに行くよ。それに帝都に来

てくれれば歓迎するよ」

大神の言葉でルッキーとシャーリーの顔が一気に明るくなる、大神自身も今後どうなるかは分からぬが、一度生まれ故郷である扶桑に帰りたい気持ちは強かつた。

ゆつくりとお茶を楽しむと時刻は既に昼過ぎのようであつた。ふと思いつ出すと朝ごはんを食べていなかつたので昼ごはんも兼ねて食事を取りに食堂に向う大神だつた。

食堂には芳佳とリーネ。そして坂本とペリーの姿があつた。芳佳「あ、大神さん！ そ、その……すいませんでした、私ずっと寝て……」

リーネ「私も……恥ずかしいです」

大神「大丈夫だよ。今日は休みなんだから何時まで寝ていたって構わないんだ」

ペリー「……まさかとは思いますが、昨晩遅くまでよからぬ事をしていて寝不足という訳ではありませんよね？」

大神「違うよペリー君、昨日はすぐ寝たよ」

芳佳「（……私とリーネちゃんはドキドキしてすぐ寝れなかつたけど）」

美緒「まったく、たるんでいるぞお前達。明日の作戦に支障が出来ないようにな」

ペリー「少佐の言う通りですわ！」

宮藤「すいません坂本さん……」

大神「隣、よろしいですか坂本さん」

美緒「ああ、宮藤、大神の分の昼ごはんを頼む」

大神は坂本の隣に着席して芳佳から昼ごはんを貰う、その様子を眺めていたペリーが何か言いたげに一人を見ている。

大神「どうしたんだいペリー君」

ペリー「……やはり、おかしいですわ！ 少佐と大神大尉の仲はそこまで親密ではなかつた筈です！ ずっと見ていたから分かりますわ！」

美緒「ペリーヌ、 昨夜も言つたが私と大神には何もないぞ」

昨晚の話では、 衰えの見える坂本に靈力を分けてるので夜坂本の部屋に行つているなどと言う訳にはいかなかつたので曖昧な答えてお茶を濁していた。

宮藤「確かに……なんか坂本さんの大神さんを見る目が前と違つ気がします」

美緒「宮藤……お前までか！」

宮藤「ご、 ごめんなさい！」

大神「同じ扶桑海軍の仲間なんだ、 仲がいいのは良い事じゃないか」

美緒「そうだ！ 大神の言つ通りだ！」

ペリーヌ「……腑に落ちませんわ」

事実としてあの夜から明らかに一人の関係は変わつてゐるのだが、 上官として、 人生の先輩としてそのような面を宮藤達に見せる訳にはいかないと必死に坂本は誤魔化した。

リーネ「明日の作戦…… 大丈夫でしょうか」

美緒「なんだリーネ、 心配か？」

宮藤「私も少し怖いです……」

リーネはずつとこの事が気になつていていたようだつた、 やはりストライクウイッチーズにとつて初めての攻勢とあつて皆それなりに重圧を感じていた。

大神「分かるよ、 僕も考えれば迎撃戦や大きな決戦はいきなりの事が多かつたし、 こうやってじつくりと作戦を立てての攻略戦つて言つのは経験が少ないかもしれない」

美緒「うむ…… しかしこの一大反攻作戦が成功すれば人類に取つては大きなプラスになる…… 怖いのは私も一緒だ。 皆の背中を皆で守り合えば絶対成功する筈だ」

大神「坂本さんの言う通りだよ。 僕が芳佳君とリーネ君を守るから。 芳佳君とリーネ君は僕を守つてくれ」

宮藤「そんな…… 私なんかが大神さんを守るなんて…… でも精一杯

頑張ります！」

リーネ「私も、皆さんを出来るだけ援護出来るように頑張ります」
経験の浅い芳佳とリーネの覚悟も決まったようだ、ベテランの域に入りつつある大神と坂本でさえ重圧を感じているのだ。彼女たちのプレッシャーは相当の物であつただろう。

その後も芳佳達と談笑してから大神は食堂を後にした。
芳佳達にバレないように今晩靈力補給をしたいと伝えようとする坂本の姿が非常に可愛いらしかつたがそれを言つたらボコボコにされそうだつたので大神は何も言わずに頷いた。

大神「さて……これで皆と

廊下を歩いていると物凄い衝撃が大神を襲つた。何者かに部屋に連れ込まれたのだ。

エイラ「……ヨシ

サー二ヤ「エイラ……無茶し過ぎよ」

エイラ「こいつにはコレくらいが丁度いいんだ」

サー二ヤの部屋に連れ込まれた大神は薄暗い部屋の中頭をさすつた。

大神「もうちょっと穩便に入れて欲しかつたな

エイラ「……浮氣者にはこれくらいでいいんだ」

昨晩に一番の衝撃発言にして話が拗れた最大の原因がエイラの一言であった。

もはや誤魔化しようもなくただ真実を話す事しか出来なかつたので皆に大神とエイラの痴態が知れ渡つてしまつた。

サー二ヤ「大神さんを困らせたら駄目よエイラ。大神さんは浮氣者なんかじゃないわ」

エイラ「二十股以上して奴がどここの世界に居るんだよ！ どこからどう見ても浮氣者だ！」

エイラはそう乱暴に言つてベッドの上にタロットカードを並べる、よく当たるとの噂は大神も聞いていたが実際に彼女がやつてている所は見た事がなかつた。

エイラ「浮氣者の末路を占ひてやる」

大神「お手柔らかに頼むよ」

エイラ「……」

エイラはしばらくタロットカードと睨めっこを続け、数分後に顔をあげた。

エイラ「占いによると、お前にはスオムス生まれの超美少女がお似合いだと出ているナ、早めに告白すればイイゾ」

サーニヤ「……エイラ」

エイラ「……冗談ダヨ、多くの人に囲まれ皆に慕われる、今と同じダヨ」

大神「そうか、良かった。皆の幸せと平和を守れるように頑張るよ」

エイラ「……その中に、私とサーニヤは入ってるノカ？」

エイラは少し俯いてから呟くように発した。今まで何度も自分の未来を占あうと思ったが怖くて出来なかつた。エイラは吐き出すように小さな声で、無け無しの勇気を振り絞つて大神に尋ねた。

エイラ「どうせ、帝都や巴里に山ほど恋人が居るんダロ?」

私達の事なんてすぐニ……」

大神「恋人なんて居ないよ。俺は、仲間の事を忘れたりは絶対にしない。エイラ君もサーニヤ君も共に戦つた仲間だ。生涯の友だよ」

サーニヤ「大神大尉……ありがとうございます……私も……大神さんの事忘れません」

エイラ「……まあ、当然だよな、裸まで見られて忘れられたらたまつたもんじゃネーヨ」

大神「……そこら辺の記憶はお互に忘れた方がいいと思つけど」

エイラ「私の裸ダゾ!/? もつとありがたがれヨナ!」

外は既に夕焼けに包まれている。今日は皆早めに寝て明日に備える手筈になつている。

その後、皆で一緒に夕食を取り明日の必勝を誓い合つたストライクウィッチーズであった。

翌日、正午、ストライクウェイツチーズ基地滑走路

ミーナ「……正午になりました。それではこれより作戦を発動します。皆の奮闘に期待します」

バルクホルン「では、通達のように編隊を組みネウロイ基地に攻撃を仕掛けるぞ！」

ルツキー「よつしつ！ イチローあれお願ひ！」

大神「お、俺かい？」

シャーリー「ま、あれは一郎じゃないと格好付かないしな」

ペリー・ヌ「早くしないと時間が無駄ですわ」

大神「ああ……ストライクウェイツチーズ出撃！」

「了解！」

大神の声に、皆が同調して声を上げると、ウェイツチ達は編隊を組んでネウロイの巣にと向かつて行つた。

小型の巣までは数十キロ程、先日の調査では巣の大きさは三百メートル程度、まだまだ成長途中の巣である。

坂本「目標確認、内部に複数のコアが見えるが外にはあまりネウロイの姿は見えないようだ！ 一気に叩くぞ！」

ミーナ「まずは各個撃破です！ 巣の中から本命が出てくるまで数を減らします！」

「了解！」

ウイッチ達は各々の判断で巣の外壁近くを飛び、内部から次々と小型ネウロイが出現する。

エーリカ「入れ食い入れ食い！」

バルクホルン「ふつ、全部倒せばカールスラントの勲章全てでも足りない功績だな！」

カールスラント組はその卓越した技能で次々と小型ネウロイをなぎ払つていく。

芳佳「大神さん！ 指示をお願いします！」

大神「侵略する事火の如し！ 火作戦で行くぞ！」

リーネ「了解です！」

大神も新兵達の事を見守りながら次々と敵をなぎ払っていく。

観測手「凄いな……流石エース部隊だ」

離れた所から戦闘を観測する兵達は驚愕の声を上げる、 ウィッシュ達の働きはまさに一騎当千、 小型ネウロイ程度では最早相手にすらなっていない。

美緒「出てくるぞ！ 大型ネウロイだ！」

ミーナ達が当初「本命」としていた大型ネウロイ、 先日の戦いで確認された物と同等のサイズであった。

芳佳「あれは……！」

その大型ネウロイを指揮するかのよう、 またあの人型ネウロイが現れた。

美緒「宮藤……！」

芳佳「分かつていてます！ 守る為に……『めんね！』

芳佳は人型ネウロイに威嚇の射撃を開始する、 攻撃する事すら出来なかつた前回の戦闘から比べると大きな進歩である。

エーリカ「一回コツ掴んじゃえば……これくらい！」

エーリカは大型ネウロイの死角に入り込み攻撃を途切れなく続ける。 むき出しになつた

大型ネウロイのコアを撃つて見事一人で大型ネウロイを仕留めてみせた。

エイラ「サー二ヤ、 1、 4、 6、 9ダ」

サー二ヤ「うん」

エイラの指示通りの座標に弾頭を打ち込むサー二ヤ、 そこに吸い込まれるようにネウロイがやつてくる。

エイラ「よつしビンゴダ！」

大神「(やはり、 エイラ君とサー二ヤ君も入る事で格段に戦闘能力があがる……これならば行ける！)」

ペリー・ヌ「リーネさん！ 援護を！」

リーナ「はい！」

ウイッチ達の戦いはまさに圧倒的であった。 ネウロイの巣を制圧するのも時間の問題に見えたが、しかし。

芳佳「坂本さん！ 人型ネウロイが巣の中に！」

美緒「深追いはするな！ まずは外の敵を……なんだ！」

人型ネウロイが巣の中に入つた途端、衝撃が辺りを疾走する。

大神「一旦引くんだ！ 何かがおかしい！」

ミーナ「総員！ 一時下がつてください！ 様子を見ます！」

ミーナの指示を聞くまでもなく、ウイッチ達は一定の距離を取つていた。 これまで実戦を経験してきての勘のような物であろうか、

彼女達は本能的に「ヤバさ」を感じて離脱していた。

シャーリー「巣が……形を変えている？」

美緒「何が起こっているんだ……皆油断するなよ！ 何が起こつてもおかしくはない！」

巣はドンドン形を変え、一機のネウロイにと変形する。 まるで、人類の持つ兵器、戦艦のよつた形にと変形した。

美緒「……戦艦？ いや……なんだこの反応の数は！ 戦艦じゃない！ あれば空母だ！ 内部にとんでもない数の小型ネウロイが搭載されている！ 奴ら！ 巣を空母に作り変えたんだ！」

坂本が言い終わるや否や、小型のネウロイが射出される。 数百はあろうか、空母型ネウロイ自体も多くの光線を放つてこちらに攻撃を仕掛けて来る。

大神「あの空母型ネウロイを落とせばこちらの勝ちなんだが、……」

バルクホルン「だ、だが……数が多くて空母型に近づけん！」

エイラ「これじゃあ予知したつて一緒ダヨー！」

美緒「……ミーナ！」

ミーナ「……」

ミーナは決断を迫られる。 坂本の表情からも分かるように、戦況は大きく変わつた。 現在の戦力ではあの空母型ネウロイを落とせる見込みは少ない。 こちらも相当の痛手を追うだらう。

大神「自分が、 出来るだけ空母型に斬り込みます！ それまでに退路を！」

ミーナ「いけません大神大尉！ 危険すぎます！」

大神「このままではどちらにしろ全滅です！ エーリカ君！ ペリーヌ君！ 全力を出し切つていい！ 余力を残さず広範囲魔法で道を開いてくれ！ このままでは手遅れになる！」

エーリカ「そんな！ 一郎はどうするの？」

大神「俺は光武に乗つている！ 皆より生存率は高い！」

これは、 大神の嘘である、 確かに光武に乗つている分生身ではないが、 光武にはウィッチ達と違いシールドを張る能力が備わつていない。 危険な事には変わりはないのだ。

美緒「よせ！ 大神！」

大神「大丈夫です！ 行きます！」

大神は光武を飛翔させ、 おびただしい数のネウロイの群れに突っ込んで行く。 数十のネウロイが大神の光武を取り囲むが、 大神はそれらを全て斬り伏せる、 だが、 いかんせん数が多く、 大神は斬り伏せた倍のネウロイが大神を襲わんと集まりだしていた。 その様子を、 一番遠くで眺めていたのはリーネであった。 支援砲撃すら及ばない程のネウロイの群れ、 自分ではどうにも出来ない事はとうの昔に理解していた。

リーネ「誰か……誰か大神さんを……」

そのリーネの言葉を遮つて、 猛烈な旋風がリーネの横を通り過ぎる。

リーネ「何……？ これは……さくらの花びら……！？」

さくらの花びらのように見えたのは靈力の放出、 リーネの手のひらに落ちる頃にはその花びらは消えていた。

大神「グッ……！ せめてウィッチの皆だけでも引いて貰わなければ！」

孤軍奮闘する大神の背後に複数のネウロイが迫る、 その動きを止めたのは、 ウィッチでも魔法でもない。 凜とした。 少女の一

喝であつた。

そこまでよー。

戦場に声が響く、勿論、ネウロイは人語など理解していない、それでも動きを止めたのは、あまりに強力な八つの靈力、それに反応してネウロイの動きは制止して、その靈力の発信源に向き直る。

その隙に、大量のネウロイを葬り去る光武達。ウイット達はその姿を唖然として見つめていた。

「帝国華撃団、参上！」

東方より差し込んだ光、経験、戦力共に最強とも言える帝都の護り手達がブリタニアの空に馳せ参じていた。

さくら「お待たせしました大神さん、帝国華撃団、これより指揮下になります」

すみれ「まったく、相変わらず無茶をなさつているようですね」

大神「皆……来てくれたのか！」

マリア「巨大な反応を感じしたので、一足先にやつて来ました」

アイリス「お兄ちゃん久しぶりー！会いたかったよー！」

紅蘭「それでも、二つつい数やなあ」

カンナ「久々の戦闘で腕がなるぜ！」

話ながらも、彼女達は次々とネウロイを倒して行く。李紅蘭の手によつて改造された光武は全て魔道エンジン搭載の飛翔ユニットを装備している。空をも制した彼女達に敵など存在しなかつた。織姫「まったく、少尉さんは、あ、今は大尉さんでしたね。

いつもピンチなんですから」

レニ「でも、大丈夫。僕達が揃えば、どんな敵だつて倒せる」

美緒「これが……帝国華撃団」

ペリー・ヌ「無茶苦茶ですわ……」

ペリーヌの言う通り、無茶苦茶な戦力である、これまで彼女達はネウロイの戦闘経験等無かつたが、そんな物など関係無いと言わんばかりに次々と撃破して行つた。

大神「小型ネウロイは帝国華撃団が引き受ける！ ウィツチの皆は空母型を！」

美緒「し、しかし、あの空母型に我々の攻撃が通るかどうか！」

マリア「要は、あの装甲を剥がしてしまえばいいのですね？」

ミーナ「え、ええ。そうよ」

どこかしら似た雰囲気を感じ取つたのか、マリアがミーナに通信を入れる、マリアは皆を見回し、大神に進言する。

マリア「隊長、支援砲撃でのネウロイの装甲を吹き飛ばします。既に射程内です」

大神「そうか……君達は「あれ」に乗つて？」

マリア「ふふつ……米田中将がハリキッていましたよ。久しぶりの大戦だつて」

大神「……よし！ 皆、一時撃退してくれ！ 支援砲撃が来る！」

バルクホルン「離脱？ 何を言つているのだ！ 戦艦の支援砲撃程度ではあの空母には傷すら付かないぞ！」

ルツキー「な、なんか来たー！」

ルツキーの声に振り向いたウイツチ達は、まさに絶句してしまつた。

エーリカ「……ねえ、私夢でも見てるのかな」

ミーナ「……私も、頭が痛くなつて來たわ」

彼女達が絶句する訳、有り得ない光景が目の前に広がる。巨大

な、巨大を通り越しデカ過ぎる戦艦が「空を」飛んでいる。

大神「ミカサ！ 応答願います！ 支援砲撃をお願いします」

かえで「了解したわ、久しぶりね大神君」

超弩級空中戦艦ミカサ。帝国華撃団の決戦兵器であり。この時代全ての戦艦を凌駕する超兵器である。その全長は約九キロ。報告されていた天変地異はミカサによつて引き起こされていたのだ

つた。

ミーナ「しかし、通常兵器で大丈夫でしょつか？」

大神「問題ありません。ミカサの主砲は九十三尺、メートルに直すと二十八メートルあります」

この当時最強の戦艦大和の主砲が四十八センチである事を見ても、帝国華撃団のとんでもなさが分かる。

芳佳「す、凄い！ それなら！」

ペリー・ヌ「凄いとかそういうレベルじゃありませんわ！ オーバーテクノロジーも程々になさい！」

大神「とにかく引くんだ！ 主砲の衝撃で俺らまで吹き飛ばされてしまう！」

全速力で皆が空母型ネウロイから離脱して行く、全員の離脱が確認された事が司令の米田に報告されると老兵はほくそ笑んで座席に座りなおした。

米田「さてさて、ネウロイに見せてやるつかい。帝国華撃団の力を」

かえで「主砲、発射準備完了です！」

米田「よし！ 主砲！ 発射！」

轟音と共に、主砲が発射され空母型ネウロイに直撃、体積の半分以上を吹き飛ばしてコアがむき出しになる。

大神「未だ！ 皆！」

ミーナ「了解！」

ウイッチ達が即座に編隊を組んで空母型ネウロイに向う。

カンナ「対した機動力だなー！」

マリア「やはり、空中戦闘は彼女達の方が慣れているわね」

驚きの声を上げる帝国華撃団の面々であつた。

バルクホルン「行くぞ！ ハルトマン！ ミーナ！」

エーリカ「帝国華撃団にばっかり良い所取られてたら立場無いもんね！」

ミーナ「そうね、皆さん！ 総攻撃よ！」

ミーナの指示で、 ウィッチ達が一斉に攻撃する、 空母型ネウロイは崩壊を始め、 ネウロイの巣攻略戦は無事に完了したのであった。

さくら「大神さん！」

取りあえずウイッチ達は帝国華撃団のミカサにと着艦する、 内部の部屋に入ると、 帝国華撃団の面々が待っていた。 あつという間に皆に囲まれる大神であった。

すみれ「まつたく！ 巴里からなかなか帰つて来ないからこちらから来てあげましたわ！ 感謝なさい！」

マリア「お変わりありませんね隊長、 安心しました」

アイリス「お兄ちゃん！」

大神に抱きつくアイリス、 皆大神との再会に嬉しさを爆発させる。

芳佳「……大神さん、 やつぱり凄い隊長なんですね」

美緒「ああ、 そうだな」

エーリカ「本当に、 無茶苦茶だよ帝国華撃団は」

すみれ「……あー！ い、 居ましたわ！」

突然、 大声を上げるすみれ、 何事かと大神がすみれを見ると、

エーリカを指さしてワナワナと震えている。

大神「エーリカ君がどうかしたのかい？」

李紅蘭「感動の再会はそろそろおしまいでええよね？」

織姫「そ�でーす、 色々聞きたい事もありまーす！」

大神「ど、 どうしたんだい皆！？」

先程までの感動ムードから一転、 突然空気が悪くなつた皆に恐怖心を覚えて大神は恐る恐る聞く。

さくら「大神さん、 基地に着いたらゆーつくりお話を聞きますからね？」

さくらが手に持つていた新聞を見て、 大神は自分の顔面からドンドン血の気が引いていくのを感じた。

次回予告

大神「ついに始まつた最終決戦、俺達はついに超巨大敵拠点にと
攻撃を仕掛けた。苦戦を強いられるが、巴里から舞い降りた天
使達によつて攻略目前まで事を進める事が出来た。しかし、そ
の最中思いもよらぬ乱入者によつて大きく俺らの運命は動かされ
事になつた。次回「御旗のもとに」 大正桜に浪漫の嵐！」

第九話「御旗のもとに」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦SS

第九話「御旗のもとに」

第九話「御旗のもとに」
あの戦闘から数時間が過ぎた、ミカサは基地沖合数キロの所に停泊している。

俺、大神一郎を取り囲んでいるのは十九人もの少女達。胃に穴が空きそうな重圧の中、史上最悪の戦いが幕を開けようとしていた。

ストライクウイッチーズ基地、ミーティングルーム。

大神「……最悪の展開だ」

ミカサを無事に着水させ、帝国華撃団の面々に基地の部屋が振り分けられると早速彼女達は大神をミーティングルームにと呼び寄せた。

やはり気になるのかウイッチ達も全員集合でミーティングルームは物々しい雰囲気に包まれている。

大神「み、皆本当に久しぶりだね……」

すみれ「それはさつきやりましたわ。わたし達が聞きたいのは、

この写真は一体どういう事なのかと言う事ですわ！」

すみれはバンツと扶桑の新聞を机に叩きつける。エーリカをお姫様だっこしている大神の一顔記事だ。

エーリカ「あ、私の授与式の時だね」

織姫「エーリカ・ハルトマンでーす！初めて生で見ました！」

レニ「欧洲では有名人だよね。カールスラントのエースだ」

ウイッチ達はその外見と戦闘能力で話題に登り易い、各報道も積極的に情報を発進するので世間的な認知度は高い。

エーリカ「そんな有名かなー、それで。その写真がどうしたの？」

すみれ「どうしたじやありませんわ！なぜ大尉とこんなに密着し

て写真を取つてゐるかしら？」

エーリカ「え？ どうしてつて……なんとなく、だけど……ねえ、一郎」

大神「ああ、深い意味はないぞ、すみれ君」

すみれ「い、い、一郎ですつてえ！ 大尉！ 名前で呼ばせているとはどういう事ですか！？」

紅蘭「これは思つた以上やなあ……」

カンナ「海外では名前で呼ぶ物なんぢやないのか？」

やはりこんな時一番冷静なのはカンナである、的確な言葉に大神はすぐに同意を示す。

大神「カンナの言つ通りだよ、すみれ君、海外では名前で呼ぶのは珍しい事ぢやない」

ルツキー「そうそう、イチローはイチローだよ！」

アイリス「むう……お兄ちゃん！ またイチローなんて呼ばせてえ！ アイリスと同じ位の年なのに！」

大神「ま、まあアイリス、これはあだ名みたいな感じだから……」

シャーリー「お兄ちゃんだつてよ……そう言えれば一郎真つ先にルツキー二と仲良くなつてたよな」

エイラ「中々私達に手を出してこないと思つたタラ……そつちの趣味だつたノ力……」

大神「変な誤解はよしてくれ！」

すみれ「さくらさん！ 貴方も黙つていないで何か言つたらどうなんですか！」

さくら「え、ええ……でも、嬉しくて」

すみれ「嬉しい？」

さくら「実際に会つ今まで、絶対に事の真相を聞き出すなんて皆と話してましたけど……久しぶりに大神さんに会つて……話せた事が嬉しくて……」

マリア「さくら……」

レニ「そうだね、僕も嬉しいよ

すみれ「ま、まあそれは私もそうですが……でもそれとこれとは話が別ですわ！」

そんなかくらの様子を見てウイット達はこれが大和撫子かと驚愕する。

エーリカ「あれがヤマトナデシコって奴なのかなー」

ペリーヌ「随分とお淑やかんですね」

そんな彼女達を尻目に、芳佳は興奮した様子で帝国華撫団の面々を見つめる。

芳佳「凄い……帝国歌劇団だ……みつちゃんと見に行きたいって話してたんだよ……」

リーネ「帝国華撫団って、平時では舞台俳優をやっているんだつけ？」

芳佳「そうだよ……トップスターの神崎すみれさんと男役のマリア・タチバナさん……かっこいい……」

美緒「私はそういう所は疎いのだが……広告などで見た事があるぞ」大神「と、とにかく！ 折角久しぶりの再会なんだ、祝勝会も兼ねてパーティでもやろう！」

ルツキー「賛成賛成！ やっぱり皆仲良しがイチバン！」

大神「じゃあ俺は早速準備に」

ルツキー「そう言えば今日は私とシャーリーが一郎と寝る番だね！ 楽しみー！」

ヒシツと。大神の服の裾が誰かに捕まれる、大神はあまりの重圧に振り返る事が出来なかつた。丸く收まり掛けていた場はルツキーの天然で見事にブチ壊された。

さくら「……大神さん、色々と前言撤回してよろしいですか？」

大神「ま、待つんださくら君……」

力チツとすみれが携帯式ナギナタを懐から出して展開する、他の隊員達も次々と各自の武器を構えて行く。

レニ「……隊長、失望した」

紅蘭「せやなー確かに試作型の拷問器具がミカサの整備室にあつたな

1

すみれ「私たちの田が無い事を良い事に……やりたい放題だつた訳ですね？」

大神一み
皆！さくら君達に説明を

大神が振り返ると、ウイツチ達は既に部屋から退避していた。
ミーティングルームに一人取り残された大神であつた。

大神 そ、
そんな……」

さくら - 桜花 -

大神一待でくれ！ ふ 武器にます

アラヤチ達が退避した廊下には、力神の悲鳴が聞こえて来る。

リカをとがれしそうに」なに、

「夫婦のことはなんばあいい

「ハーバードの研究によれば、イソブリッジは、

大神の悲鳴と謝罪の声は数時間余刃のある事はない

大神の悲嘆と謫罪の声は數時間途切れる事はなく、疲弊した大神が許しを得られたのは夕刻の事であつた。

エーリカ「それでわあ 帝国華撃団とストライクウェイツチーズの合流を祝してえ！」

バルクホルン「うるさいぞハルトマン！ 何回目の音頭だと……お前、これは酒ではないか！」

大神の制裁が行われた後、ストライクウェイツチーズ宿舎で祝勝会と合流記念の宴会が開かれた。米田達は帝国華撃団の整備兵や火器管制を制御する下士官達を連れてストライクウェイツチーズの整備兵達と別の場所で大宴会を開いている。

「エーリカ、うるさいなあ……ブリタニアでは十五からお酒飲んでいいルールなんだよおねえーリーネ？」

エーリカ「ほらバルクホルンも飲みなよおー」
バルクホルン「こ、こら！ こぼれているぞ！」

ルツキー「私も飲むー！」

芳佳「駄目だよルツキーちゃん、私達はジュースじゃないと。

アイリスちゃんも飲む？」

アイリス「ありがとー芳佳」

芳佳は早速アイリスと仲良くなつていた。一方の大神の周りではまた一波乱起ころうとしていた。

すみれ「大尉いー私は一年も待つて居たんですよーそれを他の女を作つているなんてえー今晚で一年の遅れを取り戻しますわあー」

大神「誰だいすみれ君に飲ませたは！？」

さくら「すいませえん大神さん。私は止めたんですけどおー」

大神「さーさくら君まで飲んでいるのかい！？」

エイラ「一郎、住むのは南の方がいいナ、白い家に庭付きで、子供は三人位ダナ。勿論サーニヤも一緒に住むからどっちも平等にするんダゾ？」

大神「なんの話をしているんだエイラ君！？君まで飲んで……」

美緒「何を言うかあエイラ！大神、横須賀なんてどうだ？あそこは基地が近いし帝都も近くだ。子は国の宝だ。多い事にこした事はないぞ！ハツハツハツ！」

大神「坂本さんまで……」

大神の周りは異様に酒のスピードが早く、ドンドンと皆テンションがおかしくなつて行く。

ミーナ「……はあ」

マリア「……大変そうね、貴方も」

そこから離れ、少量の酒で留めているのはミーナとマリア。隊長と隊長代理なだけあつて冷静である。

ミーナ「貴方は、大神大尉の所に行かなくていいの？」

マリア「年長者として、あの中に混ざるのはちょっとね。後でゆっくりと話をするわ」

ミーナ「……大神大尉のおかげで、随分隊の雰囲気が変わったわ。

感謝しています」

マリア「私達も、昔はバラバラだつたけど。隊長のおかげで一
つになれた……これ以上の女性関係は勘弁して欲しいけど」

ミーナ「ふふつ、無理ね。あれは天性の物よ」

すみれとエイラに圧し潰ぶされそうになつている大神を見て、マ
リアは小さく溜め息を付くのであつた。

さくら「大神さん……私、大神さんがブリタニアに行つたつて聞
いた時は本当に悲しかつたです」

大神「すまない、急な命令で報告が出来なくて……でもこうやつ
て会えて本当に嬉しいよ」

さくら「はい……大神さん、さつきの話……」

大神「ん？ エイラ君や坂本さんの話かい？ あれは宵の席の事だ
から……」

さくら「……私、大神さんがどんな選択をしてもそれを尊重した
いと思います……でも、出来るなら……ずっとお側に居たいです」

大神「さくら君……きっと、俺は戦いから抜け出せないと思う……
皆の幸せと平和を守る為、この身が碎けるまで戦つて行きたい
……そんな俺と一緒に戦つてくれるかい？」

さくら「はい……何処までも……ご一緒します」

大神とさくらは見つめ合い、笑いあつた。非常にいい雰囲気で
あつたが。

バルクホルン「大神いー！ 私を抱けえー！」

すっかり出来上がつたバルクホルンにのしかかりを食らつて倒れこ
む大神であつた。

大神「ど、どうしたんだいバルクホルン！」

バルクホルン「バルクホルンじゃない！ トゥルーデと呼べ！」

大神「しかし……今は大勢人が居るじゃないか」

バルクホルン「うるさいトゥルーデって呼べ！」

大神「わ、分かつたよトゥルーデ。だから一旦離れてくれ」

バルクホルン「嫌だあ！」

エーリカ「……飲ませ過ぎたかな」

シャーリー「誰か写真機持つてないか？ 是非この光景を写真に残したいんだがなあ」

紅蘭「あ、 うちの御手製のならあるけど？」

シャーリー「よし、 賴む」

翌朝、 枕元にあつた写真を見て悶絶する事になるバルクホルンであつた。

宴会もたけなわになり、 それぞれが部屋に戻つて就寝した。 翌日の壮絶な一日酔いに皆苦しみながらも、 ストライクウイッチャーズと帝国華撃団は次の作戦にと進むのであつた。

ミーナ「では、 第八次報告を開始します」

ミーナと坂本はブリタニア軍参謀本部にと来ていた。 帝国華撃団と合流してからの一ヶ月、 まさに破竹の勢いでストライクウイッチャーズは巣を攻略して行つた。 ブリタニアの空は徐々に解放されて行つたのだった。

ミーナ「資料にある通り、 小型の巣は全て攻略しました。 これにより各国の戦艦による支援砲撃が敵本丸にと届きます。 後は、 最終作戦の発動指示を待つだけです」

首相「うむ…… 素晴らしい働きだ。 合流予定である巴里華撃団の様子はどうか」

美緒「予想以上に改造作業が難航していたようですが、 先日帝国華撃団の李紅蘭を巴里に派遣しました。 これにより作業効率は数倍に高まつた筈です」

首相「ふむ…… 急で申し訳ないが、 三日後に最終作戦を発動させる」

ミーナ「す、 三日後ですか！？ 先程報告したように、 未だ巴里華撃団の光武は改造が終わっていません。 とてもではありますんが数日では間に合いません」

首相「それは分かる……しかし、 今回の作戦の立案者である扶桑とガリアから催促が来ている。 彼らは主力戦艦を集結させている

のだ。その間にお国が焼かれるのを心配しているのだろう。本国としても、これ以上待たせる訳にはいかないのだ。分かつてくれ

美緒「（扶桑とガリアが焦つてゐる……？ 何があるな……）」

ミーナ「了解しました……ところで、マロニー大将は……」

首相「うむ……どうやら作戦に向け最後の追い込みをしていくようだ。なにやら新兵器の開発を進めていくようだ」

ミーナ「新兵器……ですか」

マロニーは声高かくウィッヂーズ不要論を唱えていた一人だ、彼の事も気掛かりであつたが、今はそれ以上の追求も出来ずにミーナは一步後ろにと下がつた。

ミーナ「以上で、報告を終わります。基地に帰つて準備を進めます」

首相「頼むぞ。君達がこの作戦の要だ」

美緒「必ずや、ブリタニアのネウロイを一掃してみせます」

ミーナと坂本は参謀本部を後にして、ストライクウィッヂーズ基地にと帰還した。

大神「三日後か……急だな」

バルクホルン「だが……攻略すれば我々の勝利だ、ブリタニアからネウロイを一掃する事が出来る」

カンナ「最終決戦つて訳か、この一ヶ月、戦いっぱなしだつたがそれも最後か」

さくら「作戦内容はどうなのでしょうか？」

ミーナ「特別、これまでと違う事をする訳ではありません。しかし……あまりにも巣がデカ過ぎます。全長はミカサの倍以上、内部に居るネウロイの数は予想の段階で数千から数万」

レニー「数が多くすぎる……援軍はどうなつているの？」

ミーナ「……本来ならば、各国のウィッヂ達が集結する筈でしたが、何者かの妨害でその命令が解除されています。ガリアと扶桑の戦艦は来てくれましたが……実質私達だけで数万の相手をしな

くてはいけません」

エーリカ「ひやーカールスラントに新しい勲章用意して貰わないと
ね。もう勲章に付ける物がないよ」

ペリーヌ「しかし、私達がやらなければ後がありませんわ」

大神「大丈夫だ、ストライクウイッチーズも、帝国華撃団も死
力を尽くして戦かえりと勝てるさ」

ミーナ「すいません……本来ならばこれはウイッチがやらなければ
いけない戦いなのに……」

大神「何を言うんですか。俺達は仲間です。何より、帝国華
撃団は正義の為に戦うのですから」

さくら「ええ、例えそれが命を掛ける戦いであっても」

すみれ「私達は一步も引きませんわ」

アイリス「いつの日かこの地球上に」

レニ「悪がなくなる日まで」

マリア「私達は戦い続けます」

カンナ「それが天下無敵のお！」

織姫「帝国華撃団なのでーす！」

帝国華撃団の面々はビシッと姿勢をただして大神に続く、

流石舞

台俳優と言つた所である。

芳佳「か、かつこいい！」

リーネ「凄いね……私より小さい子も居るのに……」

ルッキー「ねーストライクウイッチーズでもあれやうひつよー」

シャーリー「さ、流石に私達じゃ格好つかないだろ」

エーリカ「ブリタニア華撃団に部隊名変える？」

バルクホルン「ハルトマン、華撃団つて言葉結構気に入ってるだ
ろ」

決戦を前にして、彼女達はリラックスしていた。きっと、こ
れならば勝てると大神は安堵していた。

ミーナ「紅蘭さんの報告によると、巴里華撃団は間に合つかどう
かの瀬戸際だそうです。私達と帝国華撃団でやる覚悟をしなけれ

ばいません……最後の戦いです。健闘を祈ります」
ミーナの言葉を聞いて、皆身を引き締めて決戦に向うのであつた。

三日後、決戦当日、超弩級空中戦艦ミカサ内部

ミーナ「では、これより超巨大敵拠点に攻撃を仕掛けます。まずはミカサの主砲で敵拠点に風穴を開けます。そこから内部に入、十分から一十分間隔でミカサの支援砲撃を行います。砲撃時はこちらから指示を出すので各員その時は一時拠点から離脱してください。くれぐれも内部に入りすぎないようにお願ひします」

「「了解！」」

皆の表情は堅い、この戦いでブリタニアどころか歐州、もしくは世界の命運が左右されるのだ。緊張しない方がおかしい。

ミーナ「では、皆さん発艦準備に掛かってください」

ミーナの声に皆は無言で頷き準備に掛かる、大神は、全員に聞こえるように回線を開いてさくらに通信を送った。

大神「さくら君、去年の上野の桜は綺麗に咲いていたかい？」
さくら「え？ あ、はい。例年通り綺麗な桜でした」

ペリーヌ「こんな時に何を言っていますの！？」

大神「久しぶりに上野の桜を見たいな。春までは遠いが……皆で花見にでも行こう」

ルツキー「いいなあ……桜見てみたいなあ……」

大神「何を言つてゐるんだ。ストライクウィッザーズの皆も一緒さ。俺が招待するよ」

ルツキー「本当！？ やつたあ！」

美緒「全てはこの作戦で勝つてから。そういう事だな大神」

大神「はい……いいかい皆、総員！ 花見の準備をせよ！」

大神の言葉に皆が笑う。緊張は適度に解れたようだ。

すみれ「大尉！ まったく……こんな時にふざけないでください！」

大神「すまない。ミーナ中佐。指示をお願いします」

ミーナ「ええ、 それでは総員、 出撃してください！」

「「了解！」」

ブリタニアの空にウイツチと光武が舞う。今、 最終決戦に向かって心まで鋼鉄に武装した乙女達が決戦の場にと向う。

美緒「目標を確認……！ なんて言つ必要もないな……これは」

カンナ「で、 でつけー！」

巨大な入道雲のような形状をした巣、 いや。 敵要塞と言つてもいいかもしない。 その巨大過ぎる拠点の周りには無数のネウロイ、 小型の巣を攻略した時とは比べ物にならない数だ。

米田「まずは俺らが行く！ 主砲！ てえ！」

ミカサの主砲が火を拭く、 やはりミカサの主砲の威力は凄まじいがそれでも数十メートルの穴が空いただけであつた。

ミーナ「あれ程のネウロイの群れの中敵拠点に砲弾が到達する事自体が凄いわね……皆行くわよ！」

大神「総員！ 最後の戦いだ！ 気を引き締めて掛かっててくれ！」

さくら「大神さん、 いつものやつ、 お願いします！」

大神「ああ、 帝国華撃団花組！ 出撃！」

「「了解！」」

光武が敵の群れに飛び込んで行く、 ウイツチ達もそれに負けじと後に続く。

ルツキー「イチロー！ 私達にもやつてよー氣合入るつて！」

大神「そうかい？」

バルクホルン「早くしてくれ！ もう戦闘が始まる！」

大神「よし……！ ストライクウイツチーズ！ 出撃！」

「「了解！」」

大神の掛け声と共に、 戦闘が始まる。

大和、 武蔵、 そして他の戦艦にも戦闘開始の入電が飛ぶ。

大和艦長「よし！ 扶桑海軍はこれより援護砲撃を開始する、 く
れぐれもウイツチの皆さんに当てるんじゃないぞ！ 大神大尉と坂
本少佐も空に居るんだ！ 情けない姿を見せるな！」

下士官「大和主砲！ 角度調整良し！ 対ネウロイ徹甲榴弾装填確認。 いつでも行けます！」

大和艦長「頼むぞ……帝国華撃団、そしてストライクウィッチャー！」

各国の戦艦の援護砲撃が次々とネウロイの群れに届く。 少しづつではあるが敵にダメージを与えている。

エーリカ「撃てば当たる！ 照準いらぬよ！」

バルクホルン「いいか、戦艦には絶対ネウロイを向かわせるな！ 数千万から数億の船だ、沈んだら大損害だ！」

芳佳達の棒給が数十円のこの当時の物価から考えると、戦艦の高価さが分かる。 なんとしても沈めさせる訳にはいかない。

すみれ「連雀の舞！」

さくら「桜花霧翔！」

さくらとすみれの放つ攻撃で次々とネウロイは撃破せられて行く。

しかし、巣の中から出て来る敵の数は一向に減らない。

ミーナ「つく……まさか拠点内部に入り込む事すら出来ないなんて……ミカサ！ 応答願います！ 敵の数が多すぎます！ 再び支援砲撃を願います！」

かえで「さっきの砲撃でこちらの存在にネウロイが気がついてしまつたみたいなの！ 対空砲火で手が回らないわ！ なんとか二分後にもう一発撃つから、それまでに一時撃退してちょうだい！」

ミーナ「そんな……ミカサから攻撃するなんて……」

ネウロイの攻撃はドンドン利己的になつて行く、まるで人間を相手にしているような用兵っぷりであった。

大和観測手「敵機接近！ 数三！」

大和艦長「対空砲火！」

ウイッチと帝国華撃団が逃したネウロイが大和に向う。 大和の防御能力はネウロイの攻撃を耐え切る程強くはない。

大和観測手「駄目です！ 一つ撃ち漏らしました！ 来ます！」

大和艦長「なんてこつた！ 総員、衝撃に備えろ！」

ネウロイが大和に迫る直前、白銀の光武がネウロイを斬り伏せる。

大神「大和には、指一本触れさせない！」

大和観測手「やつた！ 白い光武です！ 帝国華撃団の大神大尉です！」

大和の搭乗員から歓声があがる、観測手は被弾を覚悟した瞬間に目の前に現れた光武に興奮を隠せないようだった。

大和艦長「たいした男だ……命を助けられたな」

その数秒後、二度目のミカサ主砲が発射される。またもや大量のネウロイを巻き込んで敵拠点に着弾するが、大きなダメージは確認されない。

レニ「大き過ぎるんだ……せめて、半分のサイズだつたら……」織姫「泣き言を言つている場合じゃないでーす！ まずは拠点に取り付かないと！」

ウイッチ達と光武は再び拠点に向つて飛ぶ、先程よりかは確かに拠点に近づいたが、まだ拠点に取り付いた者はいない。

武蔵艦長「これは、長期戦になるぞ」

武蔵副長「長引けば長引く程、こちらの不利になりますな」

武蔵艦長「ウイッチの皆さんのは無限ではない。補給や休息も必要だ……出来るならば短期決戦が理想であつたが……」

武蔵通信手「報告します！ 大和で被弾による小規模火災発生！ ガリアの戦艦にも被害が目立つてきました！」

武蔵艦長「うむ……まだだ！ 我等より一回りも一回りも幼いウイッチの皆さんが戦つているのだぞ！ ここで退いては扶桑海軍の名が泣ぐぞ！」

艦長の激が飛ぶ、少女であるウイッチが戦つているのだ。ここで背中を見せるような男は扶桑軍人ではない。皆その覚悟でこの戦場にと出て来ていた。

ペリース、エーリカ、すみれと言つた広範囲攻撃を得意とする者達の奮戦は特筆すべき物であった。限界直前まで魔力、靈力を消費して、なんとか道を作りだしている。

芳佳「宮藤芳佳！ 基地内部に侵入しました！ 大神さんとさくらさん、エーリカさんとバルクホルンさんも一緒に！」

芳佳の一報に戦場の兵達が歓声をあげる、しかし、戦いはまだ始まつたばかりだ。この後内部での攻略戦を控えている。

ミーナ「美緒！」

美緒「ああ！」

ミーナと坂本が手を繋いで互いの魔法を同時に発動させる。二人の魔法が混ざり、ネウロイ基地内部の詳細が鮮明に理解出来た。

美緒「つく……ミーナ！」

ミーナ「……しかし、事実です」

美緒「こんな事が……あるか！」

ミーナ「……皆さんに、お伝えしなければいけない事実があります」

ウイッチ達のインカムと、光武の通信にミーナの声が響く。その声は、事の重大さを物語つているようであった。

ミーナ「私と坂本少佐の能力で敵の詳細の数が分かりました……敵拠点の中央に巨大なコアがあります。それを壊せばこの基地は崩壊する筈です」

ルツキー「やつたあ！ それなら！」

ミーナ「ですが……ですが、そこに到達するまでに倒さなければいけないネウロイの数は凡そ五万……です」

坂本は己の魔眼に移る真実が嘘だと願いたかった。基地内部に見えるおびただしい数のコアの反応、反応を示す赤い光がない箇所を探す方が容易な程であった。

リーネ「そんな……」

芳佳「五万……そんな数、見た事ないよ……」

絶望感が体の底から溢れて来る。これが、人類の天敵であるネウロイの力なのであるうか。

大神「まだだ……まだ何か方法がある筈だ！」

そんな中、帝国華撃団は前を見つめていた。大神の声を聞き、

ウイツチ達の心にも少しの希望が生まれる。

美緒「そうだ……ウイツチに不可能はない！ 私達が諦めてどうする！」

ミーナ「ですが……五万という数を倒すには……」

大神「……アレが使えれば」

エリカ「では、使いましょう！ アレを！」

突然、大神の光武に通信が割り込んで来る、戦闘服に身を包んだエリカの姿が映し出された。

大神「エリカ君！？」

エリカ「大神さん、出撃命令をお願いします」

大神「し、しかし。君達は大丈夫なのかい？」

エリカ「言ったでしょう？ 大神さんの命令さえあれば私達は地球の裏側にだって出撃します。さあ、命令をください！」

大神「よし……巴里華撃団！ 出撃！ 目標、帝国華撃団及びストライクウイツチーズの援護！」

「「了解！」」

巴里華撃団の面々の声が響いた。

シャノワール地下、司令室。

メル「大神隊長の出撃命令、確認しました」

グラン・マ「よし、リボルバー・カノン起動。目標敵巨大拠点！」

メル・シー「ウイ・オーナー！」

凱旋門の地下に格納されたリボルバー・カノンが起動される。巴里の市民達は初めこれを見た時は驚きを隠せなかつたが、今や少し離れた所で歓声を送つてゐる。

グラン・マ「リボルバー・カノン、発射！」

轟音と共に、光武が格納された弾頭が発射される、一度成層圏まで到達した弾頭は再突入してものの数十秒で目標に到達した。

ルツキー「わつ！ 来た！ しかも弾頭の数前より多い！」
五つの弾頭が分離し、中から光武が出現する。

「「巴里華撃団！ 参上！」」

巴里より舞い降りた天使達、これによつて、全ての戦力がここに集結した。

エリカ「お前たせしました大神さん。 巴里華撃団、指揮下に入ります」

大神「エリカ君、よく来てくれた。 グリシーヌ、花火君、ロベリア、コクリコ、早速で悪いが状況は最悪に近い。 一気に決めるぞ！」

最後の弾頭が到着し、中から紅蘭の光武が出現する。

紅蘭「ほんま、帝国華撃団も人の事言えへんけど無茶苦茶やなあ

巴里華撃団」

グリシーヌ「貴公達には言われたくないがな……」

エリカ「まずは、皆さんの傷を治療します！ アイリスさん、お手伝いお願ひします！」

アイリス「はーい！ お兄ちゃん達巣から出てきてえ！」

大神達が巣から出ると、エリカとアイリスの治癒の光が降り注ぐ、体力、靈力、魔力共に全開まで回復する。

カンナ「サンキュー エリカ！ これでまだまだ戦えるぜ！」

敵拠点の前に並ぶ十一のウイッヂと十四の光武、その光景は壯觀であつた。

大神「帝国華撃団の皆、巴里華撃団の皆……五万全てを倒せるかどうか分からぬが……俺らでロアをむき出しにしてやろう」

サーニャ「……待つてください、何か来ます」

サーニャはピクッと、反応して空を見つめる。

大神「何か……？ ミーナ隊長、増援は無い予定でしたよね？」

ミーナ「ええ……」

サーニャ「凄いスピードです……光武より……ウイッヂよりも早い？ これはまるで……」

サーニャの言葉を遮り、それは飛来した。

鋼鉄の機動兵器「ウォーロック」である。

大神「な、なんだ！？」

カンナ「お、おい！敵に突っ込んで行くつもりだぞ！？」

ウォーロックは巡航形態のままネウロイに突撃して行つた。

バルクホルン「な、なんだ！？何が起こっているんだ！」

大神達は我が目を疑つた。ウォーロックが通り過ぎた後、ネウ

ロイ達はウォーロックに従つよう。その後を付いて飛び始めたのだ。

次々と、ネウロイはウォーロックの支配下に置かれて行く。

ミーナ「そんな……まさか……」

マロニー「ご覧頂けましたか、首相」

首相「……まさか、本当に」

マロニー「では約束通りに……」

首相「ああ……後は任せよう」

間に合つた。マロニーは内心安堵していた。予想より早く最終決戦が始まつてしまつた物の、なんとかウォーロックの実戦投入が間に合つてくれた。

マロニー「ふふ……さて」

マロニーは下士官から通信機を受け取り、戦場に居る全ての兵達に向けて通信を始めた。

マロニー「ガリア、扶桑両軍の兵達よ、作戦は無事終了した。ご苦労だつた。ブリタニア空軍の新兵器「ウォーロック」によつてこの巣のネウロイは全て支配下に置かれた。これにより、本作戦は終了したのだ」

現場は騒然としている、多くの兵達は自体を把握出来ていなかつた。

米田「加山……尻尾を掴み損ねたか……」

かえで「司令……」

米田「皆を回収しな。俺達は……負けたんだ」

米田は苦虫を潰したような顔を浮かべてそう指示する。その時、

ウイッチ達の元に、マロニーから通信が入る。

マロニー「聞こえるかね、ストライクウイッチーズの諸君」

ミーナ「……マロニー空軍大将」

マロニー「ご苦労だった、君達の任務は終わりだ。至急原隊に復帰したまえ」

ミーナ「まだです！先程大将は全てのネウロイを支配下に置いたと言いましたが、内部のネウロイはまだの筈です…」

マロニー「時間の問題なのだよ、もう一度言つ。ストライクウイッヂは現時刻を持つて、解散だ」

芳佳「解散……？ そんな……」

ウイッヂ達の知らぬ所で起きていた水面下の戦い。ブリタニア空軍の新兵器開発と、その尻尾を掴む為の諜報戦はガリア、扶桑の敗北に終わつたようだつた。

後味の悪い形で戦いは終わつたかのように思えたが、異変はすぐに起きはじめたのだつた。

次回予告

芳佳「私に出来る事、一つずつ叶えたい。私に出来る事、貴方にも伝えたい。諦めないで、翼広げて、さあ飛ぼうよ、明日の為に次回最終話「わたしに出来る事」守りたいから、私は飛ぶ！」

最終話 「わたしに出来る事」（前書き）

ストライクウェイツチーズ×サクラ大戦SS

最終話 「わたしに出来る事」

最終話 「わたしに出来る事」

超弩級空中戦艦ミカサ

内部の部屋に集まつた皆の表情は固まつていた。

ストライクウェイツチーズ突然の解散。つい数分前まで戦闘をしていた彼女達はまだ事態を把握しきれない。

ペリー・ヌ「ど、どういう事ですか……？あの兵器は一体……？マロニーとの通信が終わると、各々は先程の兵器について話始める。なんとも後味の悪い幕引きであった。

米田「……」苦労だつたな、皆。ゆっくり休んでくれ

大神「米田司令！一体どういう事なのでしょうか！」

帝国劇場支配人にして帝国華撃団司令の米田中将。彼がゆっくりと皆が居る部屋に入つてくる。副司令のかえでも一緒であった。

米田「……もう全部話してもいいだろ。今回の件、全ては扶桑の諜報員が仕入れた一つの情報から始まつた」

米田の言葉を皆は静かに聞く。事の真相が全て語られようとしていた。

米田「その情報、ブリタニアの一部の者がネウロイのコアを軍事転用し、ネウロイを掌握する為の研究が進められているとの情報だ」

バルクホルン「そ、そんな馬鹿な事があるか！許される事ではない！」

グリシーヌ「扶桑から我がガリアに情報がリークされ、協議の結果、我等は先手を撃つ事にした。ブリタニア空軍が目の上のたんこぶとして潰そうとしていたストライクウェイツチーズを守る為の最強の刺客、大神一郎を送り込み。更に扶桑、ガリア両国の

諜報員達が多数ブリタニアに入った」

米田「事態は一刻を争つた。 ウォーロック研究施設は数日間隔で移動され、 情報を掴むのは困難を極めたのだ。 なんとかウォーロック完成間近の情報を入手したのが一週間前、 これ以上待てないと最終作戦を開始したが…… どうやら裏目を引いてしまったようだな…… ここまで物を完成させて来るのは……」

坂本「大神はこの事を……」

大神「いや、 知らなかつた。 初耳だよ」

米田「大神に求めたのはストライクウェイツチーズを守る事とその強化だ。 裏方の事は専門の部隊がある…… お前達はよくやってくれた…… 向こうが上手だつたのだ」

ルツキー「じゃ、 じゃあ。 これでおしまいなの？ もう私達要らないの？」

米田「あの兵器が量産されるのならウイッヂは不要になるだらう」

芳佳「…… そ、 そんな」

米田「事態は更に深刻だ…… 現在のネウロイと人類の戦いは姿を変え、 人と人の戦争になるだらうな。 中世に逆戻りだ」

ミーナ「ネウロイを掌握する技術はブリタニアの、 それも極一部の人間だけが持つ技術と言う事になります…… これは非常に危険なバランスです」

エリカ「つ、 つまり…… 戦争になっちゃうんですか？」

グリシーヌ「…… 最悪、 世界大戦もあり得るだらうな」

グリシーヌの言葉に、 皆は事の重大さを思い知る。 ウィッヂ達のショックは相当の物であつた。 これまで人類の為に、 死力を尽くして戦つて來たのだ。

大神「…… もう、 打つ手はないのですか？」

米田「これまであらゆる手をつくして來た…… 賴みの月組からも連絡がない」

沈黙が辺りを包む、 数分の間、 誰も口を開く事が出来なかつたが。 突然の警報が事態を急展開させる。

米田「なんだ！ 何があつた！」

通信手「緊急警報！ ウオーロックとネウロイの様子が変です！ 外を見てください！」

皆は走つて窓際にと向つ。

大神「ネウロイとネウロイが……同士討ちしている！？」

坂本「いや……違う！ 助けているのだ！ ウオーロックの支配下に入ったネウロイを支配下に入つていらないネウロイが取り込んでいるのだ！」

米田「マロニー 空軍大将に通信を入れろ！ すぐにだ！」

米田の言葉に即座に通信が飛ぶ。

通信手「通信、繋がりました」

マロニー「まだ居たのかね。 確か扶桑の米田中将でしたね」

米田「おう、どうも様子が変だぜ？ オタクの新兵器

マロニー「少々抵抗にあつてゐるだけだ。問題は無い」

アイリス「み、見て！」

アイリスの言葉に皆が再び窓の外を見る、甲高いネウロイの数千数万の鳴き声が辺りに響き渡り、雪崩のよつに巣の中からネウロイが流れだし、ウォーロックを巣の中に入引きずり込んだ。

マロニー「おい！ どうなつてゐる！ 制御は聞いているのだろうな！」

マロニーの声が通信機の向こうから聞こえて来る。想定外の事態なのは間違ひ無かつた。

ミーナ「美緒！」

坂本「今見ている……やられたな。ウォーロックも、ウォーロック支配下に入ったネウロイも全てを飲み込んでしまつた……」

紅蘭「変形していくで！」

入道雲のよつな形をしていた巣は形を変え、一つの意思を持つネウロイのよつに攻撃的な形狀に変形した。

大神「……皆、行くぞ」

マロニー「待て！ その場を動くんぢやない！ 貴様らはもう用無

しだ！」

ミーナ「マロニー大将！ 今はそのような事を言つてゐる場合ではありません！」

マロニー「うるさい！ 私は大将だぞ！ 貴様らの首など一瞬で飛ばせるのだ！ 貴様らの家族ごと最前線に飛ばしてやる！」

米田「畜生が……腐つてやがるぜ。 功名心に目が眩んだな？」

マロニー「黙れ！ 貴様らとて人の事を言えまい！ 鼠共を使って嗅ぎまわつていたのは知つているぞ！」

大神「……マロニー大将、 今この瞬間から取る我々の行動は全て、この扶桑海軍大神一郎が責任を持ちます」

マロニー「何に！ 貴様か……！ 英雄気取りの小僧め……一つや二つ戦果を上げただけで調子にのるな！」

大神「通信を切つてください」

大神の言葉と共に通信が切られる。

大神「君達を戦わせる訳にはいかない……ミカサで待つててくれ」大神はそう残して、格納庫にと走りだした。

ロベリア「はつ、 馬鹿じやないのか？ あいつ、 何を今更」

ロベリアの言葉に皆は頷いて、米田を見た。

米田「……行つて来な、 扶桑陸軍中将なんて肩書きも役に立つもんだ。 お前たちを飛ばさせたりは絶対しねえ。 思つ存分戦つて来な」

少女達は米田に敬礼し、走りだした。

マロニー「クソ！ どうなつてゐるんだ！ オイ！ 何故返事をしない！ 誰か居ないのか！」

先程のネウロイの動きでウォーロックは反応を失つてしまつた。

加山「貴方で最後ですよ、 マロニー空軍大将」

狼狽するマロニーの後頭部に拳銃が突きつけられる。

加山「よつやつと、 捕まえましたよ。 今俺の部下達が貴方の研究資料を片つ端から焼いています。 貴方の部下も全て確保しまし

た。 あんな物はこの世にあっちゃいけない」

マロニー「き、 貴様ら……何者だ！」

加山「帝国華撃団月組、 太陽の陽を浴び咲く花組の裏方……そん
な所です。 さあ大神……後は存分にやつてくれ」

加山の部下達が次々と到着し、 マロニーを確保した。

マロニーの野望は後一步の所でついたのだった。

ミカサから一機の光武が出撃する、 大神は一人でもあのネウロイ
と戦う覚悟を決めていた。

大神「あれが動きだしたら…… 内部の「コア」を壊せれば…」
すみれ「大尉一人で出来る訳ないでしょ？ 昔からそういう所は
変わらないのですから」

大神「すみれ君！」

さくら「帝国華撃団としてではなく、 真宮寺さくらとして、 大
神さんと戦います！」

エーリカ「水くさいよねー！」まで一緒に戦つて来たのに
シャーリー「まつたくだぜ、 ウイッヂの私達が中でただ見てるだ
けなんて許されないよな」

大神の光武を中心に、 彼女達は後に続く。 帝国華撃団も巴里華
撃団も、 ストライクウェイツチーズも関係無い。 一つの部隊が出来
上がつていた。

大神「しかし！ 君達が戦つたら君達の家族まで危険に晒されてしま
う！」

ミーナ「これはストライクウェイツチーズとしてでなく、 私個人で
の勝手な行動です。 罰は受けます」

大神「君達に罰を受けさせる訳にはいかない！ …… そう、 これ
は俺の身勝手なんだ…… 帝国華撃団、 巴里華撃団、 ストライク
ウェイツチーズの皆さんに命ずる！ これより三つの部隊を一時解散し一
つの部隊に再編成する！ これは全て俺、 大神一郎の独断だ！
責任は俺が持つ！」

エリカ「大神さん！？ 何を言つて」

大神「帝国華撃団の皆、 巴里華撃団の皆、 そしてストライクウイツチーズの皆、 全員必ず帰還せよ！ 大神華撃団！ 出撃！」

「「……了解！」」

大神の言葉に皆は反射的に返事を返す。 交わる事が無い筈の三つの部隊、 一人の男のによつて実現した最強の部隊。 大神華撃団が最終決戦に向けて出撃した。

ミーナ「指示をお願いします！ 大神隊長！」

ストライクウイツチーズの皆はミーナの言葉を聞いて実感する、 そう、 今自分達の隊長はミーナではない。 ミーナ自身も彼の元で戦える事に身震いしていた。

芳佳「そつか……大神さんが……隊長なんだ！」

エーリカ「大神華撃団かあ……名前つて発想は無かつたなあ……」

バルクホルン「戦闘中だぞハルトマン！ 絶対に勝つぞ！ 隊長！」

大神「まずは道を切り開くぞ！ 帝都の皆！」

さくら「了解！」

すみれ「まったく……大所帯ですわね」

カンナ「仲間は多ければ多い程良いって奴よ！」

大神と最も長く戦つて来た彼女達が一番に飛び込む。 ブリタニアの空に躍り出る戦士達。

その動きはまさに圧巻、 光速、 衝撃の帝国華撃団は伊達ではない。

紅蘭「何人やろ、 1、 2、 3……」

レニ「隊長含めて二十五人。 この数と戦力。 まさに最強の部隊だよ」

話しながらも次々とネウロイを蹴散らして行く。 今の彼女たちにはネウロイなど相手になる存在ではない。 大神の言葉に、 限界値を遥かに超えた力を發揮している。

大和艦長「全艦隊に告げる！ 空を見よ！ 最後まで諦める事無く戦う若人の姿を見よ！ 我等も最後の力を振り絞り、 一機でも多

く敵を葬り去るのだ！」

大和艦長の通信に艦隊内の兵達は声を大きく上げる。士気は最高潮にまで高まつてゐる。

武藏艦長「じうこうう事だらうな、 副長」

武藏副長「ハツ、 なんじょつか」

武藏艦長「これ程の窮地なのにだ、 何故だろつ。 微塵も負ける気がせん」

武藏副長「奇遇ですね。 私もです」

大神達の戦う姿を見て。 皆は最後の力を振り絞り援護砲撃を再開した。

大神「帝都の皆が道を作つてくれた！ 巴里の皆！」

エリカ「はい！」

グリシーヌ「さあ行くぞ！ 巴里華撃団は優雅に舞うのだ！」

コクリコ「グリシーヌ、 はりきつてるね！」

ロベリア「久々に隊長に会えたからつてハリキッてんだろ」

花火「きつと……皆そうだと思います」

グリシーヌ「つるさいぞ！ 集中しろ！」

友を守り、 我が道を行く。 愛の御旗のもとに集つた乙女たちが敵をなぎ払う。

ブリタニアの空に咲く勇姿。

巨大な巣から吐き出されるネウロイの数は今や万を超えてゐる。それでも、 彼女達は一步も引く事はない。

大神「道が開かれた！ 一氣に行くぞ！ ウィッヂの皆！」

ミーナ「行きますよ皆さん！」

ルッキー二「うひやー一杯、 でもなんでだろ、 全然怖く無い」

シャーリー「そうだな、 今は……絶対に負ける気しないぜー！」

芳佳「大神さんが教えてくれた事……人々を守る為に……私は飛びます！」

坂本「遅れるなヨリーネ！ お前は立派なウイッヂだ！ きっと、

私よりも立派な兵になる！」

リーネ「さ、坂本さん！ ありがとうございます！ 私……頑張ります！」

ウイッチ達が群れの中央に突入する。次々出てくるネウロイを片つ端から倒して行く。彼女達が最強のウイッチ部隊なのは疑う余地も無かつた。

エーリカ「ね、一郎。戦闘中で悪いんだけどさ」

大神「なんだいエーリカ君」

エーリカ「この一ヶ月、帝国華撃団の皆が来て、一郎と帝国華撃団の皆が凄いお似合いだつたから。私諦めようと思つたんだけどね……ごめん、やっぱ無理。大神隊長が大好き」

大神「え、エーリカ君！？ 回線が……」

「……」

皆の無言の圧力を感じる、しかし今は戦闘中だ。

大神「す、すべてはこの戦いに勝利してからだ！ 上野の桜は綺麗だ、エーリカ君。いや、皆で見に行こう！」

ペリーヌ「そうですわね、扶桑の桜というのも見てみたいですね、さつきの通信と話は別ですけど」

エイラ「色々な資料で見た事があるゾ、楽しみダナ。さつきの通信と話は別だけドナ」

織姫「皆とやる宴会は格別でーす！ さつきの通信と話は別ですけど？」

マリア「準備が大変そうね、頑張らないと。大神隊長、所ですが、後でゆっくりとお話したい事があります」

大神「……」

戦闘が終わつた後に起こるであろう惨事に、背筋が凍る思いの大神であつたが、そんな事を言つてゐる場合ではない。長期戦ではやはり不利だ。一気に勝負を決める為に大神は皆に通信を送る。

大神「帝都の為……巴里の為……ブリタニアの為……いや、世界中全ての人の為に絶対に勝利しなくてはいけない！ 皆力を貸してくれ！」

エリカ「はーい！ アレをやるんですね！」

芳佳「あ、 アレ？」

さくら「大神さんの事を想い、 大神さんに力を託せば……きっと
出来る筈です！」

大神「行くぞ！ 皆！ 狼虎……！」

さくら「大神さん！」

すみれ「大尉！」

カンナ「隊長！」

マリア「隊長！」

アイリス「お兄ちゃん！」

紅蘭「大神はん！」

織姫「大尉さん！」

レニ「隊長！」

皆の靈力が大神に集まる、 まばゆいばかりの靈力が一般の人間に
も見える程に集約して行く。

花火「隊長！」

グリシーヌ「隊長！」

コクリコ「イチロー！」

ロベリア「隊長！」

エリカ「大神さん！」

それはネウロイさえも恐れる程の力の塊。 それが全て大神の光武
にと集まっている。

大神「……滅却！」

芳佳「大神さん！」

坂本「大神！」

リーネ「大神さん！」

ペリー・ヌ「大尉！」

ルッキー・ニ「イチロー！」

シャーリー「一郎！」

エイラ「一郎！」

サニニヤ「大神大尉！」

バルクホルン「大神！」

ミーナ「大神大尉！」

エーリカ「一郎！」

全ての力が集まる、大神は単身敵拠点に向かつて突撃する。

大神「俺が！俺達こそが……！正義だ！」

大神「狼虎滅却 震天動地！」

帝国華撃団、巴里華撃団、ストライクウイッチーズ、靈力と魔力、皆の想い、それが今一つになり、大神を通して放出される。

巴里を救つた究極の必殺技、皆の力を集約したその攻撃は敵拠点に直撃する。

少し離れた所に居る大和にまで衝撃が届き、艦が揺れる。

大和艦長「どうなつたのだ！大神大尉の光武は！」

観測手「敵拠点は形状崩壊を始めています！ネウロイの姿もありません！我々の勝利です！……ですが！大神大尉が……！」

大和艦長「……あの衝撃では」

観測手「そんな……そんな事が……」

下士官「……あそこだ！西の空を見ろ！」

キラキラと輝くネウロイの残骸、美しい光景の中、白銀の光武がゆつくりと飛行していた。

大神「……俺達の、勝ちだ」

その後、次々と仲間達が大神の光武に殺到した為、バランスを崩して何度も墜落しそうになりながらも、なんとか大神は大和の甲板にと緊急着陸した。

大和艦長「……やれやれ、黒髪の貴公子等と噂される訳だ。派手な戦いだつたよ」

大神「いえ……必死でして……」

大和艦長「ふふつ……これ以上長話をしていたら私が撃たれてしまいそうだ。誰か、写真機を持って来てくれ。彼女達と大神大

尉で一枚取つてやろうではないか」

下士官「はい！ 只今！」

下士官は喜んで写真機を取りに走つた。大和の艦長達と握手を交わして大神は皆の所に帰る、皆は写真に写る場所でまたモメているようだった。

さくら「こ、 こればかりは譲れません！」

エリカ「私は大神さんのこっち隣ですから、 反対側はどうぞ皆で決めてください」

すみれ「何で貴方の位置が確定していますのー？ そこは私はすわ！」

エーリカ「じゃあ、 間を取つて私が」

グリシーヌ「駄目だ！ それより先程の通信はどういう事だ！」
たつぱり十分程揉めて、 やつと整列した彼女達の真ん中に大神が入る。

大神「それじゃ、 皆行くぞ……勝利のポーズ！」

あの戦いから、 三ヶ月が過ぎました。私、 宮藤芳佳は今扶桑に戻つて来ています。

私の、 大事な宝物。あの時撮つた写真は毎日眺めています。
写真の中で皆は笑顔で写っています。 あの後、 小型の巣を攻略した時以上の大宴会が開かれました。

戦闘中のエーリカさんの通信を皆しつかりと聞いていたみたいで、
大神さんは問い合わせられてタジタジになつていましたが、 エーリカさんはニコニコ笑つて大神さんの隣でお酒を飲んでいました。
エーリカさんその他にも色々な人達が好意を抱いていたようでした。
の宴会の最後の方はそれはとても凄い物でした。

何日も宴会した後、 その時はやつて来ました。

帝国華撃団の皆さんには扶桑にと帰還する事になりましたが、 大神さんはこれまでの功績を理由にこの先の進退問題についてある程度

自由を与えたみたいでした。

皆はそれとなく一緒に来てくれないかとお願いしていましたが、やはり大神さんはこれから先も戦い続ける為に、一旦帝都に帰る事に決めました。

その、別れの日、ミカサの甲板に皆が集まってお別れを言つた日。

私と坂本さんは一緒に扶桑まで送つて貰う事になつたので、私と坂本さんは大神さんとのお別れまだでしたが。他の皆にとつてはお別れの日です。

皆、我慢して居ましたが。大神さんが一人一人に声を掛けると我慢出来ずに皆泣いてしまいました。いつも元気なルツキーニちゃんや、凛としたバルクホルンさん、エイラさんやサー二ヤちゃん、そしてあのハルトマンさんまで涙ぐんで居ましたが、最後は皆笑顔で大神さんを見送つていました。さよならではなく、また会えるから。と言う大神さんの言葉は非常に心強い物でした。

坂本さんが来て、扶桑を出たあの頃、私は何も出来ない未熟者でした。

ストライクウィッチーズの皆さんに出会い、坂本さんに訓練して貰い。そして、大神さんに戦う意味と信念を教わり。私は最後まで戦う事が出来ました。

私はストライクウィッチーズとして、そして大神華撃団として戦えた事を誇りに思います。

上野の桜は、きっと、きっと来年も綺麗に咲く筈です。皆で行く花見を、とても楽しみにしています。

大神隊長がストライクウィッチーズに着任するようです

第一部 完

次期予告（前書き）

ストライクウェイツチーズ × サクラ大戦 SS
ストライクウェイツチーズ 2分は少しオリジナル分が多くなるかもし
れません

次期予告

私、宮藤芳佳は今欧洲に向かう飛空艇の中に居ます。　あの大戦から半年、私は中学校を卒業し実家の診療所に入ろうと思つていたのですが、お父さんからの一通目の手紙が私の運命を大きく変えたのでした。　あれは一週間程前の出来事でした。

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようす（第一期）

第一話「花萌える欧洲」

ストライクウェイツチーズ2分は少しオリジナル分が多くなるかもしれません。

あわよくばネウロイとの戦いに決着を付けるオリジナル三期（短め）もやりたいな……と思つていますが流石に……

やるとしたらストライクウェイツチーズの監督も大好きなあの作品をリスペクトした流れに……

ともかく一期分もよろしくお願ひします。

友人に「大神さんつて3終わった時点で中尉じゃなかつたっけ?」
と言われ調べてみるとどうやら巴里終了時では中尉のようです……
この世界では大尉に昇進したと言つ事で……

一話は近日中に投稿予定です

第一話「花萌える歐州」（前書き）

ストライクウェイツチーズ2×サクラ大戦S.S.です！
ここから第一期分に入りたいと思います

第一話「花萌える歐州」

第一話「花萌える歐州」
私、宮藤芳佳は今歐州に向かう飛空艇の中に居ます。あの大戦から半年、私は中学校を卒業し実家の診療所に入ろうと思つていたのですが、お父さんからの一通目の手紙が私の運命を大きく変えたのでした。あれは一週間前の出来事でした。

みつちゃん「芳佳ちゃんーん！」

芳佳「あ、みつちゃん！」

中学校の卒業式が無事に終わり、芳佳は帰路に付こうと校舎を出た。校門近くでみつちゃんとその祖父がオンボロの耕運機で出迎えくれた。

芳佳「みつちゃんは凄いよね、高校に行くんだもんね」

みつちゃん「そんな事ないよ……芳佳ちゃんはお家を継ぐんだよね？」

芳佳「うん……そりなんだけど……」

芳佳は、迷っていた。ブリタニアでの激戦を終え、扶桑にと帰つて来ていた芳佳は軍を抜けている状態だった。もはや戦いの中に身を投じる事は無いと自分でも思つていた。しかし。

みつちゃんと芳佳は、みつちゃんの祖父に診療所へと送つて貰う。

芳佳の実家でもあるそこに入ると、一番大きな額に飾られた写真が目立つ場所に置かれている。

みつちゃん「何回見ても良い写真だね、みんな笑つてる」

芳佳「うん……皆元気にしているかな」

あの決戦の後に撮られた写真、帝国華撃団、巴里華撃団、そしてストライクウィッチーズの面々で撮つた写真を芳佳は毎日のように見つめていた。それだけではない。

みつちゃん「凄いよね、この真ん中の人、いっしに帰つて来て

からすぐまた事件を解決したんでしょう？」

芳佳が大事に保存している新聞、そこにはつい数ヶ月前まで起つていた帝都での事件の記事が大々的に書かれていた。

芳佳「本当に凄いよ！でもその事件の後処理のせいでお花見が中止になっちゃつたけど……」

しょんぼりと俯く芳佳、帝都を再び襲つた魔の者達を退けたのは勿論帝国華撃団の面々、そしてそれを率いていたのは勿論彼である。

みつちゃん「歐州でも新しいネウロイの巣が見つかって緊張が高まつてるし……新聞では人類の逆襲だつて大騒ぎしてるし……どうなつちゃうんだろうね」

芳佳達ストライクワイツチーズがもたらした大勝利、これは大きく世間を動かした。人類はネウロイに勝ち得る。地球上からネウロイを一掃するべく、大規模作戦が発動されるとの噂もあつた。芳佳「ネウロイ掃討なんて……ドーバー海峡のネウロイを倒すだけでもあれだけの戦力が必要だつたのに……」

歐州での情勢は芳佳達にも聞こえて来ている。共に戦つた戦友達は多くがまた戦線に投入されていると言つ。

芳佳「（……私に……出来る事）」

確かに、診療所を継ぐと言う事は大事な事である。芳佳の住む小さな村でもこの診療所を頼つてくれる人が大勢居る。

芳佳「（でも……歐州では……）」

芳佳は戦場を知つてゐる。自分の治癒能力で救える命があるかも知れない。

芳佳「（私……どうすれば……大神さん）」

みつちゃん「芳佳ちゃん！誰か来てるよ！？」

芳佳「あ、はい！」

ボーッと新聞を見つめていた芳佳は来客が来ていた事に気が付かなかつた。

その来客は、半年前芳佳に手紙を届けた人物と同じ、何度か言

葉を交わして部屋の中になると戻る。 その手紙を見て、 芳佳は驚愕の声を上げる。

芳佳「お父さんからだ！」

半年前、 扶桑に帰つて来てからすぐに死んでいる筈の芳佳の父から手紙が来ていた。 今回も差出人は同じ。

みつちゃん「なんて書いてるの？」

芳佳「ん…… これなんだろ？」「

みつちゃん「何かの設計図……？」

専門知識の無い芳佳には何の設計図かは検討もつかない物であつた。しかし、 ストライカーユニット開発に大きく関わつていた父からの設計図だ。 大切な資料である事は間違ひ無かつた。

芳佳「……坂本さんなら分かるかも」

みつちゃん「芳佳ちゃんの家に前來てた人？」

芳佳「うん！ 届けなきや！」

みつちゃん「え、 今から！？」

時刻は正午を回つた頃、 芳佳は山を降りて海軍の基地がある街まで行く事にした。

同時刻、 扶桑帝都、 賢人機関

リベリア大統領「つまり……ネウロイに奪われてしまつたコーラシアを奪い返す為、 技術を全て公開しようと」

米田「……」

扶桑を裏から操つてゐる賢人機関、 その会議室には扶桑を始めとする大国の首相に軍の責任者達が集まつてゐた。

花小路「技術の共有と書いて頂きたい。 こちらも虎の子である蒸気機関を利用した飛行戦艦の技術を公開しよう」

花小路の言葉に会場をざわつく、 今、 人類の行く末を掛けた會議が扶桑で極秘裏に開かれていた。

米田「（……まあこれくらいは仕方ねえかい）」

ガリア首相「先の戦いで絶大な力を誇つた扶桑の決戦兵器、 あの

技術を皆で共有出来れば、ネウロイなど一掃できましょつ

米田達の手元にある資料、『神龍号作戦・コーラシア中央殴り込み艦隊の概要』と記されている。多少アレな命名をした張本人、

作戦の立案者である米田は溜息を付いて各国の反応を見る。

米田「（ミカサの技術を公開すると）言つたら田の色が変わりやがつた。相変わらず口の上手い爺さんだぜ」

ロマーニヤ大公「技術共有はありがたい、話を戻したいのだが、我が国に現れた新たなネウロイの巣なのだが……」

花小路「それについては提案がある。今一度、ロマーニヤに置いて彼女達を再集結させるのはどううづか」

ブリタニア首相「なるほど、民達からも根強い人気のある彼女達がまた戦果を上げれば作戦を実行しやすくなる。いい考えだと思うが……」

各国の首相達もこの件について異論は無いようだつた。

花小路「では決まりだ。ロマーニヤの巣は今一度ストライクワイツチーズに任せよう。米田、彼らはどうしている？」

米田「しばらくは先の一件の後始末で動けませんね。まずは娘ちゃん達だけで頑張つて貰いましょうや」

各国の偉い方達は会議が終わるとすぐに会議室を後にして、自國にと戻つて行つた。

花小路「……これでいいんだな？」

米田「はい、人類が生き残る為……仕方無いでしょうな」

この計画が発動するのはまだまだ先の事になるであろう、まず欧洲はロマーニヤにて、再びネウロイとの戦いが始まつとしていた。

美緒「まったく……本当にいいんだな宮藤」

芳佳「えへへ……『めんなさい坂本さん、でも、やつぱり私皆を守りたいんです』

芳佳が基地に着くと、基地は騒然としていた。欧洲はロマーニ

ヤにて新たな巣が出現したらしく、扶桑からもウイッシュが向かう事になつてゐたのだ。その中に、かつての上官である美緒の姿があつた。

次々飛び込んで来る欧洲からの無線の中には親友であるリーネの物もあつた。助けを求める彼女の声に、ついに芳佳は決意し、欧洲行きを志願したのであつた。多少、強引なやり方であつたが。

美緒「ストライカーユニットを履いて飛空艇を追いかけて来るとは本当に無茶苦茶な奴だ……あいつの無茶苦茶が移つたんじやないのか？」

芳佳「そ、 そうかもしれないです……」

芳佳が飛空艇に追いついてからおよそ一週間、何度かの中継を挟んで芳佳はついにロマーニヤの近くにと近づいて来ていた。

毎日のように美緒から小言を頂いては今のようないい会話をしている。

芳佳「坂本さんは……大丈夫なんですか？」

美緒「何を言つか、若い奴らに早々負けていられるか……なんか今のは発言が年寄りっぽかつたな」

芳佳「そ、 そんな事無いです！ でも……ウイッシュはドンドン魔力が弱くなつて行くつて言つし……」

美緒「うむ……まあ、 ちょっと前に補充したしなんとかなる筈だ」

芳佳「補充ですか？」

美緒「い、 いやこつちの話だ」

帝都に仕事や修行の旅で訪れる度に「補充」をしていた美緒であつたが、彼女の大きく変わつた部分であるのは肩に掛けた刀である。芳佳も何度も不思議そうにその刀について尋ねたが、「そのうち分かる」の一点張りであつた。

操縦者「な、 なんだ……？ ……敵です！ ネウロイです！」

その時、操縦者の叫びが機内に響いたかと思うとネウロイの放つ光線が飛空艇を襲う。

美緒「つく！ 大丈夫か！ 土方！」

土方「だ、 大丈夫です……」

芳佳「は、 早く治療を！」

大きく機体が揺れ、 負傷した土方を芳佳が直ぐ様治療する。

美緒「振り切れないのか！」

操縦者「駄目です！ 相手の足が早くて……」

美緒「救難信号を出しておけ！ 私が出る！」

土方「む、 無茶です！ まだこのストライカーゴニットは……」

芳佳「喋らないでください！ 傷に響きます！」

強引に出撃しようとする美緒を土方が止める。 美緒の新型ストライカーゴニットはまだ終わっていなかつたのだ。

芳佳「これで一応の手当は終わりました…… でもまだ激しく動いちや駄目ですよ！？」

土方「動ければ大丈夫です。 自分達がストライカーゴニットの最終調整をします。 それまでなんとか凌いでください！」

操縦者「もう無理ですよ！ ネウロイは目と鼻の……いや……あれはヴェネツィアの艦隊です！」

こちらを狙わんとするネウロイに砲撃が火を拭く、 下の海にはヴェネツィアの艦隊が広がりネウロイに攻撃を仕掛けている。 しかし、 その攻撃はネウロイの足止め程度にしかならない。

美緒「駄目だ…… やはり通常兵器ではネウロイに…… ネウロイの力も強くなっているのか！ 調整を早くするんだ！」

土方「了解！」

土方や他の整備兵達は急いで美緒の新型ストライカーゴニット「紫電」の整備にと取り掛かっている。 芳佳「……坂本さん、 私が出て時間を稼ぎます！」

美緒「無理だ、 お前には半年のブランクがある」

芳佳「大丈夫です、 盾交わりにはなります。 それに、 私が行かなければ下の艦隊も大きな打撃を受けてしまいます」

美緒「……すまん宮藤、 すぐ私も行く。 数分時間を稼いでくれ、 ロマーニヤのウイツチ部隊に援軍を要請した。 必ず助けは来る

筈だ！」

多少困ったような表情を浮かべた美緒であつたが、芳佳の瞳にはかつてのような迷いや弱々しさが感じられない。今の彼女にはらば、任せておける。そう確信した美緒であつた。

芳佳「了解しました！ 富藤芳佳！ 出撃します！」

小さく息を吐いて、芳佳は飛空艇から空にと舞い上がった。

芳佳「（久しぶりだな……この感覚）」

空を駆け、艦隊の間をすり抜けてネウロイの元にと飛ぶ。芳佳の姿を見た船員達は次々と歓声を上げて彼女を見送った。

ネウロイのコアが赤く発光し、艦隊に光線の雨を降らせた。

芳佳は空中で気合を入れ、巨大なシールドを展開した。

操縦者「す、凄い！ なんてデカさだ！」

美緒「（ブランクなんて物じやない……まだまだ成長途中なのか……あの魔力、羨ましい物だ）」

才能の表れであるシールドのデカさ。芳佳のシールドはストライクウィッシュチーズどのウィッシュのシールドよりも大きかつた。彼女の魔力は今や底なしと言える程に成長していった。

芳佳「あのネウロイ……堅い！」

前大戦からの愛銃である機関銃を齊射し、数度に渡り攻撃を仕掛けるが分厚い装甲と驚異的な回復力で中々ネウロイにダメージを追わせる事が出来ない。

芳佳「なんとか……引きつけなきや！」

やはり、ネウロイはドンドンその力を増して来ている。物の数分で眩いばかりの光線は芳佳を次々と襲い回避とシールドを使った防戦を強いられる事になってしまった。

芳佳「艦隊からは……よし引き離せた」

一瞬の気の緩み、艦隊からネウロイを引き離せた事を確認する為に目を切つてしまつた芳佳に数十の光線が襲い掛かる。シールドを張る時間すらなくなんとか回避するが、光線が芳佳の真横をかすめて体勢を崩して落下を始めてしまう。

芳佳「落ちてる……シールド張らな えつ！？」

パンツと発砲音が何度も響きネウロイに直撃する、 芳佳が体勢を

立て直して振り返ると物凄いスピードでウイッチが近づいて来た。

シャーリー「イッヤッホーイ！ 久しぶりだなー宮藤！」

芳佳「しゃ、 シャーリーさん！？」

挨拶だけ残してシャーリーはネウロイにと攻撃を仕掛けに飛び込んだ。 その後ろからスリーと近づいて来るもう一人の少女。

ルツキー「チャオー芳佳、 久しぶりだねー」

芳佳「ルツキーちゃんも！ どうしたの！？」

ルツキー「どうしたも何も

リーネ「芳佳ちゃん！」

芳佳「リーネちゃん！」

リーネが芳佳の元にと飛んで来て一人は再会の抱擁を交わした。

ルツキーもシャーリーと共にネウロイにと攻撃を仕掛ける。

ペリース「まつたく、 抱き合つてる場合じゃありませんわ。 なんですねあのネウロイは

芳佳「凄い堅くて……回復力も凄いんですね！」

ペリース「なら、 皆で行きますわよ！」

そう発したペリースの上空を数発のロケット弾が飛翔する。

ペリース「ロケット弾！？」

芳佳「つて事は！」

遠くから飛んで来るのはエイラとサーニャ、 彼女達も芳佳達の姿を遠目に捉えて一人で笑いあつた。

エイラ「じゃあ、 私先に行くカラ」

サーニャ「うん」

ロマーニャ沖にと集結する伝説の魔女達、 戦力差は完全にひっくり返り次々とネウロイの装甲を剥がして行く。

土方「坂本さん！ あと一分程で出れます！」

坂本「懐かしい面々が集まっているようだ……同窓会気分と言つてられないか」

飛空艇の中で美緒が微笑む、彼女達の動きは半年前となんら変わらず俊敏で、これならば今回のロマーニヤ解放戦もきっと戦い抜けると美緒は強く信じる事が出来た。

シャーリー「おいおい！ 攻撃がドンドン激しくなつて来てるぞ！」
ルツキー「最後の力振り絞つてるんだよ！ もうちょいもうちょい！」

ネウロイは特大の光線を放とうと光線を集中させる。その力を集中させている付近の装甲を遠くから数発の弾丸が狙撃し光線を妨害する。

そこまでよ！

可愛らしい声が戦場に響く。一人ポーズを決めた少女が空中に浮んでいる。

エーリカ「カールスラント華撃団、参上！」

一人笑顔でそう決めているエーリカを尻目に、彼女の後ろにいて居た二人は彼女を無視して芳佳達と合流に向かう。

エーリカ「ちょっとおー！ 一緒に合わせようつて言つたじゃん！」
バルクホルン「だからそれは私達じゃ決まらないと何度も言つたら分かるのだハルトマン！ 何より今は戦闘中だ！」

ミーナ「……ほら、行きますよ。皆さんが呆れているわ」

芳佳「ミーナさん、ハルトマンさん、バルクホルンさん……凄い……皆集まつちゃつた……」

美緒「私を忘れて貰つちゃ困るな」

ペリーヌ「しょ、少佐！ お久しぶりです！」

美緒「ああ、久しぶりだなペリーヌ、ミーナ、では行こうか」

ミーナ「ええ、それでは、攻撃開始！」

欧洲の空にと再び舞い戻つて来た伝説のウイッチ達。ストライクウイッチーズの前では通常の大型ネウロイ一体では相手にならないだろう。彼女達の流れるような連携攻撃の前にネウロイはドンドン追い込まれて行く。しかし、中々最後の決め手となるダメージを与えない。相手方の回復力が想像以上の物だつたのだ。

美緒「私が行く！」

ミーナ「美緒！」

ペリー・ヌ「無茶ですわ！」

眼帯を外し、相手からの光線を搔い潜りながら敵の上空にと入り込む。

美緒「くらえ 烈風斬！」

ついに抜刀した美緒はそのままネウロイにと斬りかかり、なんとネウロイを真つ二つに切り裂いてしまった。

シャーリー「えええ……まじかよ坂本少佐……」

エーリカ「……なんかデジャブ」

ルッキー「すーーーい！ 淫いよ坂本少佐！」

喜んだり驚いたりしているウイッチ達の元に美緒が戻つて来て「ウイッチに不可能は無い」と豪快に笑っている。

ウイッチ達はそのまま新しく『えられた基地にと帰還した。

芳佳「そうだつたんですか……私ストライクウイッチーズが再集結されるなんて知りませんでした……」

シャーリー「急だつたしな、私達だつて急いて来たんだぜ！？」

ルッキー「ねーシャーリーは本当に大急ぎだつたもんねー？」

シャーリー「……余計な事言うな！」

ミーナ「では、皆さん。正式にストライクウイッチーズとして再び戦つて貰う事になります。今度の目標はロマーニヤ上空に現れた新たなネウロイの巣の撃破です。また皆さんと戦える事が出来て嬉しいわ」

ミーナが皆に笑顔を向けてそう発するが、何処か皆ソワソワとして、辺りをキヨロキヨロと見渡している。苦笑を浮かべてミーナはコホンを小さく咳払いしてから更に言葉を続けた。

ミーナ「恐らく皆さんが今探している方は。今回ストライクウイッチーズには参加しません。私達だけルッキー「ええー！？ なんでえー！？ 芳佳達一緒に来たんじやないのーー？」

芳佳「え、えっと。今帝都は結構忙しいみたいで……」

エーリカ「花見の約束だつてうやむやになつちやしい……まあ仕方無いかあ……」

エイラ「仕方無く無いダロ！ どうせ帝都で恋人達と色々ヤツてるんだ！ 来ないと華撃団の皆に色々バラすゾつて言えば来るツテ！」

サー二ヤ「駄目よエイラ……それじゃあ困らせてしまう事になるわ……」

美緒「ミーナ、そ、その……本当に無理なのか？」

皆それぞれの反応を示していくミーナはどれほど彼がウイッチ達の中で大きな存在になつていたのかを再認識する。

ミーナ「現状では無理との事です……が、再度要請してみます。

富藤さんの言つ通り。今帝都は大きな戦いを乗り越えたばかりで混乱しています。その混乱が收まれば、きっと私達を助けてくれる筈です」

バルクホルン「ふん、皆依存し過ぎだ。本来、ストライクウイッヂーズは我々だけの部隊だつたのだ！ 我々だけでも十分戦う事は出来る」

エーリカ「夜な夜な枕を濡らしてた人が言つ言葉かなー？」

バルクホルン「ぬ、濡らしてなどいない！ それはお前だらうハルトマン！ とにかくだ！ 我々だけでもしつかりとやれると見つ事を見せてやろうではないか！」

ミーナのサポート役だけあつて皆に喝を入れるバルクホルンであつた。

こうして、ロマーニヤでの新たな戦いが始まった。

本来ならば違つた結末を迎える筈だつた歴史は一人の男によつて変えられた、この世界の行く末がどうなるのかまだ誰にも分からないだろつ。

次回予告 ペリーヌ「わたくし程のウイッチが再特訓ですつてえ！」

? しかも豆狸と一緒にい！？
らいするのも悪く無いですね。

……まあ、久々に基本をおさ
次回『一緒に出来る事』鍛え
て調子を戻しておきますから……早く来なさい！

第一話「一緒に出来る事」（前書き）

ストライクウェイツチーズ2×サクラ大戦SISです

第一話「一緒に出来る事」

第一話「一緒に出来る事」
私、 宮藤芳佳がロマーニヤに来てから一週間が過ぎました。
基地の整備も進み、 ようやくストライクウイッチーズが動き始めたのですが、 私やリーネちゃん、 それにペリーヌさんはこの半年前線に出て居なかつたので少し練度が落ちてしまつてゐるみたいなんです……ついに坂本さんとミーナ中佐から再訓練をいいつけられてしまいました……

扶桑国帝都、 帝国劇場地下光武格納庫。

紅蘭「珍しくお偉いさん連れて地下に来たと思つたら……はあ～また難儀な事言いだすんやねえ～」

多くの整備兵達が右往左往して光武の整備を進めてゐる中、 米田中将と数人の男が珍しく地下の格納庫にとやつて來た。 米田は前回の戦い、 怨靈となつた大久保長安との戦い以降支配人と帝国華撃団総司令の座を大神にと譲つてゐた。 しかし、 まだ自分に出来る事はあると軍には留まつていたのだった。

紅蘭「双武を作つたのではら大仕事やつたのに……そりて発展させて決戦兵器を作れなんて」

米田「時間はまだある、 人類反撃の象徴となるよつなド派手な機体作つてくれや。 建造費用は言い値で出すからよ」

紅蘭「ほんまに!? じゃあ前からやつて見たかつた……そうや確か試作型がこの奥に！」

物凄い音を立ててガラクタの山を漁る紅蘭、 一人のその姿を訝しげに見つめるが米田がそれを察し笑つて一人を小突く。

米田「心配すんなつての、 間違ひなく帝国華撃団、 いや日本でも有数の頭脳だ、 必ずや作りあげてくれる。 じゃあ紅蘭、 僕達はそれを伝えたかつただけなんでな」

紅蘭「あ、 ちょい待ち！」

ガラクタをひっくり返していた紅蘭は去りうとしていた米田を引き止めジッと見つめる。

米田「なんだ、 じうしたんだ」

紅蘭「聞いたんやけど、 またロマーニャでストライクウェッチャーが再集結したらしいやないですか」

米田「……耳が早いこつて」

紅蘭「また、 行くん？」

米田「後片付けが一段落したらって事で今は断つてるよ……まあでも再三に渡つて要請は来てるな」

紅蘭「……だから程々にせなアカンって言つたんや！」

紅蘭は珍しく頬を膨らせて自分が制作したガラクタ漁りに戻る、彼がブリタニアから戻つて来て半年、 巴里から合わせて一年半も彼とろくに会えなかつたのだ。 まだまだ彼と一緒に居たと言つるのは帝劇の総意であつた。

米田「ハハ、 しつかりと手綱握つとけよ？ 男を捕まえるにや袋を掴めてな。 開袋か玉」

紅蘭「こんな所に轟爆飛翔君が、 ちょっと起動して」

米田「じゃあ俺らは仕事もあるんでな」

紅蘭「……出来るもんならもうしてるわアホ」

逃げるよう帰つて行つた米田達をジトつと見つめる紅蘭であつた。

最後のセクハラはともかく、 既に米田達軍部は作戦に向けて動きだしている。 事態は少しづつ進展を見せているようだ。

ロマーニヤ公国、 ストライクウェッチャー基地。

美緒「……またミスか」

ミーナ「問題ね」

午前中の飛行訓練で結果が思わしくなかつた三人、 芳佳、 リーネ、 ペリー・ヌは居残りで午後も訓練となつていた。 それでも半年のブランクはそう簡単には埋まらない。 美緒は彼女達の飛行を

見守っていたが、しばらくしてから彼女達を呼び出した。

美緒「駄目だな、思つた以上だぞ」

芳佳「……『ごめんなさい』

ペリー・ヌ「恥ずかしい限りですわ……」

リーネ「うう……」

彼女達は皆俯いてしまい申し訳なさそうにしている。

美緒「仕方あるまい。いい機会だ。再特訓して来い、幸いな事に近くに私も教えを受けた魔女が居る」

ペリー・ヌ「少佐が教えを受けた！？是非行かせてください！」

芳佳「頑張つて感覚を取り戻して来ます！頑張ろうねリーネちやん！」

リーネ「うん！芳佳ちゃん！」

美緒「よし、では連絡を付けてやる。お前達は準備をしておけ」芳佳達は元気に返事を返した。早くもその日の内に美緒が言う魔女に連絡が付き、次の日から預かって貰う事となつた。

ルッキー「ええー再訓練！？なんか面白そー！」

バルクホルン「少佐の先生か……どんなウイッチなのだらう」

その日夕食、皆でテーブルを囲んで食事をする。

坂本「ウイッチと言うか……魔女つて感じの人だな」

芳佳「魔女……ですか？」

リーネ「昔はウイッチじゃなく魔女つて言つていたらしいけど……」

皆は坂本の言葉に？マークを飛ばしたが、坂本は行けば分かると話を終わらせた。

シャーリー「そいつ言えば中佐、扶桑側はなんて言つていたんですか？」

ミーナ「ううね、同じよ。別件が片付いてから検討する」の一点張りね」

エーリカ「シャーリー気になつて気になつてしちゃうがないもんねー？」

シャーリー「な、なんだよー。この前はハルトマンが聞いていた

じゃないか！」

エイラ「最後に会つてからもう半年……少佐は扶桑であいつと会つてたノ力？」

やはり、彼の事は一日一回話題に上がるようであった、彼女達は相当彼を心待ちにしているようであった。

美緒「ん？ いや……別に会つてな」

エイラ「まさかとは思うケド、誇り高き扶桑海軍の坂本美緒少佐が嘘なんて付かないよナア？ そう思つダロ皆？」

エーリカ「そうだよねーちゃんと本当の事言つてくれるよね」

美緒「……何が言いたい」

エイラ「そ、そんな怖い顔で見ないでくれヨオ……だつて、少佐はあの馬鹿を部屋にコツソリ呼び出したりしてたじやナイカ！ 帝都に帰つてからだつて何かしてたカモつてシャーリーが言い出して……それで……」

シャーリー「エ、エイラ！ あの時はお前が！」

エイラ「でも言つたのはシャーリーダロ！」

美緒「……そつかそつか、お前達は私の事をそういう女だと思つていたのか」

俯き気味の美緒から表情を読み取る事は出来ず、ドスの利いた声にビビりまくるエイラ。

エイラ「あああ、いや、違うんだッテ！ オイズるいゾ！ シヤーリーや中尉に大尉、ツンツン眼鏡やリー・ネだつて気になるつて言つてたじやナイカ！」

バルクホルン「な、何を言つか！ あれは……違うんです少佐、私は勿論少佐を信じています！」

ペリース「わたくしもですわ！ エイラさんが勝手に疑つているんですわ！ 勿論何もしていないですわよね少佐！」

皆の視線が美緒に集まる、固唾を飲んで美緒の言葉を待つ一同。

美緒「あ、当たり前だろ？！ 軍人たるものい、色恋沙汰は厳禁だ！」

「（メッシュチャ狼狽してんじやん…）」

皆の心の叫びが一致した。 どう見ても狼狽している美緒、 心なしか頬も薄く染まっている。

エーリカ「……ミヤフジは一緒に坂本少佐と来たんだよね？ 機内で坂本少佐何か変わった事言つてた？」

美緒「こ、この話はもうお終いだ！ 明日に備え富藤、 リーネ、

ペリー・ヌの三人は体を休めるよつて… 富藤今日も美味かつたぞ！」

そそくさと食器を下げて食堂から逃げした美緒、 残された皆は下世話な想像を始める。

エイラ「あのリアクションは……まさか最後マヂ？」

ペリー・ヌ「な、 な、 何を言つていますのエイラさん！ そんな訳ないでしょ…」

サニー・ヤ「エイラ……下品」

エイラ「サニー・ヤだつて気にしたじゃナイカ！ 皆して良い子ブツて私にだけ聞かせるなんてズルイゾ！」

ミーナ「はあ……ほら皆さん、 ここに辺にして今日は休みましょう。 富藤さん、 リーネさん、 ペリー・ヌさん。 明日から頑張つてくださいね」

ミーナの仲裁でようやくその場は収まった。 解散した彼女達はそれぞれ部屋に戻り体を休めた。

ペリー・ヌ「ここら辺の筈なのですけど…」

リーネ「あのお家でしょ…」

翌日、 芳佳達は最小限の装備だけを持ち美緒に紹介された魔女の元にとやつて來た。 早朝から出発して付いたのは朝食が終わる頃の時間だった。

彼女達を迎えたのは老齢に差し掛かろうとしている女性だった。

相當に口が悪い女性であつたのでペリー・ヌは怒り始めたが修行はすぐには開始された。

ペリー・ヌ「まつたく、 なんなのです？ 今の時代に幕での飛行

だなんて

芳佳「で、 でも……かなり難しい……」

彼女達に言い渡された修行はストライカーコニットではなく箒で飛行し、遠く離れた井戸から水を汲んでくるというシンプルな物であつたが、普段ストライカーコニットで飛ぶ事に慣れている彼女達は箒での飛行にかなり苦戦していた。

アンナ「機械に頼っているからさ、 最近のウイッチ達は基本的な魔力の運用がまったく出来てないんだよ。 まずは力を抜きな」

リーネ「あつ……」

アンナがグッとリーネの箒を股間にと押し付ける、リーネはビクツと仰け反つて思わず声を出す。

アンナ「魔力の流れを良くする事で継戦能力の向上や固有魔法を効率的に運用出来る。 とにかく行つてきな！」

芳佳「は、 はい！」

老齢の魔女に一喝され芳佳達はフラフラと箒で空に上がつて行つた。一度の往復で組める水はバケツ一個、それを三人で行つているので一往復でバケツ三つ、一日に使う為の水を運ぶにはあと何往復もしなければいけない。

ペリー・ヌ「これで本当に……感覚が取り戻せるんでしょうね！」

芳佳「ん……食い込む……」

ただただキツい修行に音を上げそうになりながらもなんとかその日に必要な水を確保出来たのは日が暮れてからの事だった。

その日の夜、ガリア重要都市巴里、シャノワール。

エリカ「んふふー ふふふー」

巴里華撃団の面々は帝都での戦い、大久保長安との戦いにも参加していた。

その戦いを終えて巴里に帰つて来たのが一月程前、それまで休止していたシャノワールのショウも再会されて今日も控室で彼女達は準備を進めていた。

その中でも一際上機嫌なのが彼女であった。

グリシーヌ「……また今日も上機嫌だな隊長代理よ」

エリカ「ええ？ そうですかねー？」

ずっとこの調子なのだ、 大久保長安との最終決戦から常に。

グリシーヌ「そうだ！ 上機嫌なのは結構だが！ 以前にましてシヨウで転ぶメルやシーとぶつかる小道具は壊す！ 少しは気を引き締めたらどうなのだ！」

エリカ「はーい、 気をつけまーす！」

グリシーヌ「むむむ……エリカ！ 言つておくぞ！ あの時は……あの時の隊長の選択は仕方無くだと言つ事を忘れるな！」

エリカ「何言つてるんですかー大神さんは……大神さんは私を私を正妻に……私を選んで……はああ……」

自分で自分を抱きしめてクネクネと動いているエリカ、 うぬぬと唸るばかりのグリシーヌであった。

グリシーヌ「違う！ たまたまエリカと隊長の靈力の相性が良かつただけだ！ あれは別に正妻云々の話では無い！」

扶桑初の複座式光武『双武』は搭乗者の靈力の質が似通り、 尚且つ二人のコンビネーションが正確に一致しなければその強力な力を制御出来ないと言う弱点があった。

その話が帝国華撃団、 巴里華撃団の面々に通達された時。 確かに帝劇は地獄であった。

我こそが最高の相性だと言い合つ彼女達を前に、 散々迷った拳句に靈力の総量、 そして窮地で発揮される火事場の馬鹿力を見込んで彼はエリカの手を取つたのであった。 それをエリカは双武のパートナーどころか人生のパートナー的な物と受け止めた。 『……優しくしてくださいね？』と呟いたエリカの後ろには、 恐ろしいまでの靈力が荒れ狂つていたと言う。

エリカ「違いますー！ あれはそういう事なんですよー！」

ロベリア「妄想は程々にしつけよ、 頼むから私達のショウに影響を及ぼすようなトチリ方しないでくれ」

グリシーヌ「そうだ！ 第一、もうすでにブルーメール家はそれなりのポストを準備しているのだ……隊長は是非ブルーメール家に……」

花火「すみれさんも同じような事を仰つていましたけど……」
この一ヶ月ずっとこのような感じで、エリカはすっかり上機嫌なものであつた。

エリカ「そう言えば聞きましたか？ ロマーニャでストライクヴィッチーズが再結成したらしいですよ？」

グリシーヌ「うむ、再びネウロイの巣が出現したそうだ」

エリカ「同じ釜の飯を食べたお友達です！ いざとなれば私達も援軍に向かいましょう！」

コクリコ「そうそう！ もうちょっと頑張ればこの歐州も解放されるってこの前ラジオでやつてたよ？ 応援に行こうよ！」

エリカの言葉にコクリコも賛同する。

ロベリア「水を差すようで悪いが、 そう簡単では無いと思うぜ。

元々ロマーニャ方面にはネウロイはそこまで居なかつた、 それがここに来て突如巣が現れた。 このままじや終わりの無いモグラ叩きだぜ」

花火「ブリタニアとガリアは既に解放されているので、 欧州各地の戦線に戦力が振り分けられ人類優勢との事です……信じたい物ですが……」

グリシーヌ「ネウロイの目的が未だに分かっていない。 なんの為に人類へ攻撃を仕掛けて来ているかさえ分かれば……」

ロベリア「だがな、 忘れちゃ困るのは家の本職は降魔退治だつて事だよ。 紹興でも華撃団が出来上がつちゃいるがまだまだ魔の者達がいつ現れるか……何だよ、 その目は」

ロベリアは皆の視線が自分に集まっているの事に気がついた。

エリカ「素晴らしいです！ やっぱりロベリアさんも正義の心を持ち平和を願つていたんですね！」

「クリ！」「うん、ちょっと前だつたらそんな事ぢつでもいい」と
か言つてたのに、

グリシーヌ「ふふ、世紀の大泥坊も一人の男でここまで変わるか

？」

ロベリア「つぐ！ つるさいんだよ！ 私は金さえ貰えればいいんだ！」

エリカ「何処行くんですかー？」

ロベリア「出番だよ！」

バン！ と激しく控室の扉が閉じロベリアが出て行った、多かれ少なかれ、彼と触れ合つた事で皆にも変化が出ていくようだ。

芳佳「気持ちいいー！」

ペリーヌ「ようやく慣れて来ましたわ」

翌日になると、早くも芳佳達は篝の修行に適応し始めていた。
まがりにもブリタニアとガリアを解放した伝説のウィッヂ達である。
その素質はすば抜けている。

今や小さなバケツ何処か、巨大な金タライを三人で協力して運んでいる。このペースだつたら昼過ぎには昨日一日掛けて運んだ水量を運べそうな勢いであった。

リーネ「あれ？ あれは……」

芳佳「どうしたのリーネちゃん？」

その時、狙撃手であるリーネはいち早く遠方から迫る物体に気がついた。芳佳やペリーヌもそれに遅れる事数秒で迫り来る物体がネウロイである事を察知する。

同時に、ロマーニャ新ストライクウイツチーズ基地。

観測兵「報告します！ ヴェネツィア方面からネウロイが出現！
数は一！ 目標は真っ直ぐに海上を移動しています！」

観測兵の大声が響く。直ぐ様ミーナと美緒は地図を広げて進路を予測する。

ミーナ「陸地にはほほかすらない。迎撃場所は海上になるわ。

私達の管轄外ね」

美緒「いや……唯一かする陸地……」」は！」

美緒は血相を変えて通信機を取った。

芳佳「アンナさん！　ここにネウロイが！」

アンナ「今、あんたらの上司から連絡があった。基地からの部隊は今からじや間に合わないそうだ。さつさと逃げな。私も避難する」

芳佳「でも……このお家にはお孫さん達が！」

昨夜、芳佳達が眠れずに夜風に当たつているとアンナが早く寝ろと注意しにやつて來た。その時、アンナから色々と話を聞いていたのだった。海辺にあるアンナの家にと続く橋。今日この橋を渡つて家に孫達が疎開して來る事。久々に孫達とゆっくりと過ごせる事。修行の際はあまりの厳しさに内心アンナを心良く思つていなかつた芳佳達であったが。嬉しそうに話すアンナを見て少しづつ打ち解けていたのだった。

アンナ「いいから逃げな！ 対抗手段も無いのに出たら無駄死するのがオチだよ！」

芳佳「……逃げません！」

宮藤芳佳は強い口調でそう答えた。かつての彼女では絶対にあり得ないような強い口調で。その迫力にアンナも押される。

芳佳「こんな時……あの人だったら絶対に逃げません！ 眼の前に困つて居る人が居る、助けを求める人が居る！ 絶対に……止めてみせます！ それが、ストライクウィッচーズです！」

アンナ「……」

芳佳「行こう！ 皆！」

ペリー・ヌ「ええ」

リーネ「うん！」

第から鋼鉄の第へ。彼女達は空にと物凄いスピードで登つて行つた。

芳佳「（凄い……軽い！）」

修行によつて大きく、彼女達の能力が上がつた訳ではない。変わつたのは魔力の使い方。これまでストライカーコニットを動かす為に十の魔力を使つていたとするならば。今現在彼女達はその半分以下でストライカーコニットを運用出来てゐる。

ペリー・ヌ「私とリー・ネさんが編隊で攻撃！ 宮藤さんは援護して！」

芳佳・リー・ネ「了解！」

ネウロイもこちらに気がつき攻撃を開始する。光線を掻い潜りながら彼女達は修行の成果を実感する。

だが、向こうの防御力も高くコアを撃ちぬく事が出来ない。

ペリー・ヌ「やはり……私達三人では大型ネウロイを……」

芳佳「大丈夫、出来るよ！ 三人同時に同じ箇所に攻撃出来れば！」

光線を避け、ネウロイの下方にと回りこむ。

リー・ネ「そんな……高度なテクニック出来るかな……」

芳佳「これまで一緒に戦つて来たんだもん、きっと出来るよ！」

笑顔の芳佳を見てリー・ネとペリー・ヌも覚悟を決めた。

ペリー・ヌ「行きますわよ！ 攻撃開始！」

ペリー・ヌの声に従い三人は攻撃を集中させる。一点に攻撃が集まりネウロイのコアがむき出しになる。

芳佳「見えた！ リー・ネちゃん！」

リー・ネ「うん！」

三人の内でもつとも火力のあるリー・ネが最後の砲撃を浴びせ。ネウロイを無事撃破する事が出来た。

美緒「そうですか、無事撃破出来ましたか」

アンナ「まさか二日で修行を終えちまつとは驚きだよ。あんたもいつでも鍛え直してやるよ」

美緒「ハッハッハ！ ではまたよろしくお願ひします」

内心クソババアと毒づきながらも美緒は孫達の騒ぐ声が聞こえて来る通信を切つた。

ちょうどその頃、修行を終えた芳佳達が基地にと帰還して来たの

であった。

それから一週間後、東京湾某所。

早朝の埠頭には数人の作業員だけが集まっており。荷物の積み込みが急がれていた。

「つい昨日作業が一段落したばかりですのに」

「すまない。あれほど要請があると言う事は、やはり何があるんだと思う。小型蒸気潜水空母まで貸して貰つて……感謝しているよ」

一人の少女が男を見送りに来ていた。男は潜水艦の前に立ち少女に答える。

「知りませんわよ、皆さん寂しそうにしていましたし。私は平気ですけども」

「頑張つて終わらせて来るよ。待つて居てくれるかい？」

「……ええ、待つてありますから。早く帰つて来なさい……」

一隻の潜水艦が歐州に向けて出発して行つた。

次回予告 芳佳「現れた新たなネウロイ、今までのネウロイとはまったく違う攻撃に私達は苦戦を強いられました。その戦いの中、運命の砲撃が飛来する。次回『約束の空』」

第三話「約束の空」（前書き）

ストライクウェイツチーズ2×サクラ大戦SS

第三話「約束の空」

第三話「約束の空」

私達ストライクウイッチーズがロマーニヤ公国で再結成してからもう少しで一ヶ月になるとしています。私達前線を離れていたウイッチも徐々に勘を取り戻し哨戒任務に励んできました。ようやくあの頃のストライクウイッチーズが戻つて来たと坂本さんも嬉しそうです。それでも、やっぱり皆何処か寂しそうな表情をたまに浮かべています。仕方の無い事なのですが、私も少し寂しいです。

美緒「新型のネウロイ……か」

ミーナ「ええ、歐州に限らず世界中で一定の周期で新型ネウロイが確認されている。ネウロイは戦いの度に成長しているようね……」

バルクホルン「……埒があかんな。出来る事なら本丸を見つけ出して叩きたい物だが……」

昼下がりのストライクウイッチーズ基地、執務室。

美緒を始めとする上級の士官達が顔を揃えて作戦を確認している。相変わらず世間は人類反撃の機運だと好き勝手に言つて居る物の現場はそう簡単な事だとは考えていらない。

ネウロイの戦力は相変わらず驚異的だ。いつこの攻勢が崩れるかは分からぬ状況なのだ。

美緒「更に、何処からか戦力を回して貰える余裕は無い。私達だけでロマーニヤの巣を叩かなければいけない」

ミーナ「ブリタニア・ガリア解放戦では多くの艦が動いてくれました。艦にネウロイさえ近づけなければ戦艦でも小型ネウロイを駆逐出来ると実証されたのは大きかつたけど……今回は流石に前回程動員出来ないでしょうね」

バルクホルン「……認めたくは無い物だが、やはり華撃団が居る
と居ないでは戦場の士気も違う。多くの船員や我々が感じたよう
にあの絶対に勝てるという根拠の無い自信は奴らじや無ければだせ
まい……なんだミーナその目は！」

ミーナ「華撃団、かしら？」

珍しくからかうような口調のミーナにバルクホルンは頬を染めて声
を荒げた。

バルクホルン「ミーナ！私は真面目な話をしているのだ！」

ミーナ「冗談よ、巣の規模は現段階で前回最終決戦時の半分程。
まだまだ調査が必要ね。しばらくは偵察が主になるとと思うけど。

頑張つて行きましょう

美緒「よし、ここいら辺にしよう……所でミーナ」

ミーナ「相変わらずよ。今度は検討中の一点張りね」

最早、要件を伝えなくともミーナには理解出来るらしく。直ぐ
様答えを返す。この一ヶ月隊員が入れ替わりで聞きに来るのだ。
理解出来るのも当たり前だった。

美緒「そうか、分かった。昼飯にしよう

美緒達は執務室を後にして食堂にと向かつた。

食堂では相変わらず芳佳が配膳をしながら追加の料理を作つてゐる。

美緒「すまんな宮藤。私達の分も頼む」

芳佳「あ、坂本さん！分かりましたー」

バルクホルン「それで、ハルトマン達は何をやつてゐるのだ？」

食堂の奥にはウイッチ達が集まつて何やらエイラを囲んでゐる。

エーリカ「何つて、エイラのお悩み相談室」

美緒「何だ、悩みがあるのかエイラ」

エイラ「だから…私が皆の悩みを聞いてこのタロットで解決する
んだッテノ！何で皆して同じ事言つダヨ！」

エーリカ「前々からよく当たるつて聞いてたけど、本当によく当
たるみたいだよ。トゥルーデも想い人がいつ来てくれるのか占つ
て貰つたら？」

バルクホルン「……うるさいぞハルトマン、私は見学でいい！」
バルクホルンは少し離れた席にドッカリと座り芳佳から昼食の入ったお盆を受け取った。

エイラ「誰か居ないノカ？ 失せ物から迷い人まで何でも大丈夫ダゾ？」

エーリカ「うーん、じゃあ言いだしつペでもあるし。私が行くよ」

エイラ「そりかそりか、じゃあ中尉何でも聞いてクレ」

エーリカ「じゃあねー……好きな人が居るんだけど。その人がどんな感じの子が本当に好みかを占つて」

さらつと「好きな人が居る」と言つてのけるエーリカに皆は内心穩やかで無かつたが、ある意味その潔さは格好いい物だった。

エイラ「ちゅ、中尉の好きな奴がどんな馬鹿か知らないケド！ 一応占つて見るゾ！ うん、そうダナ！ スオムス生まれで白銀の髪が良く似合う器量良しが好みらしいゾ！」

サー二ヤ「……前もそれやつた」

エーリカ「第一、タロットめくつてないじゃん！ 本氣でやつてよ」

エイラ「い、いや……だつて……」

エーリカ「何か問題あるの？」

中々占いを始めるエイラを見てエーリカが疑問符を浮かべる。

エイラ「もし……もし自分と全然違うようなタイプが好みだつたらどうするんダヨ！」

エーリカ「……チキン」

シャーリー「チキンだな」

ルッキー「チキンー」

エイラ「うるさいゾ！ そういうのは無しダ！ もつとちゃんとたのを頼む！」

完全に赤面して、からかう三人を追い払うエイラ。その様子を見ていた美緒が今度はエイラに正対して座る。

美緒「面白そうじゃないか、 では私も何か占つて貰おうか」

エイラ「少佐か……手強そうダナ……」

美緒「だが、 私自身特に占つて貰いたい事は無いのだが……何占いが人気なんだ？」

エイラ「人気つて……でもまあ私達みたいな年頃の女が集まつたらやつぱり恋愛占いになるのかなあ……」

威厳ある美緒の恋愛占い、 これに興味の無い隊員は居ないだろう、芳佳までもがコソソリと聞き耳を立てている。

美緒「れ、 恋愛か？ いや、 私は……」

エイラ「大丈夫大丈夫、 占いは占いダカラ！ 当たるもハッケ当たらぬもハッケ！」

美緒「人事だと思つて……まあいい、 早くやつてくれ」

何だかんだ言つて美緒も年頃の女子である、 興味が無い訳では無い。

エイラ「任せてクレ……んと……近いうちに白馬の王子様が現れる……」

「……」

占いの結果に辺りは静寂に包まれる。 美緒だけはドギマギとした滅多に見れない表情を浮かべていたのだが、 しかし。

エイラ「……ブツ」

美緒「……エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉。 何故今

吹き出しそうになつたのか教えてくれないか？」

エイラ「あああ！ いや！ 違うんダッテ！ その……少佐は凛々しいから王子様つて言うより武士が騎馬に乗つて迎えに来るんじやないのかナア……とか思つタリ」

シャーリー「ククク……駄目だ腹筋が……」

バルクホルン「しょ、 少佐、 私は結構な事だと思い……ツク」

美緒「お前達……私だつて普通の女だぞ！ 王子様が来て何が悪いんだ！」

ルツキー「あ、 芳佳も笑い堪えてるー！」

美緒「宮藤い！」

芳佳「違うんです坂本さん！」

美緒が芳佳を追いかけて居る内に基地内に警報が響く。

ミーナ「敵襲！？」状況が掴めないので私とり ネさん、ペリー
又さん、そして宮藤さんは基地で待機！ 残りの皆さんは出撃し
てください！」

「「了解！」」

それまでの悪ふざけなど微塵も感じさせずに皆は直ぐ様戦闘態勢に
移行して行つた。

ミーナ「状況は！」

ミーナが指令所に着くと数人の通信兵が状況をまとめて居た。
通信兵「基地沖百五十キロの地点に正体不明のネウロイです！ 偵
察機の報告によるとまったく見た事の無い大型ネウロイだそうです
！」

ミーナ「伏兵の可能性は！」

通信兵「現在、辺り三百キロに目標ネウロイ以外の反応ありませ
ん」

ミーナ「分かりました。まだ状況が不鮮明です。坂本少佐、
指揮をお願いします」

美緒「心得た。行くぞ！ 出撃だ！」

ウイッチ達は美緒に返事を返すと大空にと向かい出撃して行つた。

ロマーニヤ沖、海底。

神崎重工社員「長い旅路でしたね、道中色々ありましたが。 よ
うやく欧洲ですな」

中年の男が部屋にノックして入つて来る。長い旅路の末、よう
やく青男は欧洲に到着したのだ。

「ええ、これも全て神崎重工のおかげです。感謝しています」

神崎重工社員「いえいえ、お嬢様のわがままにはもう慣れていま
すよ。何より、お嬢様が見込んだ男の頼みでありますから」

「恐縮です。 それでは自分は光武の整備に」

船員「大尉！ レーダーに反応有り！ かなりの『テカさ』です！」

「 そりゃ、 分かった、 すぐに行く！」

中年の男は青年が急いで走つていくのを邪魔にならないように避けてその後ろ姿を見送つた。

神崎重工社員「何より、 自慢になりますよ……あの『黒髪の貴公子』を運んだなんてね」

そう笑つた男も自分の持ち場にと戻つて行つた。

船員「近辺の基地からウイットチも出撃したようですが……どうしましょーか」

「……少し嫌な予感がする、 自分も出よう」

船員「了解しました。 緊急浮上！ 射出体勢に入れ！ ……光武の射出なんて初めてですが」

「大丈夫、 微調整は自分がやります」

青年はそう微笑む、 自分の光武にと向かつて行つた。

美緒「目標を確認！ 距離一万！ 各自攻撃を仕掛けるぞ！」

「「了解」」

各自が散開して目標に攻撃を仕掛ける、 しかしこのネウロイはいつもと様子が違うようだ。

ルツキー「何これー！？ 遅い！」

エーリカ「これだけデカければ的だよ……攻撃もそんなに激しくないし……」

バルクホルン「どういう事でしようか少佐？」

美緒「不気味だな……皆不用意に近づくな！」

エイラ「ネウロイにも失敗作があるんじやナイノカ？」

サーニャ「……！ 来ます！」

サーニャが珍しくそう叫んだ時、 その攻撃は始まつた。

オオオオ ンと、 涙まじい重低音が辺りに一瞬響く。 そしてウ

イツチ達全員に妙な脱力感が襲い掛かる。

ルツキー「うにや……何これ……」

シャーリー「体が重い……こんなんじや攻撃なんて……」

バルクホルン「皆氣をしつかり持て……攻撃が来るぞ……」

光線と触手のような腕がウイッチ達に迫る。回避したりシールドを張るので精一杯でそこから反撃など出来るよしも無かつた。

ミーナ「美緒！ 美緒！！ 何が起こっているの！」

芳佳「み、ミーナ中佐！ 皆の魔力反応が……」

ミーナ「なんて事……！ 精神攻撃とでも言うの……？」

指令所にあるメーターにはウイッチ達の魔力反応を示した値がメーター状に表情されている。その値は軒並み最低を示しており。飛行するのがやつとの状況であると指令所でも知る事が出来た。

ミーナ「美緒！ 逃げて！ 美緒！」

芳佳「ミーナ中佐！ 私が出ます！ なんとか出来るかもしれません！」

ミーナ「駄目よ！ 対処法が分からぬ今……貴方を行かせる訳にはいきません！」

芳佳「そんな……じゃあ皆は……！」

ミーナ「信じるしか無いわ……皆を！」

芳佳はきつづき握られたミーナの拳を見てそれ以上言葉を続ける事が出来なかつた。

美緒「皆！ 引くぞ……これ以上は無理だ……皆！ しつかりしろ

……」
バルクホルン「駄目だ……頭が回らない……」

皆の目からは最早生氣が感じられなかつた、 ただ棒立ちで空中に浮かんでいるだけであつた。

美緒「最早……これまでか……」

あの美緒の口から諦めの言葉がこぼれた。 巨大な新型ネウロイは触手を何本にも束ねて巨大な腕を作り、 それをウイッチ達に振り下ろさんと振り上げた。

その腕を、 正確無比の砲撃が捉える。

通信兵「敵ネウロイ砲撃されました！」

リーネ「高速で飛来する物体あり……」これは…

続けざまに砲撃が直撃する。 砲撃の主は空になつた光武用バズー

力を投げ捨て美緒の前にと降り立つた。

大神「遅くなつてすまない……大丈夫かい。 皆

美緒「……大神？」

ルツキー二「イチロー！」

バルクホルン「大神！」

サー二ヤ「……大神大尉！」

エイラ「一郎！」

シャーリー「一郎！」

エーリカ「……一郎！」

皆の前に降り立つた白銀の光武二式、 その中に乗るのは勿論あの男である。

大神「急いで来たんだが、 厄介そうな相手だね」

エイラ「お、 遅いんダヨ！ 来るなら……もつと早く来い馬鹿！」

シャーリー「まつたくだぜ、 かつこつけていい所で来やがつて」

エーリカ「……ちよつとかつこ良すぎてヤバいけどね」

さつきまでとは明らかに皆の表情が変わつていて。 皆、 この一ヶ月一様にこの瞬間を待ち望んでいたのだからそれも頷ける。

サー二ヤ「……音？ そうか、 この音で……」

サー二ヤのアンテナに微量の音が引っ掛かる。 サー二ヤの能力でなければ聞き取れない程のか細い音である。

大神「何か分かつたのかいサー二ヤ君」

サー二ヤ「はい、 敵は音波を飛ばして私達の魔力の流れや精神に攻撃をしていました……私がその音波の発信源を潰してみせます。

でも……ちよつとあの腕が邪魔で」

シャーリー「そういう事だつたら……！」

バルクホルン「私達に任せておけ！」

二人がネウロイにと飛び込んで行き。　触手が束ねられた腕に攻撃を加える。

腕は攻撃に弾かれその機能を奪われる。

エイラ「今だ！　サー＝ヤ！」

サー＝ヤ「流石です……シャーリーさん、バルクホルンさん」

サー＝ヤの砲撃が飛ぶ、全弾不可避のロケット弾が敵ネウロイにと直撃する。

通信兵「敵ネウロイに着弾！　押して居ます！」

ミーナ「……まったく、現金な子達ね」

ミーナの視線の先には魔力反応を示すメーター。術者の精神状態に大きく左右されるその反応。その反応は全て最大を示していた。

エーリカ「私達は触手のお片づけ！　行くよー！」

ルッキー「あいさー！」

エイラ「……白馬のつてより白銀だつたナア」

ウイッチ達は次々とネウロイにと攻撃を仕掛ける。先程まではとは明らかに動きが変わっている。彼女達にとつて。大神一郎が来るという事はそういう事なのだ。

大神「凄い触手の数だな！」

エイラ「一郎！　右上二秒後に左下！」

大神「ありがとうエイラ！」

美緒「シャーリー！」

シャーリー「おう少佐！　いけええ！」

シャーリーがいつもルッキーにしているように美緒を固有魔法「高速」で射出する。

一気にネウロイの頭上にと到達した美緒は抜刀して敵ネウロイの触手郡にと突撃する。

美緒「はあああ！」

迫り来る触手を片つ端から切り伏せ。敵のコアのみを目掛けて飛び。

美緒「くらえ　烈風斬！」

触手の群れを切り伏せ、そしてコアをも貫く烈風斬を放ち。敵ネウロイにと止めを挿した。

かなり強引に止めを挿したので少し体勢を崩してしまった美緒を大神の光武が優しく抱き寄せた。

大神「大丈夫ですか、坂本さん」

美緒「……ああ、大丈夫だ。少しストライカーコニットに無理を掛け過ぎたようだ」

大神「そうですか、では自分の光武で回収します」

そう言って光武のコクピットを開ける大神。

美緒「……」

大神「……坂本さん？」

ジックと自分を見つめる美緒に少し戸惑つて大神は声を掛けた。

美緒「……お前も、王子様つて柄じゃないな」

大神「あの……？ 坂本さん？」

美緒「なんでも無い。基地まで頼む」

そう言って、光武のコクピットに入り込んで大神にと体を預ける美緒であった。

美緒「まったく、帝国華撃団は本当に大した千両役者だよ」

大神「どういう事です？」

美緒「来てくれるなんて、私は知らなかつたんだぞ？」

基地へ向かう最中、皆は大神を囲むように編隊を組んで飛行している。

大神「あれ程要請があつたので……急いで来たんですよ」

美緒「まったく……だが助かつた、ありがとう……一郎」

大神「……無事皆を助けられて良かつた、またよろしく頼むよ美緒」

美緒「よし、ちゃんと出来てるな」

大神「やつぱり、慣れませんね……」

エイラ「うわあ……なんか名前で呼び合ひだしタゾ」

エーリカ「ありやーこれはやつぱ扶桑でする事してたパターンかなー」

シャーリー「……節操無いなあ一郎も」

「クピットでくつつく大神と美緒の間に割つて入るように通信が入つて来る。突然の出来事に流石の美緒もテンパッている。

美緒「な、なんだお前ら！ 盗み聞きとは趣味が悪いぞ！」

シャーリー「いや、少佐インカム付けたまだから勝手に聞こえて来てるんだけど……なんか一郎と少佐が名前で呼び合つてるといやらしい雰囲気が……」

美緒「シャーリー！ 違うぞ！ 私は名前で呼ぶ事を許してなど

エイラ「階級は少佐の方が上だけど年齢では一郎の方が上だからナア……一人きりの時は美緒つて呼ぶんだ！ とか言つたりトカ？」

美緒「言つてない！」

バルクホルン「そ、そうですよね少佐。 そんな事する奴など居ませんよね！」

エーリカ「当たるんだねエイラのタロット」

エイラ「ナ？ 言つタロ？」

美緒「貴様ら話を聞けえ！」

大神「何だか久しぶりの感覚だな……」

エーリカ「うん、久しぶりだね一郎。 色々覚悟してね」

大神「……どんな意味だい？」

基地では芳佳やリーネ達が滑走路に出て皆の帰還を待ちわびていた。着陸し、大神から光武から出ると皆がすぐに集まって来る。

大神「あらためまして、扶桑海軍大神一郎。 再びストライクウイッヂーズに着任します」

ミーナ「おかえりなさい大神大尉。 これで、ストライクウイッヂーズ全員集合ね」

芳佳「おかえりなさい大神さん！」

美緒「待つていたぞ」

ペリー・ヌ「まあ、久しぶりに扶桑のお茶受けが食べたかった頃ですしだ？」

リーネ「ペリー・ヌさん、ずっと大神さんの事待っていましたものね」

シャーリー「これで暇しなくてすむな」

ルツキー「うんうん！ やつと皆集まつたよー！ それじゃあ久しぶりに行つてみよー！」

大神「早速やるのかい？」

ルツキー「もつちるーん！ イチローが居ないと出来ないんだからー！」

ルツキーの言葉で皆がゾロゾロと大神の近くにとやつて来る。

大神「そ、 そつか……じゃあ久しぶりに、 勝利のポーズ！」

「決め！」

記録員にまた写真を取らせた一同であった。

こつして。 ようやくストライクウイッチーズは前大戦の状態に戻つたのであつた。

次回予告

シャーリー「まったく、 ハルトマンやエイラならともかく、 少佐まで一郎にベッタリとはねえ……ま、 私は自分のペースでまつたりゆつくり行くさ。 次回『エグい・ゴツい・まじやばーい』

……嫌な予感がガンガンにするな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601w/>

大神大尉が501統合戦闘航空団に着任するようです（第二期）

2011年10月7日22時20分発行